

志木市遺跡群 11

中野遺跡第50地点

西原大塚遺跡第43地点

2001

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 細田信良

志木市には、現在我々の先人たちが残した足跡とも言うべき埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が16遺跡確認されています。

本来、これらの貴重な文化財は現状のまま後世に伝えるのが望ましいのですが、土木工事等で現状保存が困難な場合は、代替措置として記録保存のための発掘調査を行うことになっています。

しかし、事業者が個人であって、その人が専用に用いる住宅建設などは、その発掘調査の費用負担などについて、困難な問題がありました。そのため、志木市では、1987（昭和62）年度から国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。

平成11年度は、確認調査・発掘調査等を併せ、29地点の調査を実施しましたが、本書は、この平成11年度に志木市教育委員会が発掘調査を実施した中野遺跡第50地点、西原大塚遺跡第43地点の調査成果を収録しています。

特に、西原大塚遺跡では、縄文時代中期の住居跡・土坑、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての住居跡が多く発見されました。

これにより、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っております。

末筆ながら、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成11年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。発掘調査は、平成11年4月1日より平成12年3月31日までの期間を対象とした。
3. 本書の作成において、執筆は以下のように分担して行い、編集は尾形則敏・佐々木保俊が行った。

尾形則敏 第1・2章

佐々木保俊 第3章 第1節、第2節 縄文時代の遺物、第3節

内野美津江 第3章 第2節 遺構

宮川幸佳 第3章 第2節 弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の遺物

4. 遺構・遺物に関する実測及びトレースは以下のように行った。

中野遺跡第50地点

遺構・遺物のトレース 深井恵子

写真撮影 尾形則敏

西原大塚遺跡第43地点

遺物実測 高杉朝子・二階堂美知子・宮川幸佳・矢野恵子

遺物のトレース 佐々木保俊・高杉朝子・二階堂美知子

遺構のトレース 矢野恵子

写真撮影 佐々木保俊

5. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

J = 縄文時代の住居跡 Y = 弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の住居跡

H = 古墳時代後期の住居跡 D = 土坑 F P = 炉穴 P = ピット

6. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会教育総務部生涯学習課文化財保護係（～平成12年3月）

志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当（平成12年4月～）

教 育 長 秋山 太藏（～平成12年6月）

細田 信良（平成12年7月～）

生涯学習部長 川目 憲夫（～平成12年3月）

谷合 弘行（平成12年4月～）

生涯学習課長 鈴木 重光（～平成12年3月）

土橋 春樹（平成12年4月～）

生涯学習課長補佐 金子 雅佳（平成12年4月～）

文化財保護担当主査 関根 正明

佐々木保俊

文化財保護担当主任 清水あや子（～平成12年3月）

新井由起子（平成12年4月～）

尾形 則敏

志木市文化財保護委員（5名）

神山 健吉（委員長）・井上 國夫（副委員長）・高橋 長次・高橋 豊・内田 正子

7. 発掘調査及び整理作業参加者

○中野遺跡第50地点

調査担当者 尾形則敏

発掘調査員 深井恵子

発掘協力員 鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子

○西原大塚遺跡第43地点

調査担当者 佐々木保俊

発掘調査員 内野美津江

発掘協力員 足立裕子・阿部公子・阿部ふみ子・飯田久子・井上麻美子・伊野部三千子・岩森 都
遠藤美智子・大井 文・神山久子・神山 博・岸田純一・黒田千恵子・小日向すみ子
清水七枝・鈴木百合香・高杉朝子・田代雄介・塚田和枝・土屋富子・中 路子
永井真理・名久井よし江・成田しのぶ・二階堂美知子・野村貴子・久留浪子
松崎陽子・宮川幸佳・矢野恵子・油橋由美・吉川泰央・吉田信江・渡辺日出男

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。

記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

会田 明・浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・碓井三子・飯田充晴・井上洋一・上田 寛

梅沢太久夫・江原 順・岡本東三・織笠明子・織笠 昭・柿沼幹夫・加藤秀之・片平雅俊

隈本健介・栗島義明・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・斉藤欽廷・笹森健一

塩野 博・斯波 治・白石浩之・実川順一・鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木重信・鈴木正博

隅田 眞・高橋 学・田代 隆・田中英司・田中広明・坪田幹男・照林敏郎・中島岐視生

並木 隆・根本 靖・野沢 均・土師由美・早川 泉・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖

藤波啓容・堀 善之・松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村上伸二・柳井彰宏

山田尚友・柳田敏司・和田晋治

中野遺跡第50地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡第43地点（開発主体者 個人）

目 次

はじめに

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第1章 平成11年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	6
第2章 中野遺跡第50地点の調査	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 古墳時代後期の遺構	10
第3節 遺構外出土遺物	10
第3章 西原大塚遺跡第43地点の調査	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 検出された遺構と遺物	13
第3節 小結	90

報告書抄録

図 版

插图目次

第1図	市域の地形と調査地点 (1/20000)	2
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	8
第3図	遺構分布図 (1/200)	9
第4図	7号住居跡 (1/60)	9
第5図	遺構外出土遺物 (1/3)	10
第6図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	11
第7図	遺構分布図 (1/300)	12
第8図	28号住居跡 (1/60)	14
第9図	28号住居跡炉跡 (1/30)	14
第10図	28号住居跡出土遺物 1 (1/4)	14
第11図	28号住居跡出土遺物 2 (1/3)	15
第12図	65号住居跡 (1/60)	17
第13図	65号住居跡出土遺物 1 (1/4)	18
第14図	65号住居跡出土遺物 2 (1/3)	18
第15図	66号住居跡 (1/60)	20
第16図	66号住居跡出土遺物 1 (1/4)	20
第17図	66号住居跡出土遺物 2 (1/3)	21
第18図	68号・70号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	23
第19図	68号住居跡出土遺物 (1/3)	25
第20図	69号住居跡 (1/60)、埋甕・炉跡 (1/30)	26
第21図	69号住居跡出土遺物 1 (1/4)	27
第22図	69号住居跡出土遺物 2 (1/3)	27
第23図	70号住居跡出土遺物 1 (1/4)	28
第24図	70号住居跡出土遺物 2 (1/3)	28
第25図	71号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	29
第26図	71号住居跡出土遺物 1 (1/3)	30
第27図	72号住居跡 (1/60)	32
第28図	72号住居跡出土遺物 (1/3)	32
第29図	73号住居跡 (1/60)	34
第30図	73号住居跡出土遺物 (1/3)	35
第31図	74号住居跡 (1/60)	38
第32図	74号住居跡出土遺物 1 (1/4)	39
第33図	74号住居跡出土遺物 2 (1/3)	41
第34図	4号埋甕 (1/30)	43
第35図	埋設土器 (1/4)	43
第36図	354~359・361~364土坑 (1/60)	44
第37図	365~369、372~377土坑 (1/60)	46

第38図	土坑出土遺物 1 (1/3)	49
第39図	土坑出土遺物 2 (1/3)	52
第40図	土坑出土遺物 3 (1/3)	56
第41図	住居跡・土坑出土遺物 1 (1/1)	57
第42図	住居跡・土坑出土遺物 2 (1/3)	58
第43図	住居跡・土坑出土遺物 3 (1/3) 6~13-74J・14-355D・15, 16-367D	59
第44図	131号住居跡 (1/60)	61
第45図	131号住居跡出土遺物 1 (1/4)	62
第46図	131号住居跡出土遺物 2 (1/3)	63
第47図	132号住居跡 (1/60)	64
第48図	132号住居跡出土遺物 (1/3)	65
第49図	252号住居跡 (1/60)	66
第50図	252号住居跡出土遺物 1 (1/4)	67
第51図	252号住居跡出土遺物 2 (1/3)	67
第52図	253号住居跡 (1/60)	68
第53図	253号住居跡出土遺物 (1/3)	69
第54図	254号住居跡 (1/60)	70
第55図	255号・257号住居跡 (1/60)	71
第56図	255号住居跡出土遺物 1 (1/4)	73
第57図	255号住居跡出土遺物 2 (1/3)	73
第58図	256号住居跡 (1/60)	77
第59図	256号住居跡出土遺物 1 (1/4)	78
第60図	256号住居跡出土遺物 2 (1/3)	78
第61図	257号住居跡出土遺物 (1/3)	79
第62図	258号住居跡 (1/60)	80
第63図	258号住居跡出土遺物 1 (1・2=1/4, 3=1/1)	81
第64図	258号住居跡出土遺物 2 (1/3)	81
第65図	13号住居跡 (1/60)	83
第66図	遺構外出土遺物 1 (1/3)	84
第67図	遺構外出土遺物 2 (1/3)	86
第68図	遺構外出土遺物 3 (1/3)	89

表 目 次

第 1 表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覽	1
第 2 表	平成11年度調査地点一覽	4

図版目次

- 図版1 中野遺跡第50地点
1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3. 7号住居跡 4. 遺構外出土遺物
5. 遺構外出土遺物
- 図版2 西原大塚遺跡第43地点
1. 28・132号住居跡 2. 65号住居跡、355・356号土坑 3. 66号住居跡
4. 68・70号住居跡 5. 70号住居跡炉跡 6. 70号住居跡炉跡 7. 69号住居跡
8. 69号住居跡炉跡
- 図版3 西原大塚遺跡第43地点
1. 71号住居跡 2. 72号住居跡 3. 74号住居跡 4. 74号住居跡遺物出土状態
5. 4号埋甕 6. 354号土坑 7. 358号土坑 8. 359号土坑
- 図版4 西原大塚遺跡第43地点
1. 364号土坑 2. 365号土坑 3. 367号土坑 4. 368号土坑 5. 372号土坑
6. 375号土坑 7. 376号土坑 8. 131号住居跡
- 図版5 西原大塚遺跡第43地点
1. 252号住居跡 2. 253号住居跡 3. 254号住居跡 4. 255・257号住居跡
5. 256号住居跡 6. 258号住居跡 7. 13号住居跡 8. 発掘風景
- 図版6 西原大塚遺跡第43地点
28・65・66号住居跡出土遺物
- 図版7 西原大塚遺跡第43地点
68～72号住居跡出土遺物
- 図版8 西原大塚遺跡第43地点
73・74号住居跡出土遺物
- 図版9 西原大塚遺跡第43地点
74号住居跡出土遺物、4号埋甕、354～357・359・362～365・367号土坑出土遺物
- 図版10 西原大塚遺跡第43地点
372・374～377号土坑出土遺物、住居跡・土坑出土遺物
- 図版11 西原大塚遺跡第43地点
131・132・252・253・255～258号住居跡出土遺物
- 図版12 西原大塚遺跡第43地点
遺構外出土遺物

第1章 平成11年度の調査成果

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.7km、東西4.7kmの広がりをもち、面積は9.06㎡、人口6万4千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬岸川の3本の川が流れている。

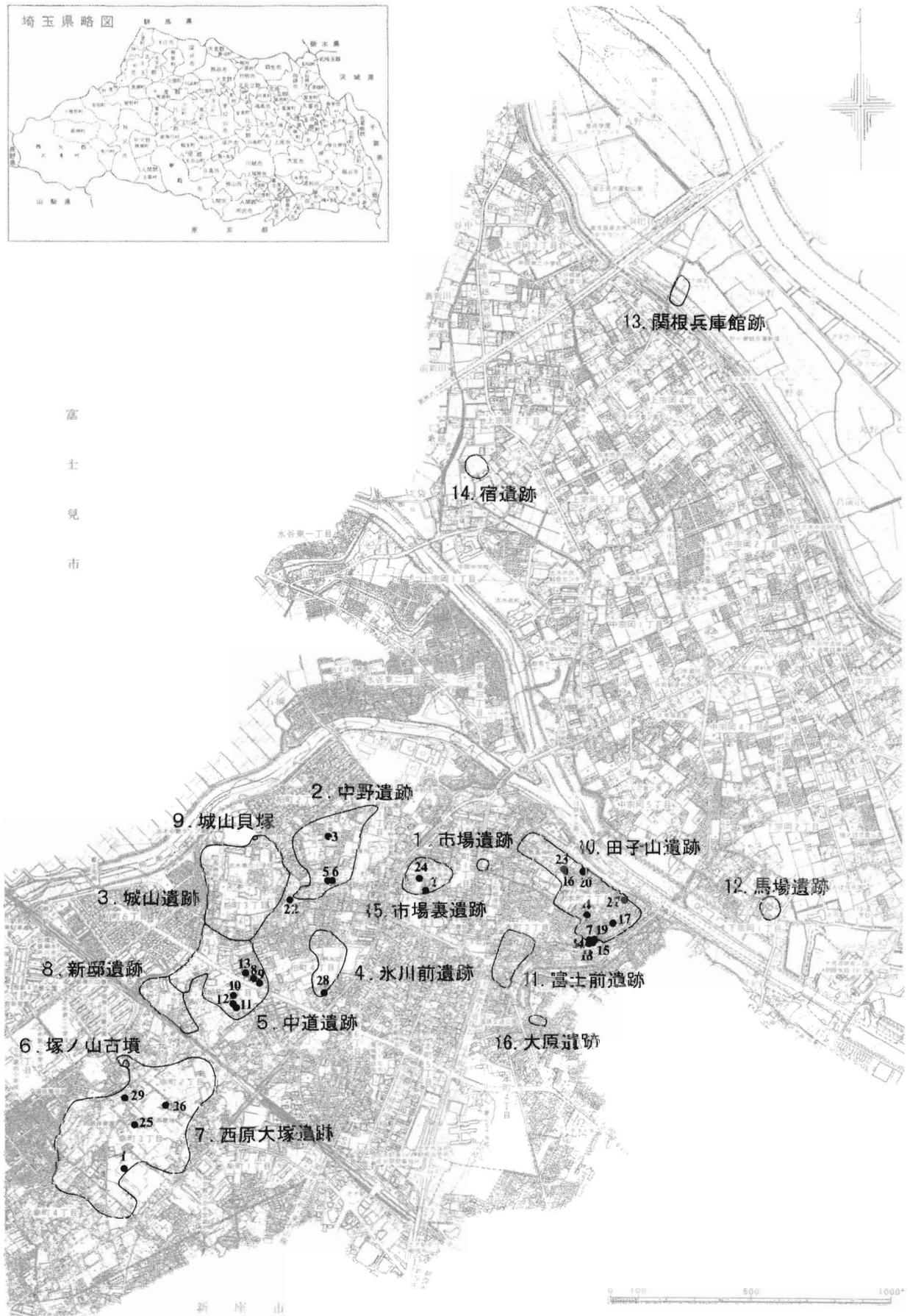
こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、氷川前遺跡（4）、市場裏遺跡（15）、市場遺跡（1）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた16遺跡である（第1図）。

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
1	市場	700 m ²	宅地	遺物散布地	不明	地下式坑?	なし
2	中野	48,000 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器 縄文(早・中)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	76,000 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	縄(早・中)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、柏城後関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
4	氷川前	20,000 m ²	畑・宅地	遺物散布地	古墳・平安?	なし	なし
5	中道	66,000 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄文(中)、弥(後)、古(後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、古銭、人骨、土師器、須恵器、陶磁器等
6	塚ノ山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	なし	なし
7	西原大塚	182,700 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器 縄文(前～後)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、古銭、土師器、須恵器、陶磁器等
8	新邸	24,000 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄文(前)、古(前)、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、縄文・弥生土器、古銭、土師器、陶磁器等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	縄文土器、石器、貝
10	田子山	65,000 m ²	畑・宅地	集落跡	縄(草創～晩) 弥生(後)、古(後)、平、中・近世、近代	住居跡、土坑、ローム探掘遺構、溝跡、方形・円形周溝墓等	縄文・弥生土器、炭化種子、土師器、須恵器、陶磁器等
11	富士前	1,000 m ²	宅地	集落跡	弥生(後)～古(前)	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	関連兵庫館跡	5,400 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,000 m ²	田	館跡	中世	井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	7,000 m ²	宅地	墓跡	弥生(後)～古(前)、近代	方形周溝墓	弥生土器、土師器、土師皿
16	大原	2,300 m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし



富士見市



第1図 市域の地形と調査地点 (1/2,000)

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、**旧石器時代**からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成11～12年度に調査が実施された東京電力志木変電所の増設工事に伴う中野遺跡第25地点でも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点発見されている。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器1点、田子山遺跡から有茎尖頭器1点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられる。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡1軒と遺物集中地点、晩期と思われる溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62(1987)以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

さらに、最近では、平成11年度に西原大塚遺跡で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

第2表 平成11年度調査地点一覧

番号	調査地点	所在地	面積(m ²)	確認調査日	調査期間	備考
1	西原大塚遺跡 第45地点	幸町3丁目 3133-12他	20,648.91	4月15日・16日、5 月15・16、6月10 ・11・14~16日	8月3日 ~12月17日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。 発掘調査面積は5,800m ² 。
2	市場裏遺跡 第9地点	本町1丁目 2542-2	103.87	4月20日		遺構・遺物は検出されなかった。
3	中野遺跡 第49地点	柏町1丁目 1503-1他	140.00	なし。	5月11日~ 7月6日	第1工程。 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
		柏町1丁目 1503-1他	490.00	なし。	平成12年2月 21日~5月31日	第2工程。 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
4	田子山遺跡 第58地点	本町2丁目 1735-4・5	201.15	5月14日		遺構・遺物は検出されなかった。
5	中野遺跡 第50地点	柏町1丁目 1518-7	87.75	6月11日	6月14日~ 17日	後述 第2章参照。
6	中野遺跡 第51地点	柏町1丁目 1518-32	87.75	6月11日		遺構・遺物は検出されなかった。
7	田子山遺跡 第59地点	本町3丁目 1813-25	60.25	6月8日		盛土保存適用。
8	中道遺跡 第47地点	柏町5丁目 2918-24	112.39	6月22日		遺構・遺物は検出されなかった。
9	中道遺跡 第48地点	柏町5丁目 2918-4~6他	1,483.63	6月29日		遺構・遺物は検出されなかった。
10	中道遺跡 第49地点	柏町5丁目 2922-10・13	89.05	7月16日		遺構・遺物は検出されなかった。
11	中道遺跡 第50地点	柏町5丁目 2924-1	66.12	8月2日		遺構・遺物は検出されなかった。
12	中道遺跡 第51地点	柏町5丁目 2924-14	83.31	8月2日		遺構・遺物は検出されなかった。
13	中道遺跡 第52地点	柏町5丁目 2920-2・5	461.98	7月30日		遺構・遺物は検出されなかった。
14	田子山遺跡 第60地点	本町3丁目 1813-21	60.89	8月2日		遺構・遺物は検出されなかった。
15	田子山遺跡 第61地点	本町3丁目 1813-23	80.13	8月2日		遺構・遺物は検出されなかった。
16	田子山遺跡 第62地点	本町2丁目 1698-2	73.44	8月9日		盛土保存適用。
17	田子山遺跡 第63地点	本町2丁目 1742-4	179.85	9月24日		盛土保存適用。
18	田子山遺跡 第64地点	本町3丁目 1813-22	89.92	8月26日		遺構・遺物は検出されなかった。

番号	調査地点	所在地	面積(m ²)	確認調査日	調査期間	備考
19	田子山遺跡 第 65 地点	本町 3 丁目 1813-24	67.50	8 月 26 日		遺構・遺物は検出されなかった。
20	田子山遺跡 第 66 地点	本町 2 丁目 1692-5	160.00	なし。		現地踏査は 9 月 24 日に実施。 遺構・遺物は検出されなかった。
21	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町 2 丁目 3050 他 4 筆	517.00	なし。	10 月 26・28、 12 月 21 日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
		幸町 2 丁目 3050 他 4 筆	437.195	なし。	平成 12 年 1 月 18 日～25 日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
22	城山遺跡 第 37 地点	柏町 3 丁目 2584-1 他	430.00	11 月 5 日		遺構・遺物は検出されなかった。
23	田子山遺跡 第 67 地点	本町 2 丁目 1698-25	60.90	12 月 6 日		盛土保存適用。
24	市場裏遺跡 第 10 地点	本町 1 丁目 2513-3 の一部	122.54	12 月 16 日		遺構・遺物は検出されなかった。
25	西原大塚遺跡 第 43 地点	幸町 3 丁目 3161-1 他	779.60	平成 10 年 9 月 3 日～5 日	1 月 11 日～ 3 月 24 日	後述 第 3 章参照。
26	西原大塚遺跡 第 46 地点	幸町 3 丁目 3234-4・5	160.64	1 月 13 日		発掘調査は平成 12 年度に実施。
27	田子山遺跡 第 68 地点	本町 2 丁目 1680-12	79.85	1 月 27 日		遺構・遺物は検出されなかった。
28	氷川前遺跡 第 8 地点	柏町 4 丁目 2725-9 他	390.45	2 月 9 日		遺構・遺物は検出されなかった。
29	西原大塚遺跡 第 47 地点	幸町 3 丁目 3153-1・3	86.12	3 月 21 日		遺構・遺物は検出されなかった。
合 計			27,892.185			

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第 19 号住居跡は、5 世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5 世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に 6 世紀後半から 7 世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い 5 世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6 世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、5 世紀後半から 7 世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で 120 軒を越え、次いで中野遺跡で 50 軒、中道遺跡で 15 軒を数える。また、田子山遺跡では、6 世紀後半以降に比定できるものと考えられる 4.1×4.7m のやや不整形で 2 ケ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が 1 基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100 基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸柄、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡 128 号住居跡からは、印面に「富」1 文字が書かれた銅製の印章が出土し

たことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、城山遺跡第29地点の127号土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅－池袋間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきて

おり、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数については逆に過去最高の8件を越え9件にのぼり増加したという現象が生じた。これについては、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性ある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用とした制度を導入するに至っている。

平成11度は、29件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は2件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は4件である。なお、盛土保存の対象は4件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅15件、分譲住宅6件、共同住宅2件、店舗建設2件、区画整理事業1件、変電所増設工事1件、駐車場1件、農地土壌改良1件である。

第2章 中野遺跡第50地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

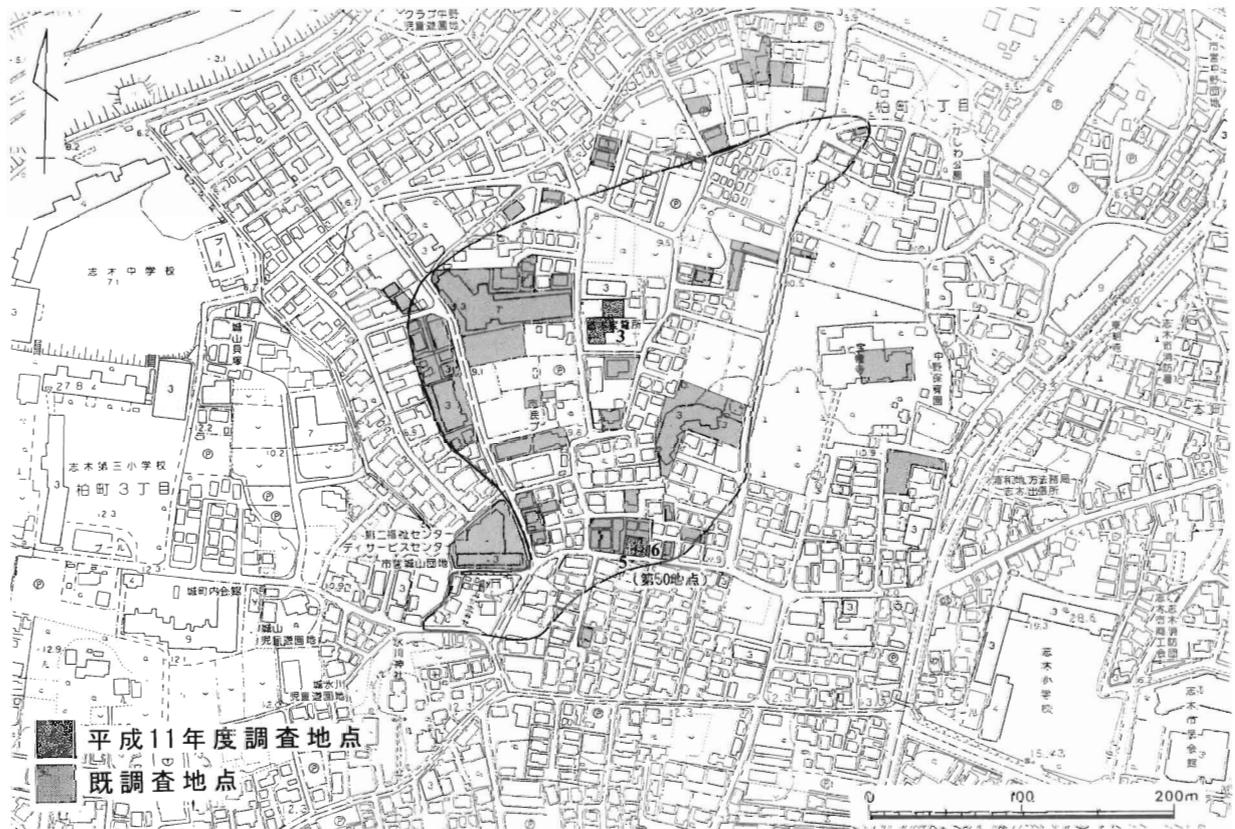
中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅から1.2km程北方に位置している。遺跡は、北方に柳瀬川を、西方に小支谷を臨む台地上に立地し、標高は北端で約9m、南端で約11mを測り、台地縁辺では際立った断崖もみられないままゆるやかに北側の低地に移行する。

遺跡の現況は、平成5年以降、急速に進められたマンション・駐車場建設等により一層宅地化が進行し、畑地・空地が激減している。

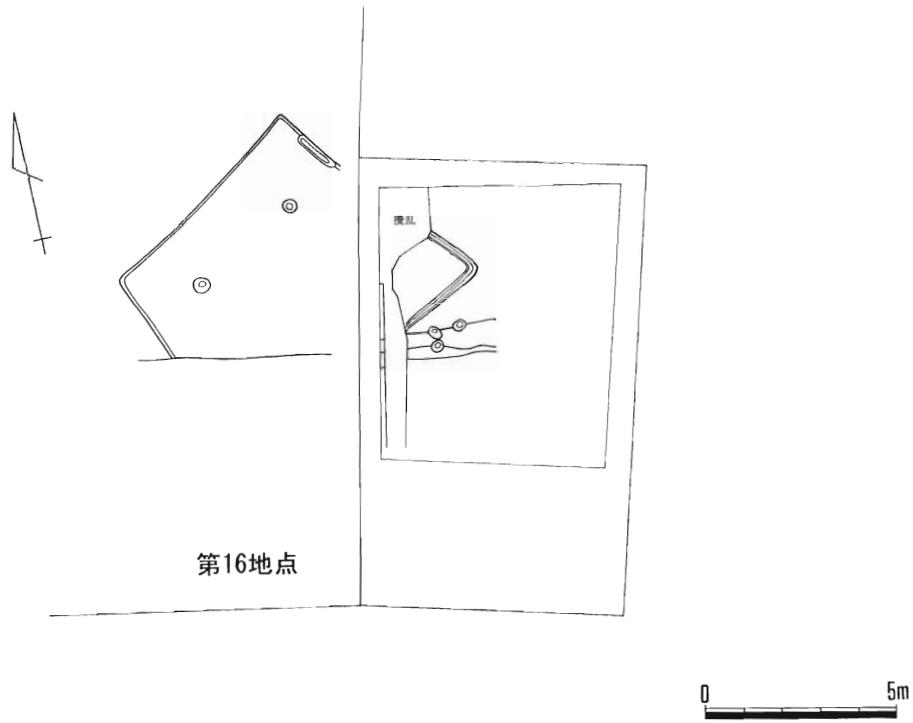
本遺跡は、昭和59年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代早～晩期、弥生時代後期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

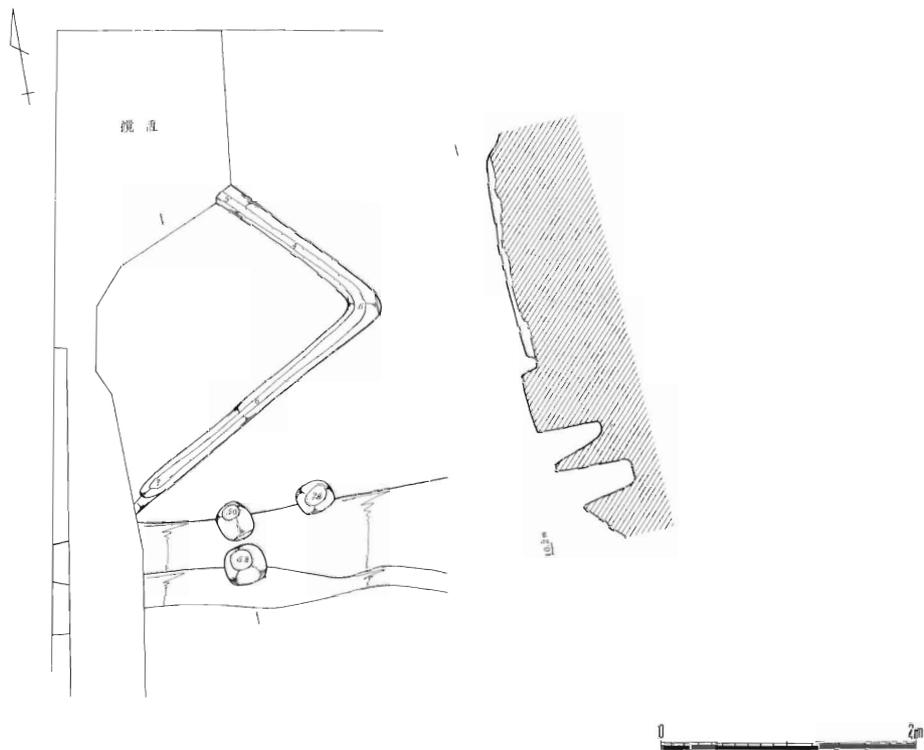
確認調査は、隣接する第51地点と同時に平成11年6月11日に実施した。第50・51地点にはそれぞれ調査区域はほぼ中央に南北方向のトレンチを1本と第50地点では平成2年の第16地点で検出された古墳時代後期に比定される7号住居跡の延長部分が検出される可能性があるため、北西隅にプラス1本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、第50地点の北西隅から第16地点で検出された7号住居跡の延長部分と思われる遺構を確認した。



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)



第3图 遺構分布図 (1/200)



第4图 7号住居跡 (1/60)

そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行ったが、盛土保存を適用することができなかったため、止むを得ず教育委員会が発掘調査を実施することに決定した。同日には、表土剥ぎを終了し、残土置場としては第51地点を当てることにした。

人員導入による発掘調査は、6月14日から実施した。まず、器材搬入作業を終了し、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行う。午後からは7号住居跡（7H）の精査を開始する。精査を開始し、深さ10cm程で住居跡の床面である硬化面を確認した。また、住居跡は南端が攪乱、北端は根切り溝で破壊を受けており、遺存状態は不良と言える。

15日、午前中には7Hのすべての掘りを終了し、遺構の写真撮影を行う。午後には平板実測・断面図等の実測を終了し、すべての精査を完了する。埋め戻しは17日に完了する。

第2節 古墳時代後期の遺構

7号住居跡（第3・4図）

〔住居構造〕今回検出された遺構は、第16地点で検出された7号住居跡の南東コーナー部分であることが判明した。（平面形）方形。（規模）6.70×6.50m。（壁高）8～18cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）今回の調査では確認できたが、全体では東壁のみに付設される。上幅4～10cm・下幅12～15cm・深さ4～7cmを測る。（床面）軟弱である。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕小破片のみで、実測できるものはなかった。

〔時期〕古墳時代後期（5世紀後葉）。

第3節 遺構外出土遺物

縄文時代中・後期の土器5点、近世の遺物1点が検出されている。

第1群 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器（第5図1～3）

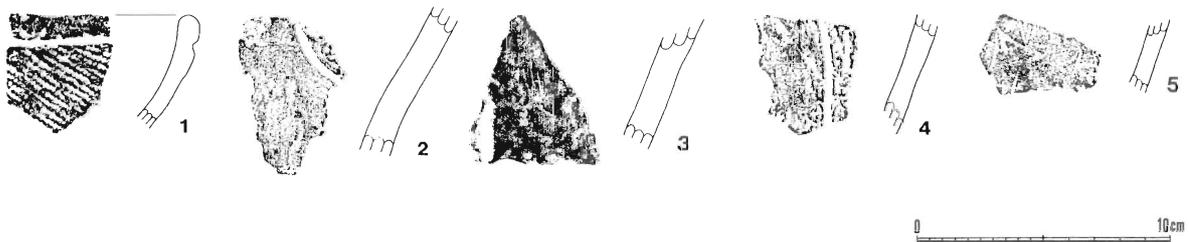
1は口縁部小破片で、沈線下にはLRの単節斜縄文が施文される。2・3は胴部破片で、2は楕円区画文内に単節斜縄文が、3は幅広の沈線による懸垂文が施文される。

第2群 縄文時代後期前葉の堀之内式土器（第5図4・5）

4は胴部破片で、2本の沈線により懸垂文が施文される。5は粗製土器の胴部小破片で、「X」字状の格子目文が細線により描かれている。色調は内面が淡茶褐色、外面は黒色を呈する。

第3群 近世の遺物（図版1-5）

備前系徳利の胴部小破片である。時期は近世以降であろう。



第5図 遺構外出土遺物（1／3）

第3章 西原大塚遺跡第43地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

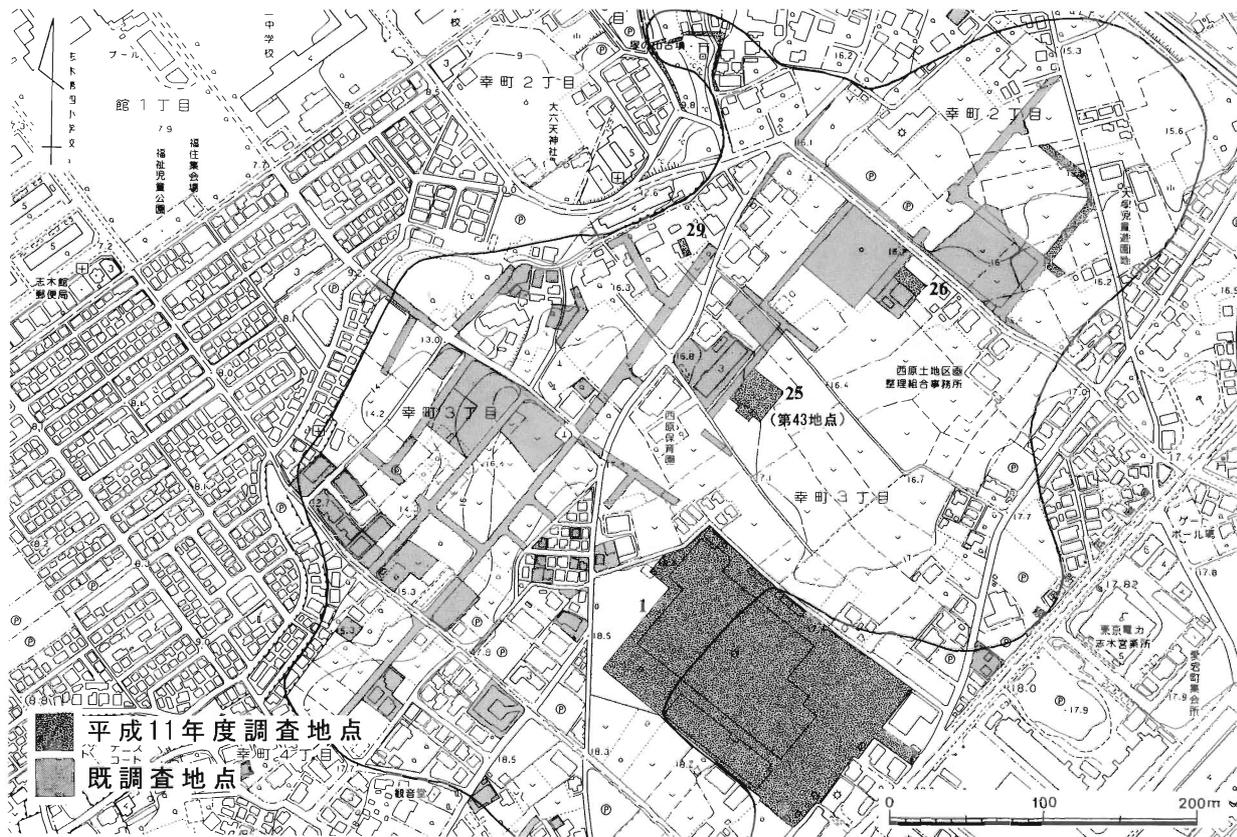
西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に広がる面積約180000㎡の市域最大規模の遺跡である。

遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地上にあり、標高14～19mで北西方向に徐々に傾斜しているが、おおむね平坦である。台地下の柳瀬川に開析された低地は標高約8mを測り、崖下には小規模な湧水地が認められる。遺跡の現況は畑地を多く残しているが、現在、土地区画整理事業が進められていて、今後住宅建設を始めとする各種開発行為が増加することが予測される。

本遺跡の最初の発掘調査は昭和48年に実施され、その後、教育委員会などが調査を行ってきた。また、最近では前述した土地区画整理事業に伴う継続した調査などにより、縄文時代中期後半、弥生時代後期、古墳時代前期を中心に、旧石器時代、縄文時代前期・後期・晩期、古墳時代後期、奈良・平安時代を含む集落跡であることが知られてきている。

(2) 発掘調査の経過

本調査区は、平成10年度に行った試掘調査により、縄文・弥生時代の多くの遺構と遺物が検出されて



第6図 周辺の地形と調査地 (1/5000)

いた。対象面積が広いので、調査は複数年に分けて行うこととし、今年度は779.6㎡を実施した。

発掘調査は平成12年1月11日から開始した。バックホーを使用し調査区北側から表土剥ぎを行い、翌12日からはこれと平行して遺構確認調査に入った。表土は30～40cmと浅く、これに牛蒡作りの耕作が加わっているため、遺構・遺物の保存状態は非常に悪かった。

14日からは確認された65 J、252 Y、13 H、354 Dの調査を始める。65 Jの炉は石囲炉であったが攪乱により礫が散乱している状態であった。252 Yは床面上から炭化材が検出され、焼失家屋の可能性をうかがわせた。13 Hは北壁にカマドをもつ古墳時代後期の住居跡であるが、遺物の出土は非常に少なかった。これらの遺構の写真撮影・測量などの記録化は19日から行った。同日、65 Jと重複する355・356 Dを掘り上げる。

20日からは28 J、132 Yを掘り始める。この2軒の住居跡は平成8年度に土地区画整理事業に伴う発掘調査で検出されたものの残りの部分である。

24日からは66 J、254 Y、357・358 Dの調査に取りかかり、26日からはこれらの記録化に務める。また、253 Yを掘り始める。

2月1・2日には253 Yの写真撮影・測量を行ったが、この間に359～363・365 D、3 F Pの調査を終えた。

2日には364・366・367 Dの調査を行い、3日からはこれらの記録を作成した。

4日からは73 J、131 Y、368 Dの調査に入り、9日からは記録の作成を行った。なお、131 Yは平成8年度に一部調査された住居跡である。



第7図 遺構分布図 (1/300)

8日からは69 J、256 Yの調査を始める。69 Jは壁の内側に壁柱穴と思われるピットが巡り、住居の拡張が考えられた。また、256 Yは南壁の検出ができず調査に時間を費やしたが、この部分に別の遺構が重複していることがわかり、これの平面形の確認に務めたところ、縄文時代の住居跡（68 J）であることが判明した。

15日には369 Dの調査を行った。

21日からは68 J、372・373 Dの調査に入る。68 Jは調査の途中で2軒の住居跡（70 J）の重複であることが判明した。また、369 Dの調査記録を作成した。

23日からは71 Jを掘り始めたが、攪乱が著しく壁の検出も困難であった。また、これに重複する住居跡を発見し、72 Jとして調査した。

25日からは68 J、372・373 Dの記録を取り始める。

28日からは69 Jの写真撮影・測量などの記録を作成した。

3月2日には374 Dの調査に入る

3日からは255 Yの調査に取りかかる。また、71・72 J、374 Dの写真撮影・測量を行う。

6日からは74 Jを掘り始める。また、256 Yの調査記録を作成した。

7・8日には375・376 Dの調査を終えた。

257・258 Yの調査は8日から、371・377～379 Dの調査は10日から開始した。これらの調査記録は14日から行った。

74 Jと255 Yの調査記録の作成は15日から行い、17日には全ての調査を終了、27日までには埋め戻しも完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

（1）縄文時代中期の遺構と遺物

28号住居跡（第8・9図）

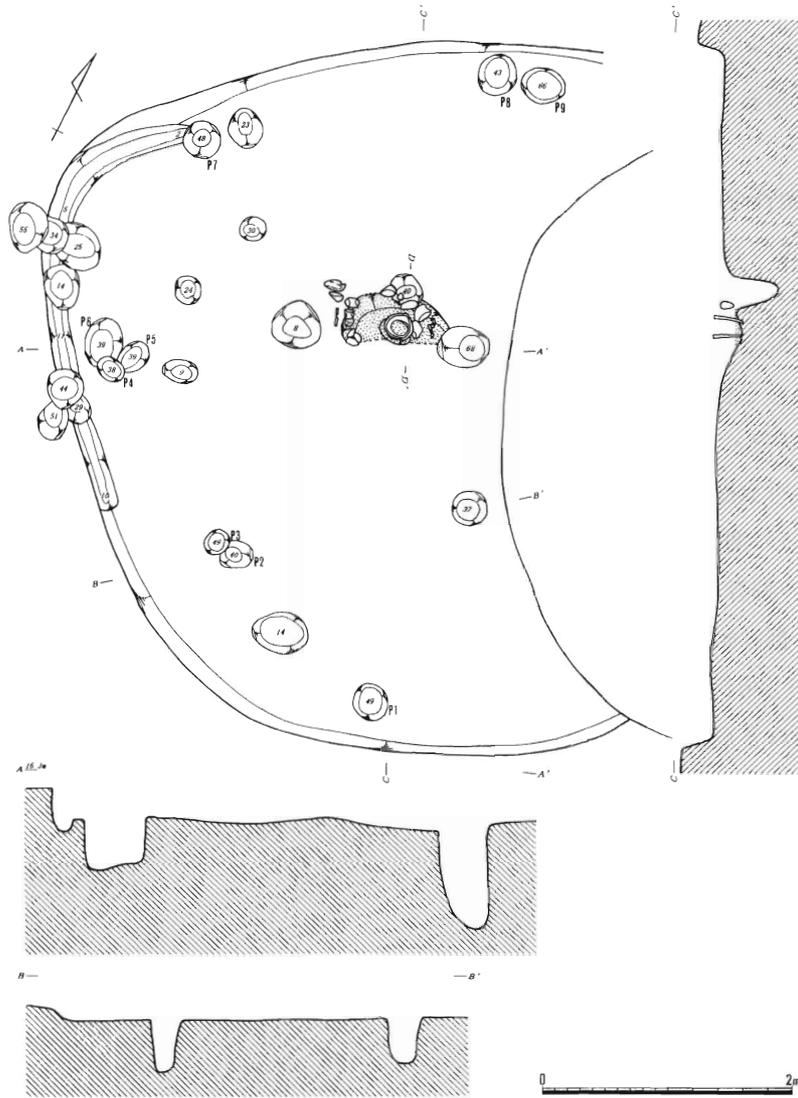
〔位置〕 A-2 G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。平成8年度に北側調査済み。132 Yに切られる。（平面形）楕円形？（規模）不明×580 cm。（主軸方向）N-40° -W。（壁高）20～36 cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）北西コーナーに認められる。上幅17～27 cm・下幅7～10 cm・深さ1～11 cmを測る。（床面）全体に軟弱。（炉）住居ほぼ中央から北に偏って位置する。石囲埋甕炉で不明×80 cmの範囲に焼土が堆積している。北側には拳大の礫を配しているが、攪乱により礫の移動があったと思われる。その中に土器の上半部を埋設している。（柱穴）住居壁際のP1～P9が主柱穴と思われる。

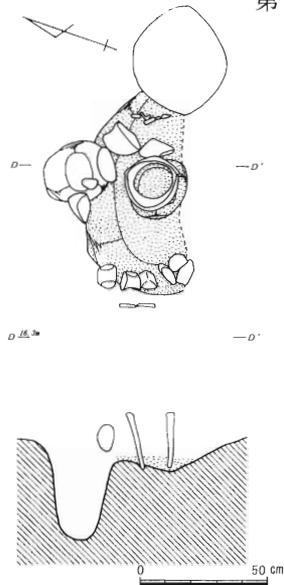
〔覆土〕 ローム粒子を多く含む暗褐色土（10YR3/3）を基調とするようであるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕 炉の埋設土器以外には、覆度中からの僅かな遺物があるのみである。

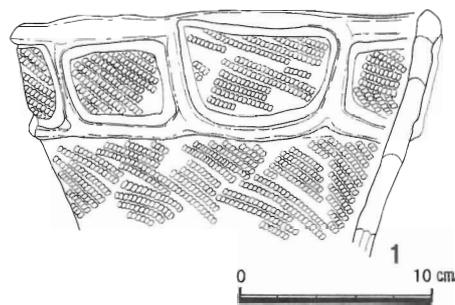
〔時期〕 加曾利E II式期。



第8图 28号住居跡 (1/60)



第9图 28号住居跡炉跡 (1/30)



第10图 28号住居跡出土遺物1 (1/4)

28号住居跡出土遺物（第10・11図）

1 は炉に埋設されていた深鉢形土器で、胴部上半以上を利用している。胴部から僅かに内湾しながら開き、口径21.5cmを測る。口縁部文様帯は隆帯による7単位の区画からなるが、1ヶ所は半円形、他は楕円形と正面を意識したかのような配置である。地文はLRの単節斜縄文。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土中には2～3mm大の細礫を含む。

2 は波状口縁の土器。肥厚する口唇部下に幅広の爪形文が施され、その下に隆帯の貼付が見られる。隆帯上およびその脇は幅広爪形文、小さく鋭い三角押文で加飾される。隆帯間には波状沈線文が見られる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土中には輝石を僅かに含む。

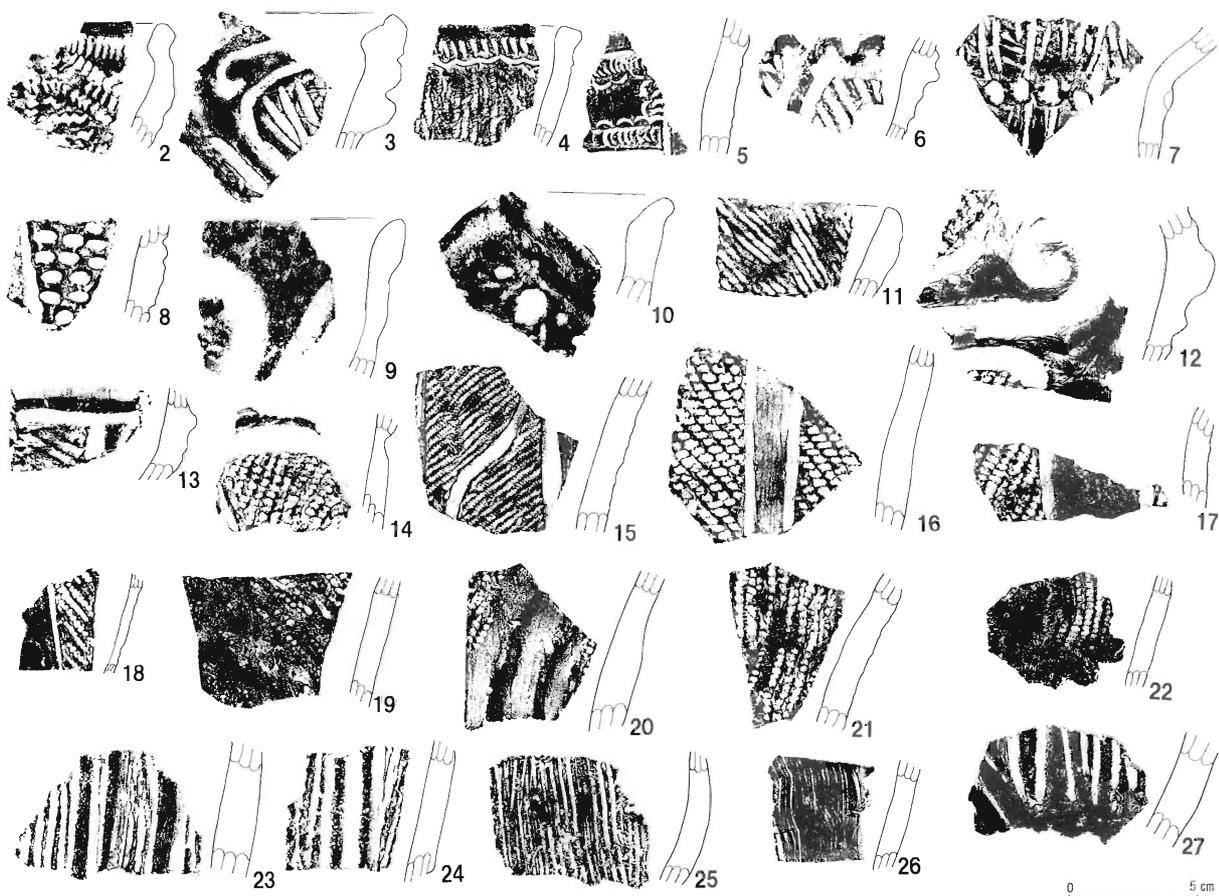
3 は波状口縁になろうか。弧状に貼付された隆帯。集合する沈線を充填した沈線区画、沈線による渦巻文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈する。胎土中には雲母片、白色粒子を僅かに含む。

4 は口唇部下に幅広の爪形文と波状沈線文が巡る。以下、RLの単節縄文が縦位に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

5 は沈線文、半截竹管による連続爪形文と刺突文により区画が形成される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土中には輝石を僅かに含む

6 は蛇行する隆帯と、それに交わる直線的な隆帯が貼付され、集合する太沈線が斜位に施される。色調は灰赤色(2.5YR4/2)を呈し、胎土中には輝石を僅かに含む。

7 は屈曲部に円形の刺突文が巡らされ、その上下に縦位の沈線が平行に施される。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈し、胎土中には茶褐色粒子を僅かに含む。



第11図 28号住居跡出土遺物2 (1/3)

8は丸棒状の施文具による縦位の沈線と、右方向から連続刺突した楕円形の刺突文が多段に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈する。胎土中には細礫、白色粒子を含む。

9は口縁部に凹線による楕円形区画文がつくられる。区画内には単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土中には細礫と僅かな輝石を含む。

10は波状口縁の土器で、口唇部は外側に肥厚する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には2～3mm大の礫を含む。

11はLの無節斜縄文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土中には細礫が僅かに含まれる。

12はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文と区画文がつくられる。色調は赤灰色(2.5YR4/1)を呈し、胎土中には細礫を含む。

13・14は横位の隆帯下に沈線による懸垂文が施される。13はLRの単節斜縄文を地文とする。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。14はRLの単節斜縄文を地文とする。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

15はRLの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土中には細礫、白色粒子を含む。

16～19は沈線による平行する懸垂文間を磨り消す。地文はLRの単節斜縄文。16は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。17は灰赤色(2.5YR4/2)を呈し、胎土中には細礫と白色粒子を僅かに含む。18は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。19は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

20はLRの単節斜縄文を地文とし、平行する隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土中には細礫を含む。

21・22はRLの単節斜縄文が施される。21はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。22はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

23・24はLの撚糸文を地文とし、隆帯による平行する懸垂文が貼付される。23はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土中には細礫、黄灰色粒子を僅かに含む。24は灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、胎土中には細礫を含む。

25は縦方向の沈線が集合して施される。色調はにぶい赤褐色(2/5YR5/4)を呈し、胎土中には細礫を含む。

26は蛇行する条線が施される。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

27は縦方向の平行する沈線と隆帯による懸垂文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土中には細礫を多く含む。

65号住居跡(第12図)

〔位置〕B-2G。

〔住居構造〕耕作による攪乱が著しい。(平面形)楕円形。(規模)620×600cm。(主軸方向)N-30°-E。(壁高)5～19cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)攪乱が著しく部分的に硬化面を残すのみである。(炉)住居中央から西に偏って位置する。石囲炉と思われるが、攪乱

のため礫が乱雑に残るのみである。115×90cm・深さ10cm前後の楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴) 深さ50cm以上の5本が主柱穴となろうか。

〔埋甕〕南壁際に埋甕と思われる土器が僅かに残っているが、攪乱のため詳細は不明。

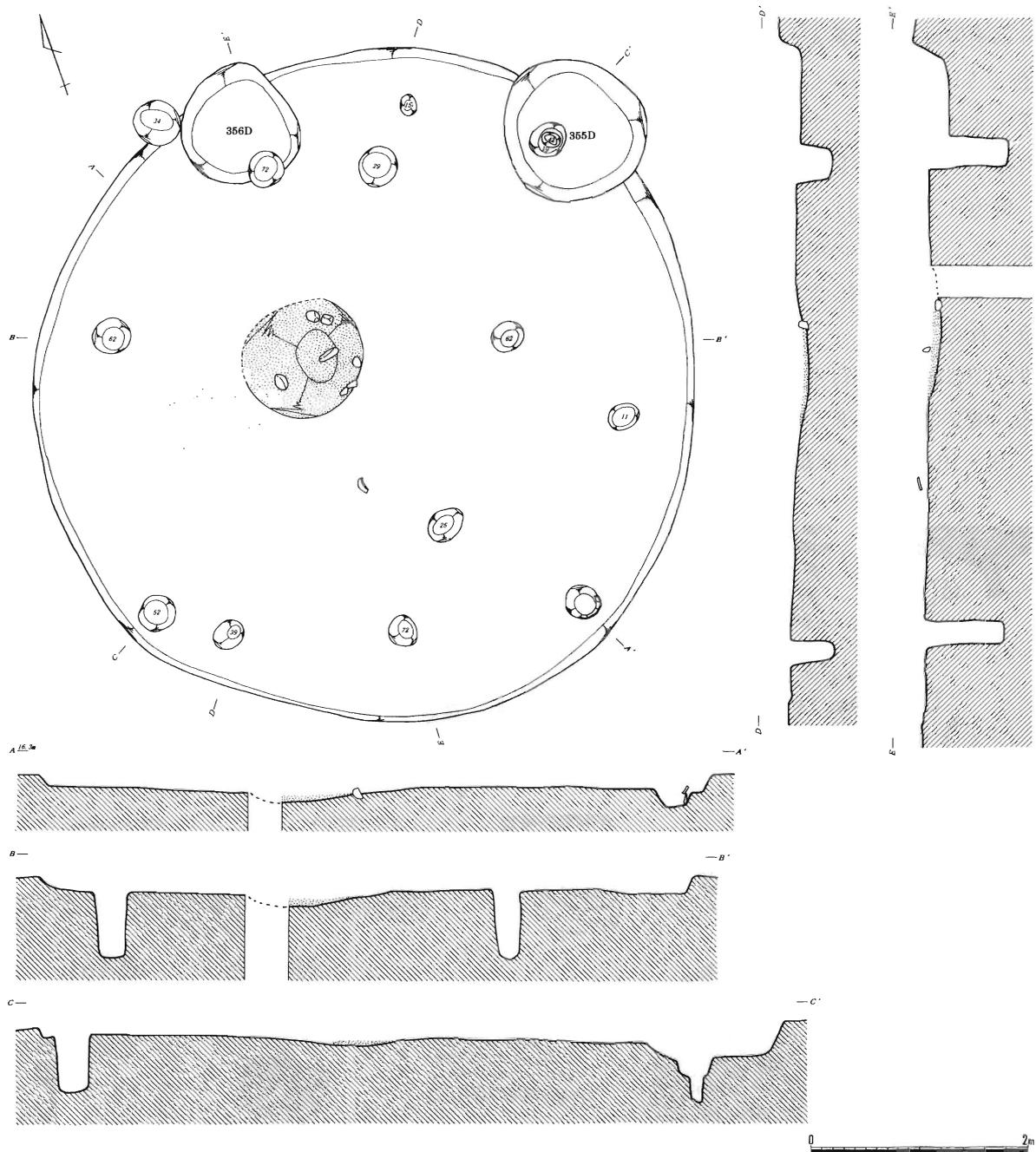
〔覆土〕ローム粒子を多く含み、部分的に焼土粒子が認められる黒褐色土(7.5YR3/1)を基調にするようであるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から多く出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

65号住居跡出土遺物(第13・14図、第41図1・2、第42図1～3・5)

1は埋甕に用いられた土器で胴部下位を切除して使用している。口縁部と胴部1/2周程を欠損する。



第12図 65号住居跡(1/60)

現存最大径28cmを測る。平行沈線を横位に2条巡らせ3段の横位区画を作り、上・中段には平行沈線による連弧文。下段には懸垂文が施される。地文はL Rの単節縄文である。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土中には細礫、輝石を多く含む。

2は隆帯による楕円形の区画が作られようか。地文はR Lの単節縄文。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

3は口唇部下に平行沈線が巡り、以下R L Rの複節縄文が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土中には白色粒子を含む。

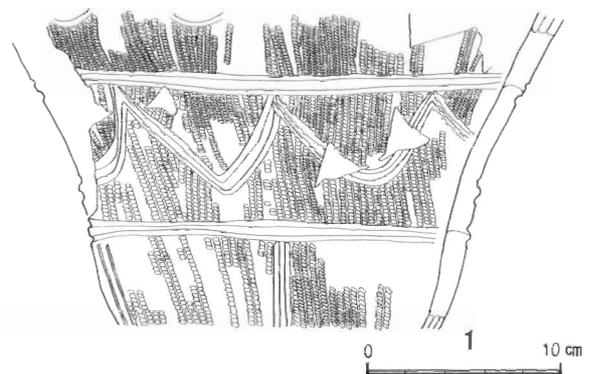
4は半楕円形の区画が形成される。R Lの単節斜縄文を地文とする。色調は褐灰色（7/5YR4/1）を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

5はR Lの単節縄文を羽状に施す。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

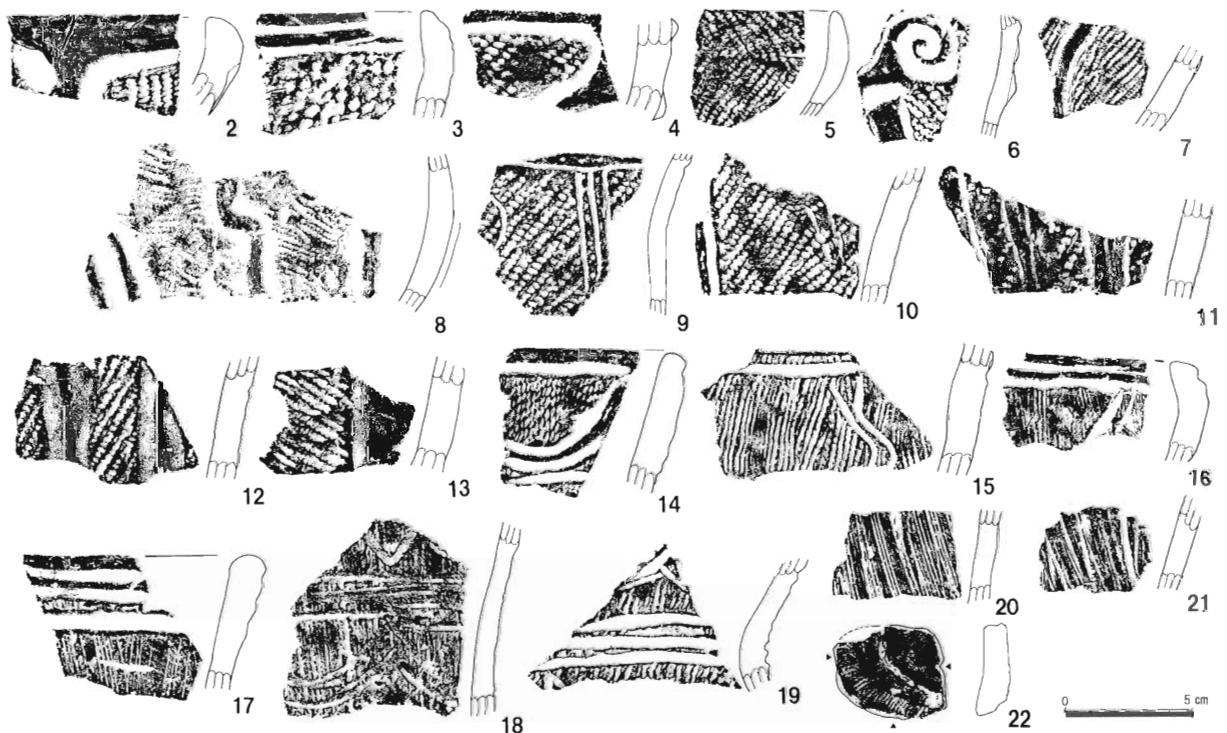
6は隆帯による渦巻文と沈線による懸垂文が施される。地文はL R Lの複節斜縄文。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

7・8は蛇行・直行する隆帯による懸垂文が貼付される。7は地文がR Lの単節斜縄文で、色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土中には細礫が含まれる。8はL Rの単節斜縄文を地文とする。色調は灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土中には輝石が含まれる。

9～13は蛇行・直行する沈線による懸垂文が施される。地文は13がL R、他はR Lの単節斜縄文となる。9・10はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、



第13図 65号住居跡出土遺物1（1/4）



第14図 65号住居跡出土遺物2（1/3）

胎土中には9が白色粒子、10は僅かな細礫を含む。11・12はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土中には11は僅かな白色粒子、12は僅かな細礫を含む。13は灰赤色(2.5YR4/2)を呈し、胎土中には僅かに白色粒子を含む。

14はLの撚糸文を地文とし、沈線による連弧文が施される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土中には細礫が多く含まれる。

15はRの撚糸文を地文とし、横位の沈線と蛇行する懸垂文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。

16~21は条線を地文とする。16は口唇部下に平行沈線が巡り、連弧文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土中には白色粒子を多く含む。17は口唇部下に3条の凹線が巡る。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土中には白色粒子を僅かに含む。18・19は連弧文が施される。18はにぶい橙色(5YR6/2)で、胎土中には細礫を多く含む。19は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土中には白色粒子が含まれる。20は褐灰色(7.5YR4/1)、21は灰褐色(5YR4/2)を呈し、両者とも胎土中に僅かに細礫が含まれる。

22は土器片錘。4.3×3.8cm、重さ20.1gを測る。3ヶ所に刻みが加えられる。破損部分に刻みがあった可能性がある。爪形連続刺突文と波状沈線文がみられる土器片を利用。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土中には多くの細礫と僅かな輝石が含まれる。

第41図1・2は打製石鏃。1は二等辺三角形を呈するが、側縁は僅かに内湾する。基部の抉りは浅く直線的である。珪岩製で重量は0.6g。2は先端と脚部の一部を欠く。ほぼ正三角形で、抉りはゆるやかに内湾する。黒曜石製で重量は0.9g。

第42図1~3・5は打製石斧。1・2は短冊形で、1は側縁がやや外反する。1は粘板岩製で重量は85g。2は砂岩製で重量は90g。3は刃部・基部ともに尖る。ホルンフェルス製で重量は40g。5は分銅形に近い撥形。ホルンフェルス製で重量は130g

66号住居跡(第15図)

〔位置〕C-2G。

〔住居構造〕南側調査区外。13Hに切られる。(平面形)不明。(規模)不明×500cm。(主軸方向)N-15°-W。(壁高)2~27cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)二重に巡っていて拡張住居の可能性が大きい。内側は上幅15~20cm・下幅5~10cm・深さ8~13cm、外側は上幅15~25cm・下幅5~7cm・深さ9~19cmを測る。(床面)炉の北側に硬化面が認められる。(炉)南側調査区外。不明×55cm・深さ15cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴)拡張前の1本、拡張後の2本が検出された。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

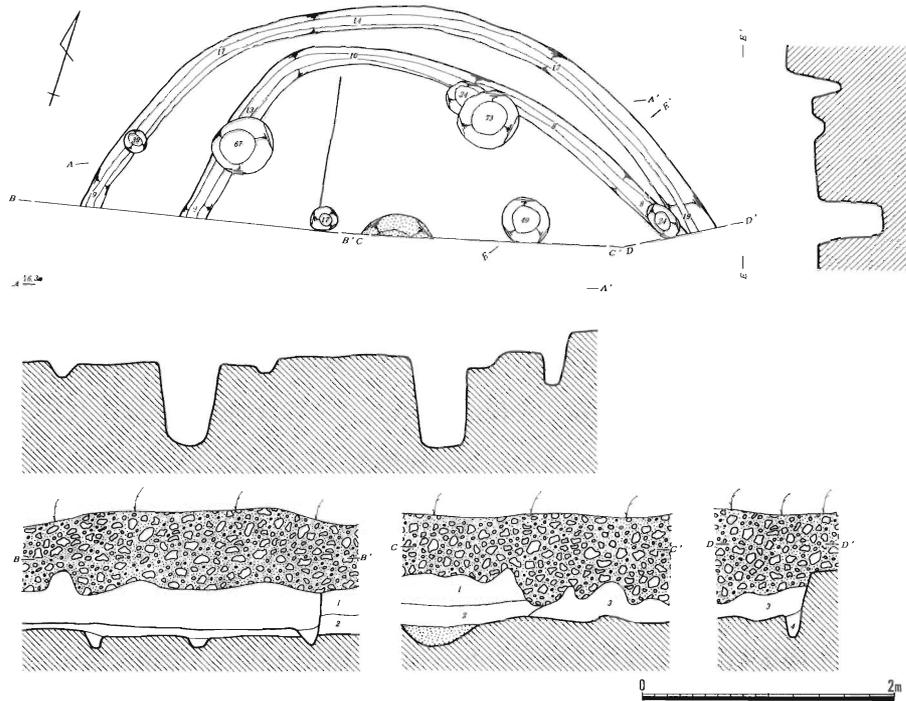
2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子を含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。粘性あり。

4層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。

〔遺物〕覆土中から多く出土した。

〔時期〕加曾利E I 式期。



第15図 66号住居跡 (1/60)

66号住居跡出土遺物 (第16・17図、第42図4)

1は1/5周弱の遺存度。胴部は円筒形で口縁部は外反し口唇部は内屈する。推定口径15.5cm、器高33.5cmを測る。口縁部は無文。頸部には3条の隆帯が巡り、それに一段ずれて蛇行する隆帯が貼付される。胴部には半截竹管による平行沈線が集合して施され、2条の隆帯とその間に蛇行する隆帯を貼付した懸垂文、3条の隆帯と蛇行する隆帯を組み合わせた「U」字状になるかと思われる貼付文がみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土中には細礫、雲母片を僅かに含む。炉の上面からの出土。

2は隆帯に沿って幅広な押引文が施される。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土中には細礫、雲母片を多く含む。

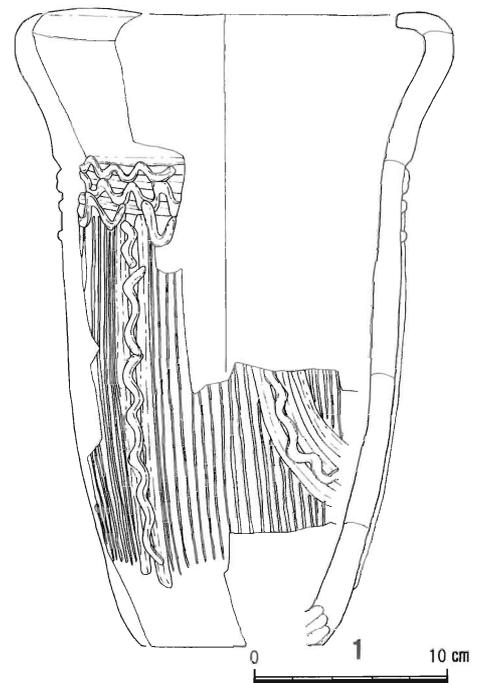
3は結節沈線文が渦巻状に施されようか。色調は赤灰色 (2.5YR4/1) を呈し、胎土中には細礫、雲母片を多く含む。

4・5は幅広の爪形文が連続して押捺される。胎土中には細礫、雲母片を多く含む。4の色調は暗赤灰色 (10YR4/1)、5は灰褐色 (7.5YR4/2)。

6は連続する刺突文で区画文が作られようか。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土中には細礫を含む。

7は押引文が施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

8はLの捺糸文を地文とし、2本一対の隆帯で渦巻文がつくられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。



第16図 66号住居跡出土遺物1 (1/4)

9・10は2本組隆帯で渦巻文がつくられる。9はR Lの単節斜縄文を地文とする。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土中には細礫と僅かな輝石を含む。10の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)で、胎土中には輝石を含む。

11・12は頸部破片。11は隆帯により口縁部と区画される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土中には輝石を僅かに含む。12は3条の沈線により胴部と区画される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には輝石、雲母片を含む。

13は2本組隆帯で頸部と区画する。L Rの単節斜縄文を地文とし、2本組隆帯による蛇行する懸垂文が貼付されようか。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土中には輝石を僅かに含む。

14は隆帯により頸部と区画し、Lの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

15・16はLの撚糸文を地文とする。15は2本組の低い隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)。16は隆帯による渦巻文が貼付されようか。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)。両者とも胎土中には輝石を含む。

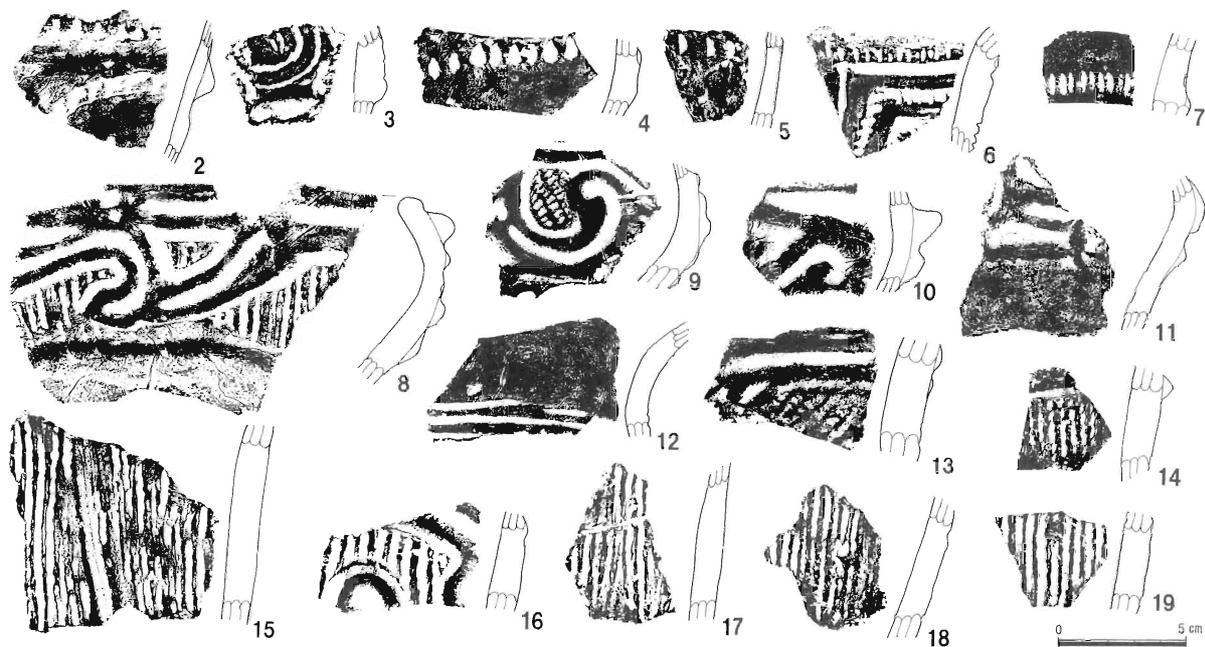
17~19はLの撚糸文が施される。17の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)で、胎土中には細礫と僅かな輝石を含む。18はにぶい褐色(7.5YR5/4)で、胎土中には礫を含む。19はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土中には白色粒子を含む。

第42図4は磨製石斧。両端を欠く。閃緑岩製で重量は125g。

68号住居跡(第18図)

〔位置〕C-3G。

〔住居構造〕耕作による攪乱が著しい。70Jに切られる。(平面形)楕円形。(規模)570×550cm。(主軸方向)N-12°-E。(壁高)41~49cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)上幅15~20cm・下幅5cm前後・深さ10~20cmを測り全周する。(床面)攪乱により遺存状態が悪く詳細不明であるが、部分的に



第17図 66号住居跡出土遺物2(1/3)

硬化面が認められる。(炉) 住居中央から北東寄りに位置する。50×40cmの楕円形の掘り込みをもつ地床炉で深さ10cmを測る。(柱穴) 住居壁際のP 1～P 6が支柱穴と思われる

〔覆土〕70 Jに切られるのと攪乱が著しいため、詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

68号住居跡出土遺物 (第19図)

1は口縁部に円形の刺突文列が2条巡る。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土中には白色粒子を含む。

2は口縁部に隆帯が巡り、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し胎土中には輝石を多く含む。

3は頸部が無文帯となる土器で、口縁部は隆帯により区画される。口縁部には縦位に3本の隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

4はRLの単節縄文を地文とし、沈線による蛇行する懸垂文がみられる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土中には輝石、白色粒子が僅かに含まれる。

5・7はRLの単節斜縄文が施される。5の色調は灰褐色(5YR4/2)で、胎土中には僅かに雲母片が含まれる。7の色調は灰褐色(5YR4/2)で、胎土中には細礫と輝石を含む。

6は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には輝石を僅かに含む。

8は浅鉢形土器。口縁部は外屈し、口唇端部は平坦である。内外面は赤彩される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土中には細礫と輝石を含む。

69号住居跡 (第20図)

〔位置〕A-3G。

〔住居構造〕耕作による攪乱が著しい。73J・131Yに切られる。(平面形)不整円形。(規模)不明×630cm。(主軸方向)N-9°-W。(壁高)1~36cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(壁溝)上幅15×35cm・下幅5~10cm・深さ6~9cmを測る。全周すると思われる。(床面)攪乱が著しく遺存状態が悪い。(炉)住居ほぼ中央に位置する石囲埋甕炉で、95×80cm・深さ20cm前後の楕円形の掘り込みをもつ。周囲には礫が配されているが、攪乱による移動があったと思われる。その中に土器の上半部が埋設している。(柱穴)支柱穴はP 1~P 7が該当しようか。また壁の内側には壁柱穴と思われるピットが巡る。

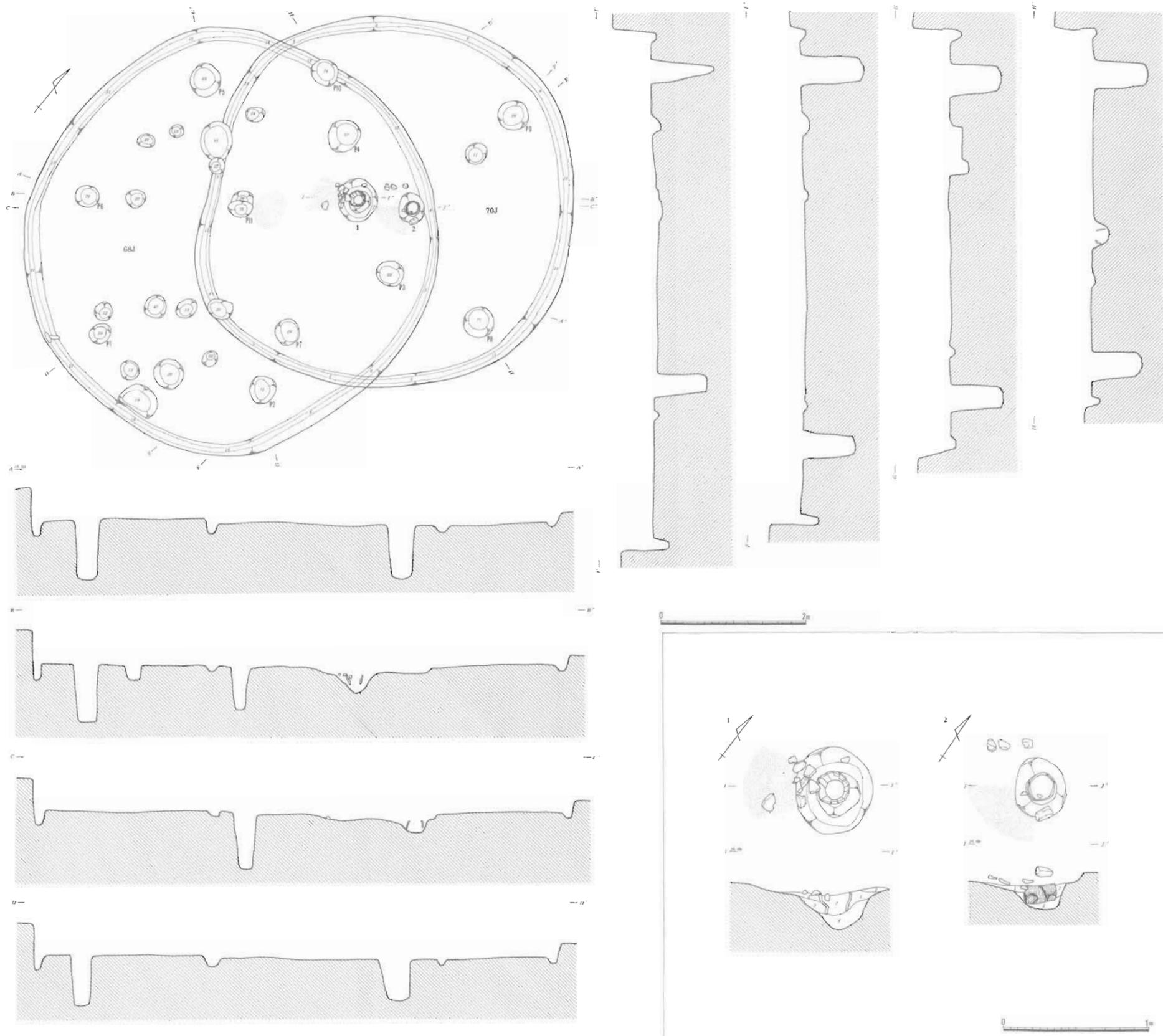
〔埋甕〕住居南壁に沿って2個体検出されるが、攪乱により遺存状態が悪い。1は不明×45cm・深さ30cmの掘り込みをもち、深鉢形土器の上半部を埋設している。2は不明×40cm・深さ20cmの掘り込みをもち、深鉢形土器の胴部を埋設している。

〔覆土〕上層はローム粒子を含み、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む硬質の黒褐色土(10YR2/2)、下層はローム粒子を多く含む粘性のある黒褐色土(10YR2/3)であるが、73Jに切られているため詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から多量に土器片が出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

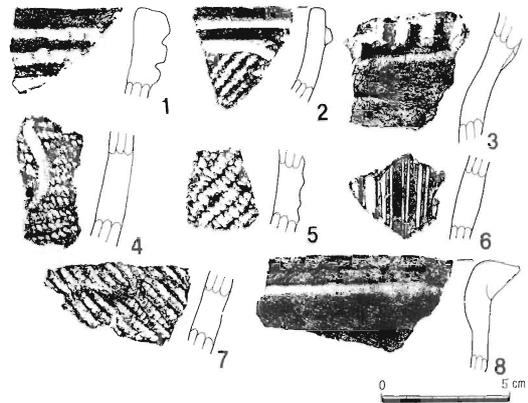
〔所見〕壁内側のピットの存在から住居の拡張が考えられる。



第18图 68·70号住居迹 (1/60)、炉迹 (1/30)

69号住居跡出土遺物（第21・22図、第42図6～8）

1は炉で使用された埋設土器。胴部上半以上を利用して
いる。口径23.4cmを測る。胴部上位はふくらみもち、頸
部でくびれ、口縁部は大きく外反する。口唇部は内側に肥
厚する。条線を地文とし、文様は1本描きの沈線によって
施される。口縁部に2本の沈線を巡らせ、その下に2本一
対で描かれた連弧文が10単位みられる。頸部のくびれ部か
ら肩部にかけて3本の沈線を巡らせる。胴部に「□」状の
区画を4単位設け、区画間には縦沈線を充填する。区画内
には蛇行する沈線を垂下させる。色調はにぶい赤褐色
(5YR5/3)を呈し、胎土中には細礫、軽石を僅かに含む。



第19図 68号住居跡出土遺物（1/3）

2は埋甕1として使用された土器。頸部以上を利用しているが、攪乱のため約1/2周を欠損する。推
定口径27cmを測る。頸部でくびれ、口縁部が外反し、口唇部内側が肥厚する。R Lの単節斜縄文を地文
とする。文様は半截竹管で描かれ、口唇部下には平行沈線文が巡り、その下に平行沈線による連弧文を
2段、波状の連弧文を1段施す。頸部の屈曲部には平行沈線が2段巡る。色調は暗赤灰色(10YR4/1)
を呈し胎土中には細礫を多く、輝石を僅かに含む。

3は埋甕2。胴部1/4周程の遺存度。現存最大径24.3cmを測る。L Rの単節斜縄文を地文とし、2本一対
の直沈線と蛇行沈線が垂下する。色調はにぶい橙色(2/5YR6/3)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

4は楕円形の区画内にR Lの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色(7/5YR5/3)を呈し、胎
土中には黒褐色粒子が多く含まれる。

5はR Lの単節斜縄文を地文とし、微隆起状の隆帯が貼付される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)
を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

6は横位に隆帯が貼付され、以下はR Lの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい褐
色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。

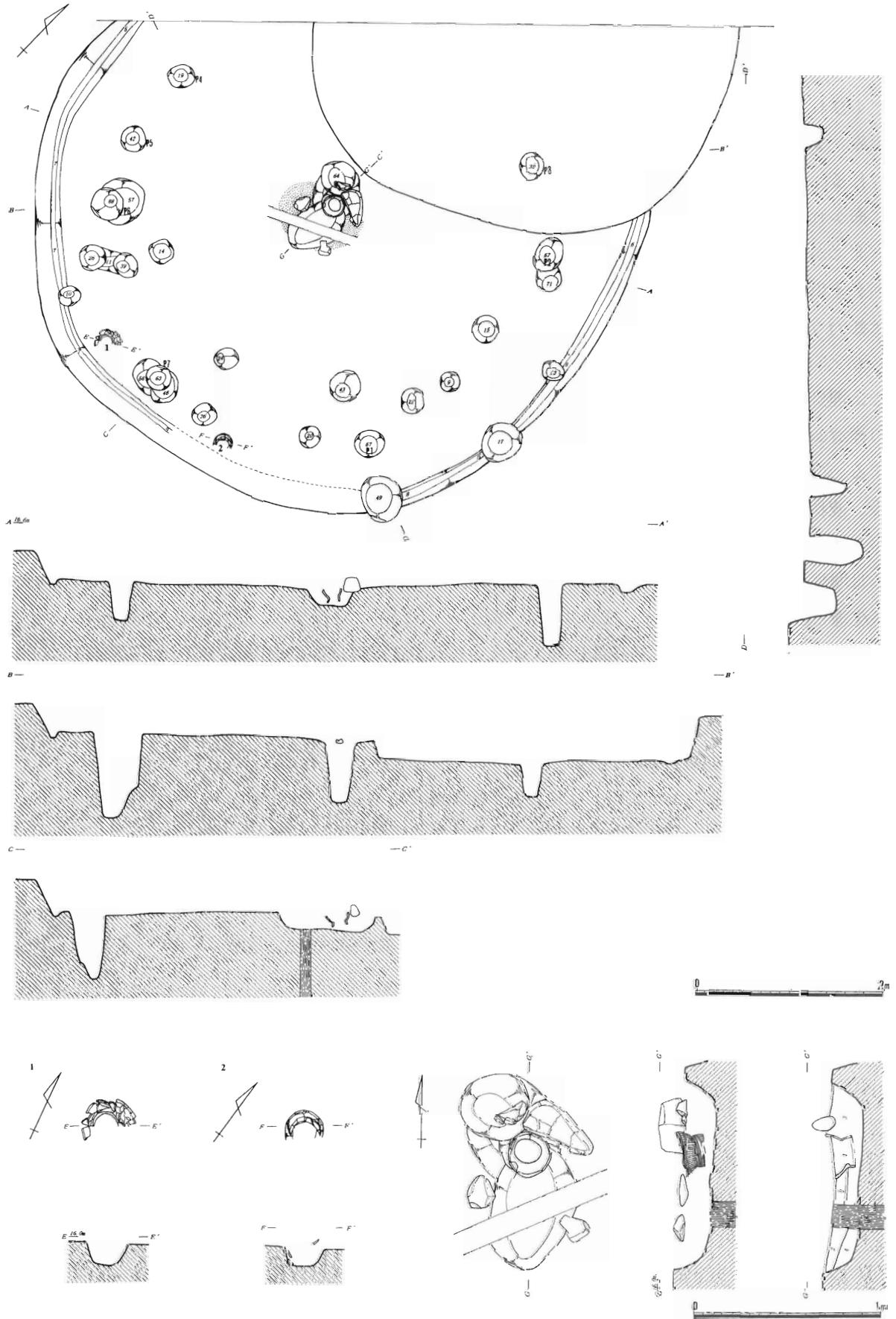
7は横位の隆帯により区画され、上位はR Lの単節斜縄文が、下位には縦位の沈線が施される。色調
はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土中には細礫が僅かに含まれる。

8はR Lの単節縄文を地文とし、沈線により曲線的な文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)
を呈し、胎土中には細礫が僅かに含まれる。

9はR Lの単節縄文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈
し、胎土中には細礫と僅かな白色粒子を含む。

10～15は縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する土器。沈線間は磨り消される。10はR Lの単節斜
縄文を地文とする。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)で、胎土中には細礫と僅かな白色粒子を含む。
11はL Rの単節斜縄文を地文とする。にぶい赤褐色(5YR5/4)で、胎土中には輝石を含む。12・13
はR Lの単節斜縄文を地文とする。胎土中は細礫を僅かに含む。色調は12がにぶい橙色(7.5YR6/4)、
13が灰褐色(7.5YR4/2)。14はL Rの単節斜縄文を地文とする。色調は灰褐色(7.5YR4/2)で、胎
土中には細礫と僅かな白色粒子を含む。15はL R Lの複節斜縄文を地文とする。色調はにぶい赤褐色
(5YR5/3)で、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

16はL R Lの複節斜縄文を地文とし、3本の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈



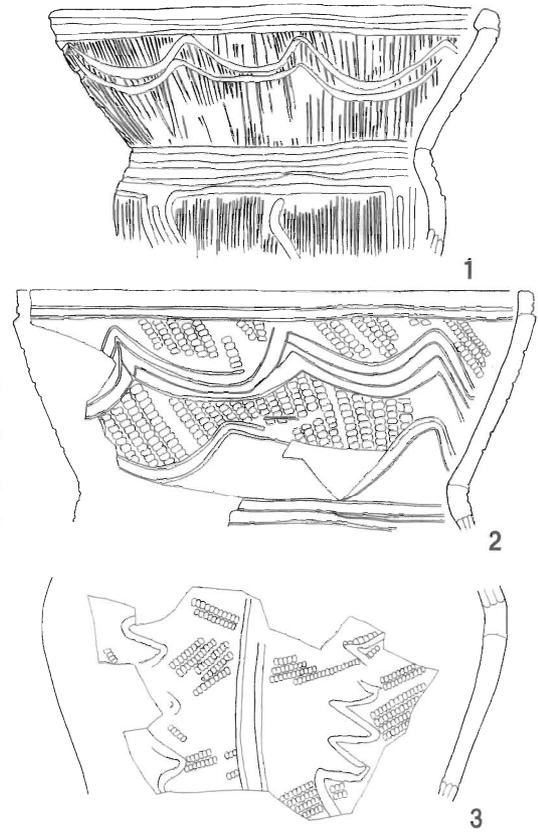
第20图 69号住居跡 (1/80)、埋甕・炉跡 (1/30)

し、胎土中には細礫と輝石を僅かに含む。

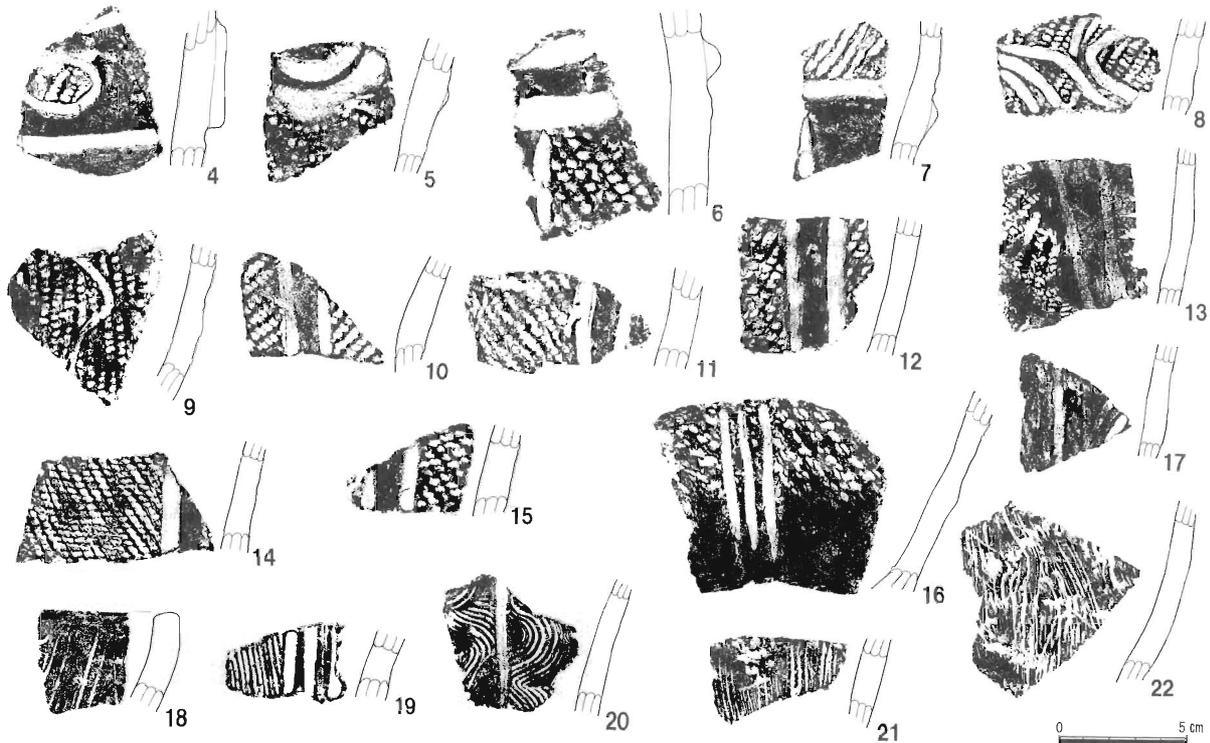
17は斜位・縦位の沈線が交差して施された土器。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土中には輝石を含む。

18~22は条線を地文とした土器。18は僅かに内湾する口縁部破片。胎土中には輝石と雲母片を僅かに含む。19は3本の沈線が垂下する。胎土中には白色粒子を僅かに含む。20は条線が縦位に連弧状に施され、沈線が垂下する。胎土中には白色粒子が多く含まれる。21は胎土中に細礫が含まれる。22は直行・蛇行した条線が施される。胎土中には細礫、軽石が多く含まれる。色調は18がにぶい赤褐色(5YR5/4)、19が灰褐色(7.5YR4/2)、20がにぶい褐色(7.5YR6/3)、21がにぶい褐色(7.5YR5/3)、22がにぶい赤褐色(2.5YR4/3)。

第42図6は残核か。黒曜石製で重量は19.7g。7は縦長の剥片。左側縁には刃こぼれがみられる。硅岩製で重量は10.4g。8は石皿でよく使いこまれている。凹石との併用で、表面に1ヶ所、裏面に6ヶ所の凹みがみられる。緑泥片岩製。



第21図 69号住居跡出土遺物1 (1/4)



第22図 69号住居跡出土遺物2 (1/3)

70号住居跡（第18図）

〔位置〕 C-3G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。68Jを切る。（平面形）楕円形。（規模）535×525cm。（主軸方向）N-50°-E。（壁高）12~49cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅12~25cm・下幅5~10cm・深さ5~11cmを測り全周する。（床面）攪乱による遺存状態が悪いが部分的に硬化面が認められる。（炉）住居中央から東に寄った位置に2ヶ所検出された。共に石囲埋甕炉で①は60×50cm・深さ25cm前後の楕円形の掘り込みをもち、②は40×35cm・深さ20cm前後の楕円形の掘り込みをもち、共に石囲炉の礫が部分的に残されている。炉の移動が考えられる。（柱穴）住居壁際のP7~P11が主柱穴であろう。

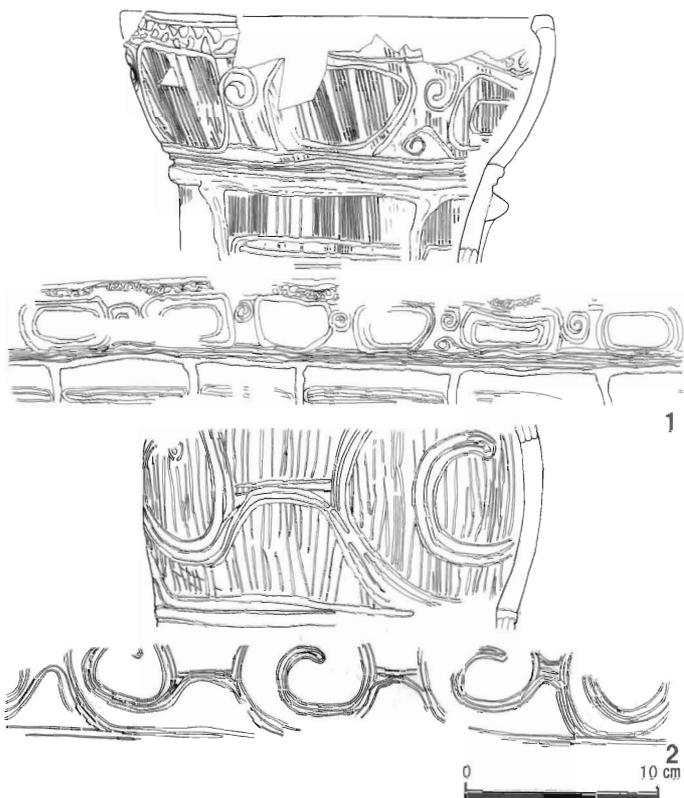
〔覆土〕 上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土（7.5YR3/1）、下層はローム粒子、焼土粒子を含む黒褐色土（10YR3/2）であるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕 大部分が覆土中からの出土である。

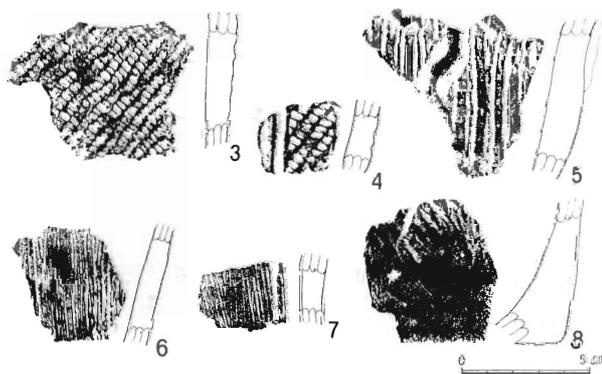
〔時期〕 加曾利EⅡ時期。

70号住居跡出土遺物（第23・24図、第41図3）

1は炉に埋設された土器で、深鉢形土器の胴部上半以上を利用している。口径約22.5cmを測る。胴部はほぼ円筒形で頸部はくびれ、口縁部は内湾しながら開き、口唇部は内側に肥厚する。条線を地文とする。口縁部と胴部の文様帯は頸部に貼付された隆帯により区画される。口縁部の文様は口唇部下に棒状施文具による2条の沈線を巡らせ、沈線間には交互刺突が加えられる。また、頸部の隆帯上位には半截竹管による平行沈線が巡らされるが、螺旋状に施文された結果、沈線は3本の部分と4本の部分が描出される。口唇部下と頸部の沈線間には棒状施文具による沈線で6単位の楕円区画がつくられるが、その内訳は、5区画が二重沈線、1区画が単沈線となる。楕円区画の間には1ヶ所を除き沈線による渦巻文が充填され、また、その内の1ヶ所は上下一対の渦巻文となる。胴部には頸部を巡る隆帯から5本の隆帯を垂下し、隆帯間には沈線による長楕円形の区画がつくられ、区画内には沈線が充填される。色調はにぶい橙色（5YR6/3）を呈し、胎土中には細礫、軽石と思われる黄灰色粒子を含む。



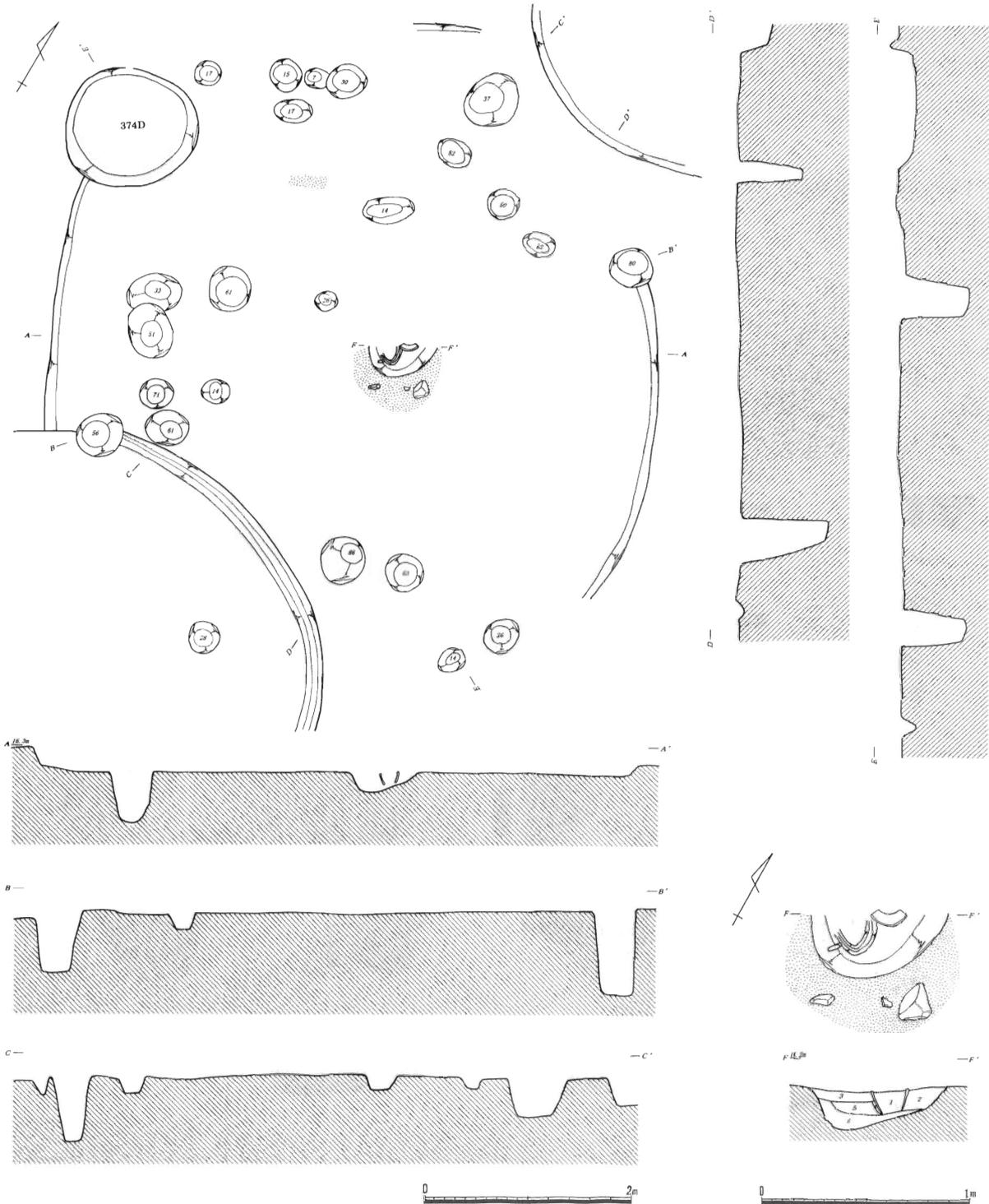
第23図 70号住居跡出土遺物1（1/4）



第24図 70号住居跡出土遺物2（1/3）

2は炉に埋設された土器で、深鉢形土器の頸部以上を利用しているものと思われるが、口縁部は破損している。現存最大径20.9cmを測る。沈線を縦位に集合させて地文とし、半截竹管を用いた平行沈線による渦巻文を4単位連結して施す。頸部にも平行沈線を巡らせ胴部と区画する。口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がり、頸部はくびれ、胴部上位がふくらむ器形になるものと思われる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土中には細礫と黄橙色・白色粒子を含む。

3はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)で、胎土中には輝石を含む。



第25図 71号住居跡(1/60)、炉跡(1/30)

4はR Lの単節斜縄文を地文とし、平行沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

5は縦位の集合する沈線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。上部にも貼付文がみられる。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土中には、細礫と雲母片を僅かに含む。

6は条線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

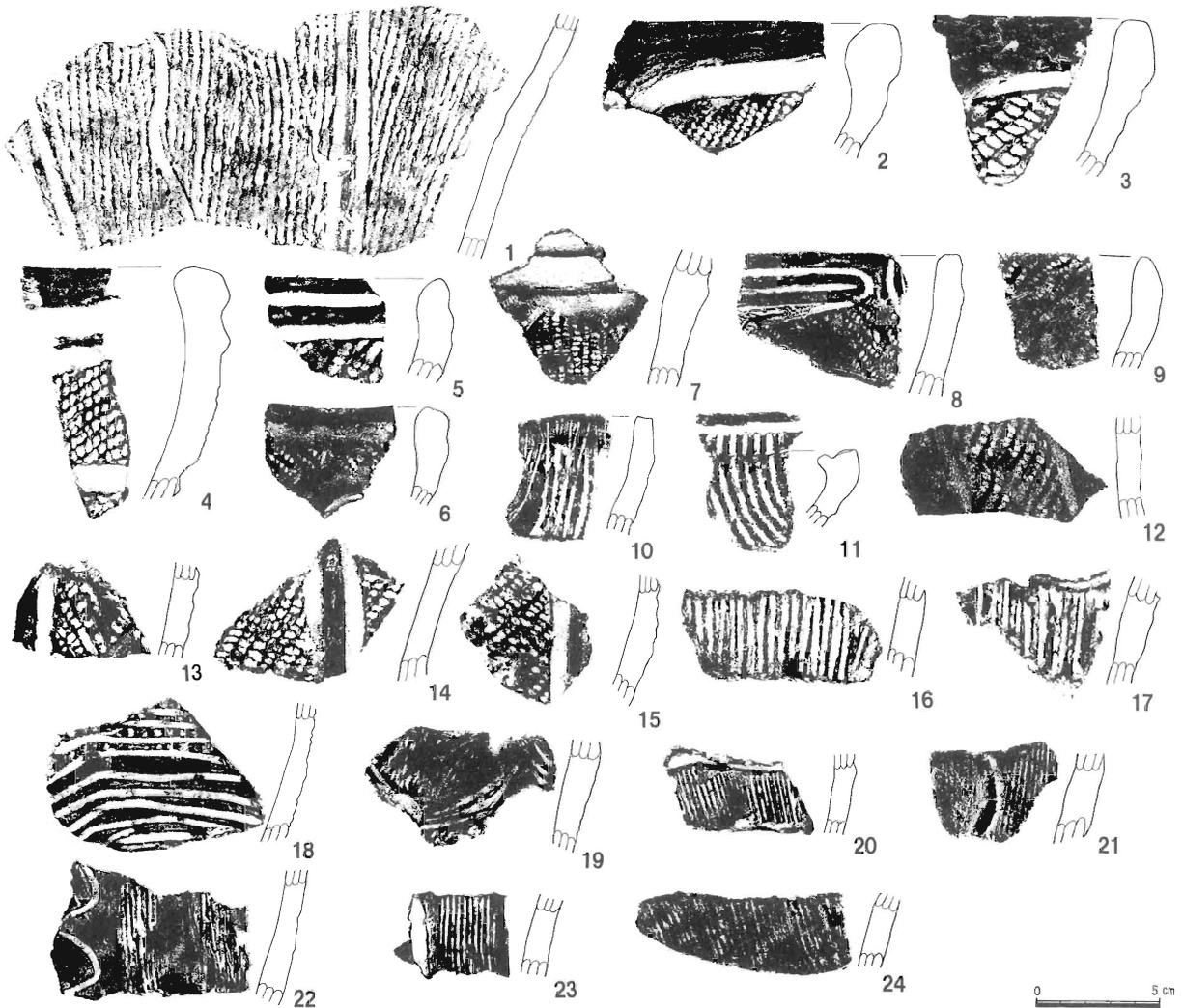
7は条線を地文とし、平行沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

8はRの無節斜縄文を地文とし、斜位の沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

第41図3は二等辺三角形の打製石鏃。基部の抉りはゆるやかに内湾する。黒曜石製。

71号住居跡（第25図）

〔位置〕 B-3 G。



第26図 71号住居跡出土遺物（1/3）

〔住居構造〕耕作による攪乱が著しい。72 J、374 Dに切られる。(平面形)不明。(規模)不明×590 cm。(主軸方向) N-29° -W。(壁高) 4~22 cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)確認できなかった。(床面)部分的に硬化している。(炉)住居ほぼ中央に位置する石囲埋甕炉。北側の部分は攪乱により破壊されている。不明×130 cmの範囲に焼土が堆積し、礫が点在している。その中に不明×70 cm・深さ25 cmの掘り込みをもち、土器の上半部を埋設している。埋設土器の移動があったらしく、現存する土器の南側にその痕跡が認められる。(柱穴)不規則な配列で支柱穴は確認できなかった。

〔覆土〕ローム粒子を多く含み、焼土粒子を含む硬質な黒褐色土(7.5YR3/2)を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から土器片が多量に出土した。

〔時期〕加曾利 E I 式期。

71号住居跡出土遺物(第26図第42図9~11)

1は炉に埋設されていた土器。深鉢形土器の胴部を利用しているが、耕作による攪乱のため大部分が破損している。Lの撚糸文を地文とし、平行沈線・蛇行沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)で、胎土中には細礫を多く含む。

2~6は口縁部破片で、単節斜縄文を地文とし、太沈線により区画がなされる。2の縄文はLR。胎土中には細礫を僅かに含む。3の縄文はRL。胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。4の縄文はLR。胎土中には白色粒子を多く含む。5の縄文はRL。胎土中には細礫を含む。6の縄文はRL。胎土中には輝石、白色粒子を僅かに含む。色調は2・3がにぶい褐色(7.5YR5/3)、4・5が灰褐色(7.5YR5/2)、6が褐灰色(5YR5/1)。

7は微隆起する隆帯が2条巡る。RLの単節縄文が施され、拓影図左端に平行沈線がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

8はRLの単節斜縄文を地文とし、口縁部に沈線による長楕円形の区画をつくる。区画内には横線が充填される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)。胎土中には細礫を多く含む。

9はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)。胎土中には細礫を多く含む。

10は単沈線を縦位に集合させる。色調は灰褐色(5YR4/2)。胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。

11は口唇部が「く」字状に内屈する。口唇端部には沈線が巡り、半截竹管による短沈線が施される。口縁部は半截竹管による重弧文で埋められる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土中には輝石、雲母片が多く含まれる。

12~15は単節斜縄文を地文とし、2本の沈線を垂下する。沈線間は磨り消される。12の縄文はLR。胎土中には1 mm前後の砂粒を多く含む。13・14の縄文はRL。胎土中には細礫を僅かに含む。15の縄文はRL。胎土中には軽石と思われる黄白色粒子を含む。色調は12が灰褐色(7.5YR5/2)、13がにぶい赤褐色(5YR5/4) 14がにぶい赤褐色(5YR5/3)、15が灰黄褐色(10YR5/2)。

16はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)で、胎土中には細礫を多く含む。

17は弧状の沈線下に縦位に集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)で、胎土中には細礫を含む。

18は縦位に集合する沈線を施し、それに重ねて多段に沈線を横走させる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)で、胎土中には輝石、白色粒子を僅かに含む。

19はLの撚糸文を地文とし、4本一組の沈線で連弧文が施される。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈

し、胎土中には白色粒子を含む。

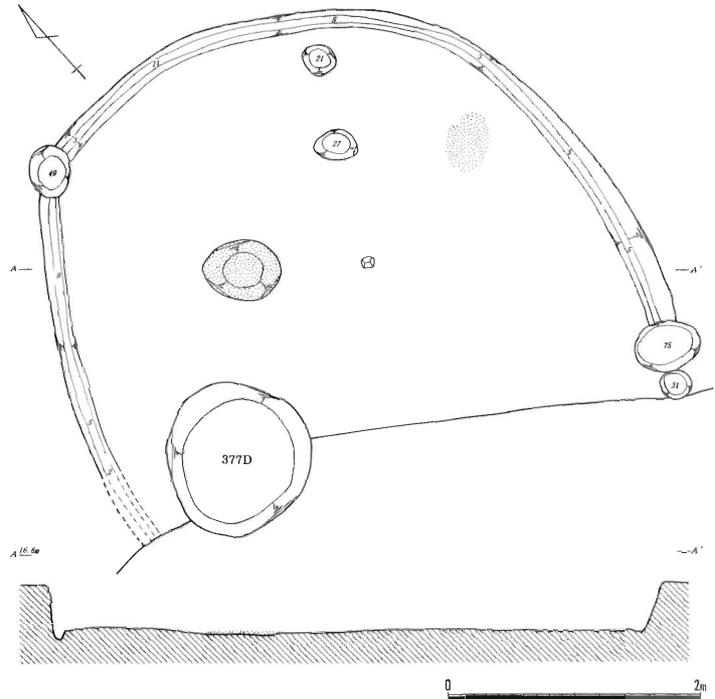
20～24は条線を地文とする土器。20は横走る沈線が施される。胎土中には細礫、白色粒子を含む。21は蛇行する隆帯が垂下する。胎土中には白色粒子を含む。22は蛇行する沈線が垂下する。胎土中には白色粒子を僅かに含む。23は直沈線が垂下する。胎土中には細礫を含む。24は胎土中には細礫を僅かに含む。色調は20が灰赤色 (2.5YR4/2)、21がにぶい橙色 (5YR6/4)、22が灰褐色 (5YR5/21)、23が赤灰色 (2.5YR4/1)、24が灰黄褐色 (10YR6/2)。

第42図9は磨製石斧で先端部のみ遺存。刃部はよく研磨されている。閃緑岩製で重量は120 g。10・11は短冊形の打製石斧。10は基部側のみ遺存する。砂岩製で重量は55 g。11は先端を欠く。片岩製で重量は90 g。

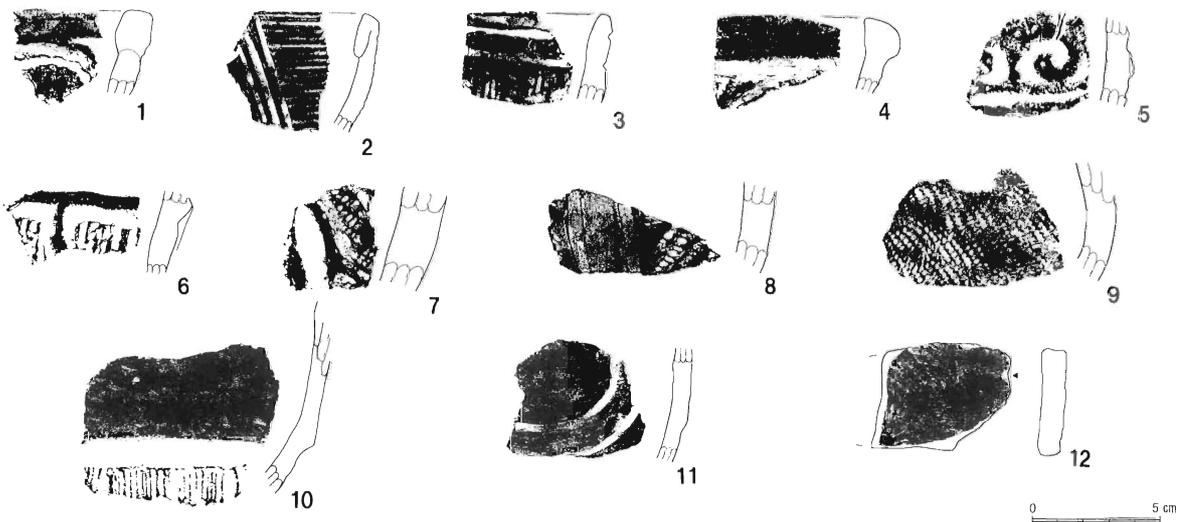
72号住居跡 (第27図)

〔位置〕 B-4 G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。71 Jを切り、255 Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×460cm。(主軸方向) N-20° - E。(壁高) 1~37cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 上幅1~21cm・下幅5~10cm・深さ3~14cmを測る。(床面) 部分的に硬化している。北壁際が一部焼けていた。(炉) 住居中央から北西寄りに位置する。径50cmの円形を呈する地床炉で深さ3cm前後を測る。(柱穴) 明確な柱穴は確認できなかった。



第27図 72号住居跡 (1/60)



第28図 72号住居跡出土遺物 (1/3)

〔覆土〕ローム粒子を含み、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む硬質な黒褐色土（10YR2/2）を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から土器片が少量出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

72号住居跡出土遺物（第28図、第42図12～14）

1は微隆帯により楕円形の区画がつくられるものと思われる。隆帯にそって結節沈線文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土中には雲母片が多く含まれる。

2は半截竹管による鋸歯状の文様が描かれようか。鋸歯間には径の小さい半截竹管による横線が規則正しく多段に施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土中には細礫、赤褐色粒子を僅かに含む。

3は口縁部に2条の沈線が巡る。地文はLRの単節縄文。色調は灰褐色（7.5Y5/2）で、胎土中には白色粒子を僅かに含む。

4はLRの単節斜縄文を地文とする。斜位の沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

5は隆帯による渦巻文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）で、胎土中には細礫を多く含む。

6は隆帯が巡り、そこから更に隆帯が垂下する。地文はLの撚糸文。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

7はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯の懸垂文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

8はRLの単節斜縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土中には石英が僅かに含まれる。

9はRLの単節斜縄文が施される。色調は黄灰色（2.5YR5/1）で、胎土中には輝石、白色粒子を含む。

10は口縁部が無文帯になる土器。条線を地文とし、凹線が巡る。色調は褐灰色（10YR4/1）で、胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。

11は沈線による渦巻文が施される。内外面ともによくミガキがかかっている。色調は灰色（N41）で、胎土中には細礫が多く含む。

12は土器片錘・拓影図左側は欠損している。刻みは1ヶ所に認められた。重量は29.8g。利用された土器片は、RLの単節斜縄文を地文とし、太沈線の懸垂文が施されたもので、色調はにぶい褐色（5YR5/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

第42図12は撥形の打製石斧で先端を欠く。砂岩製で重量は70g。13・14は短冊形の打製石斧。13は刃部を欠く。凝灰岩製で重量100g。14は刃部を僅かに欠損するが、両端が尖る形になろうか。細粒砂岩製で重量は130g。

73号住居跡（第29図）

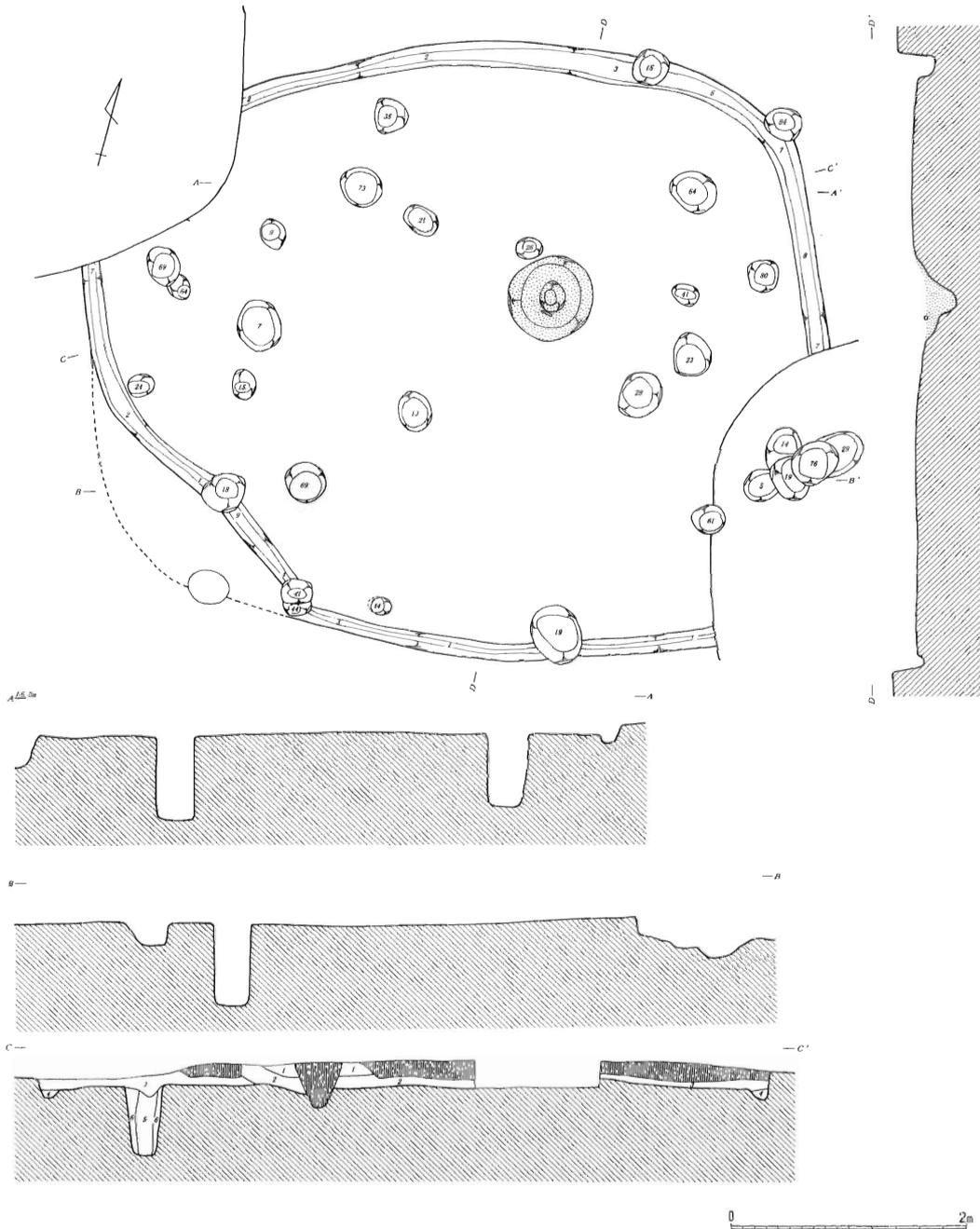
〔位置〕A-3G。

〔住居構造〕耕作による攪乱が著しい。131・252Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）630×535cm。（主軸方向）N-12°-W。（壁高）6～26cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅13～25cm・下幅5～10cm・深さ1～7cmを測る。全周すると思われる。（床面）壁際周辺を除き良く硬化している。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。85×80cm・深さ30cmの楕円形の掘り込みをもつ。炉の中央に径12

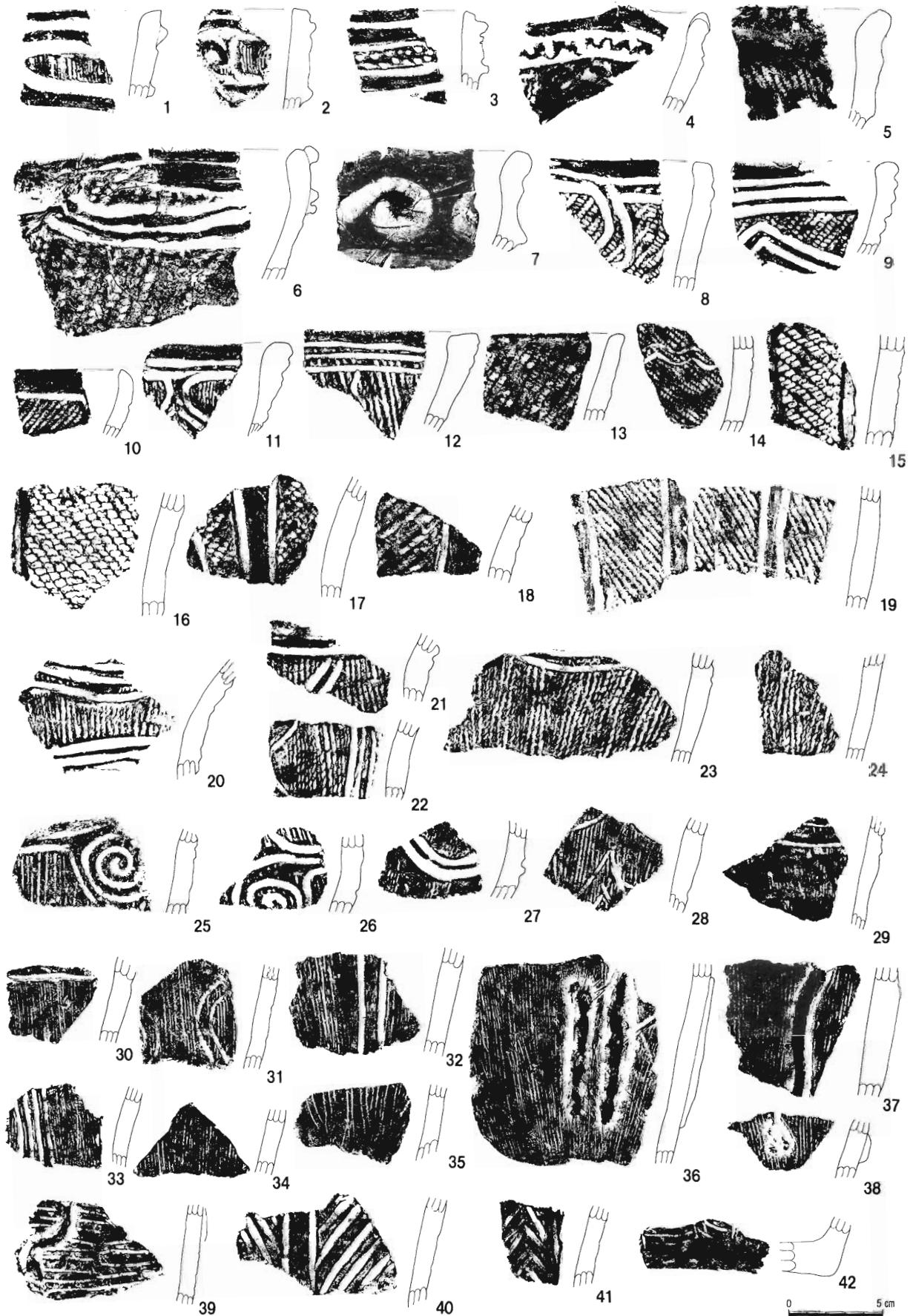
cm・深さ7cmを測るピットが検出されたが、埋設土器を抜き取った痕跡であろうか。(柱穴) 不規則な配列で支柱穴は明らかでない。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含み、焼土粒子を含む。硬質。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子、焼土粒子を多く含み、炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含み、炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含み、ローム小ブロックを含む。サクサクした感じ。
- 6層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子・ブロックを多く含む。粘性あり。



第29図 73号住居跡 (1/60)



第30图 73号住居跡出土遺物 (1/3)

〔遺物〕覆土中（1・2層）から土器片が多量に出土する。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

73号住居跡出土遺物（第30図、第41図4・5、第42図15～17）

1・2は条線を地文とし、隆帯により区画がつけられる。1の色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土中に細礫を僅かに含む。2は隆帯が渦巻状を呈する。色調はにぶい黄褐色（10YR4/3）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

3は隆帯により区画がつけられ、刺突文が充填される。色調は灰褐色（7/5YR4/2）で、胎土中には雲母片を多く含む。

4は小波状口縁になろうか。口縁部には2本の沈線が巡り、沈線間には交互刺突が加えられる。色調は赤灰色（2.5YR4/1）で、胎土中には白色粒子を含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画がつけられる。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

6はRLの単節斜縄文を地文とする。口唇部に隆帯を巡らせ、そこから2本一対の隆帯で長楕円形の区画をつくる。2本の隆帯は1本の太い隆帯上に沈線を加えることによって分割されたものである。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土中には輝石を多く含む。

7は小波状口縁となろうか。隆帯となぞりにより渦巻文がつけられる。色調は赤灰色（2.5YR4/1）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

8はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部に太沈線を2条巡らせ、そこから2条の太沈線で弧線が描かれる。色調は灰黄褐色（10YR4/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

9はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部に3条の沈線を巡らせ、やはり3本一対の沈線で連弧文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、口縁部に1条の沈線が巡る。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

11は条線を地文とする。口縁部に半截竹管による平行沈線を巡らせ、その下は単沈線による楕円形の区画になると思われる。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

12はLの撚糸文を地文とし、口縁部に3条の沈線が巡り、そこから蛇行する沈線が垂下する。色調は灰黄褐色（10YR6/2）で、胎土中には細礫、白色粒子を含む。

13はRLの単節斜文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土中には細礫が含まれる。

14はRLの単節斜縄文を地文とし、半截竹管により波状文が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土中には細礫が多く含まれる。

15～19は単節斜縄文を地文とし、単沈線の懸垂文が施される。17～19は2本の沈線間が磨り消される。15の縄文はLR。胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。16の縄文はLR。胎土中には輝石を僅かに含む。17の縄文はRL。胎土中には輝石、白色粒子を僅かに含む。18の縄文はRL。胎土中には輝石を含む。19の縄文はLR。胎土中には細礫、輝石を含む。色調は15が褐灰色（5YR4/1）、16がにぶい赤褐色（2.5YR5/3）、17がにぶい褐色（7.5YR5/3）、18がにぶい赤褐色（5YR5/4）、19がにぶい褐色（7.5YR5/3）。

20～24・27はLの撚糸文を地文とする。20は3本一対の沈線で波状連弧文・横線文が施されようか。胎土中には細礫を僅かに含む。21は2本一対の沈線により横線文と弧線文が施される。胎土中には細礫を僅かに含む。22は沈線による直行・蛇行する懸垂文が施される。胎土中には細礫を僅かに含む。23は横

位に2条の沈線が巡る。胎土中には細礫を僅かに含む。24は内面に炭化物の付着がめだつ。胎土中には細礫を僅かに含む。25・26は同一個体か。条線を地文とし、沈線による区画と渦巻文が描かれる。胎土中には軽石と思われる黄灰色粒子を含む。27は2本一対の沈線による弧線文となろうか。胎土中には雲母片を含む。色調は20が褐灰色(5YR4/1)、21が灰褐色(7.5YR5/2)、22が褐灰色(5YR4/1)、23がにぶい褐色(7.5YR5/2)、24がにぶい赤褐色(5YR5/4)、25・26はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)、27がにぶい褐色(7.5YR6/3)。

28～38は条線を地文とする。28は2本一対の沈線により連弧文が描かれる。胎土中には白色粒子を含む。29は2条の沈線が巡る。条線は部分的なミガキにより磨り消されている。胎土中には細礫を多く含む。30は沈線が巡る。胎土中には細礫を僅かに含む。31は2本一対の沈線により蛇行する懸垂文が施される。内面には炭化物が付着する。胎土中には砂礫、輝石を含む。32・33は平行する沈線が垂下する。32の胎土中には細礫を僅かに含む。33の胎土中には細礫を含む。34は細礫を僅かに含む。35は細礫を僅かに含む。36は棒状の貼付文が2本みられる。胎土中には細礫を僅かに含む。37は蛇行する隆帯が貼付される。胎土中には細礫を僅かに含む。38は瘤状の貼付文がみられる。胎土中には細礫を僅かに含む。色調は28が灰褐色(5YR5/2)、29が褐灰色(7.5YR4/1)、30がにぶい赤褐色(5YR5/3)、31がにぶい橙色(5YR4/4)、32がにぶい赤褐色(2.5YR4/3)、33が褐灰色(7.5YR4/1)、34が灰褐色(7.5YR5/2)、35がにぶい橙色(5YR6/4)、36がにぶい褐色(7.5YR5/3)、37がにぶい褐色(7.5YR6/3)、38が灰褐色(5YR5/2)。

39は横線を多段に施し、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)で、胎土中には細礫を含む。

40は平行する沈線を垂下し、斜位の集合する沈線で器面をおおう。色調は灰褐色(5YR4/1)で、胎土中には細礫を含む。

41は2本の沈線間に矢羽根状の沈線文が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)で、胎土中には細礫が僅かに含まれる。

42は底部破片。平行沈線の懸垂文間に弧線が多段に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)で、胎土中には細礫を含む。

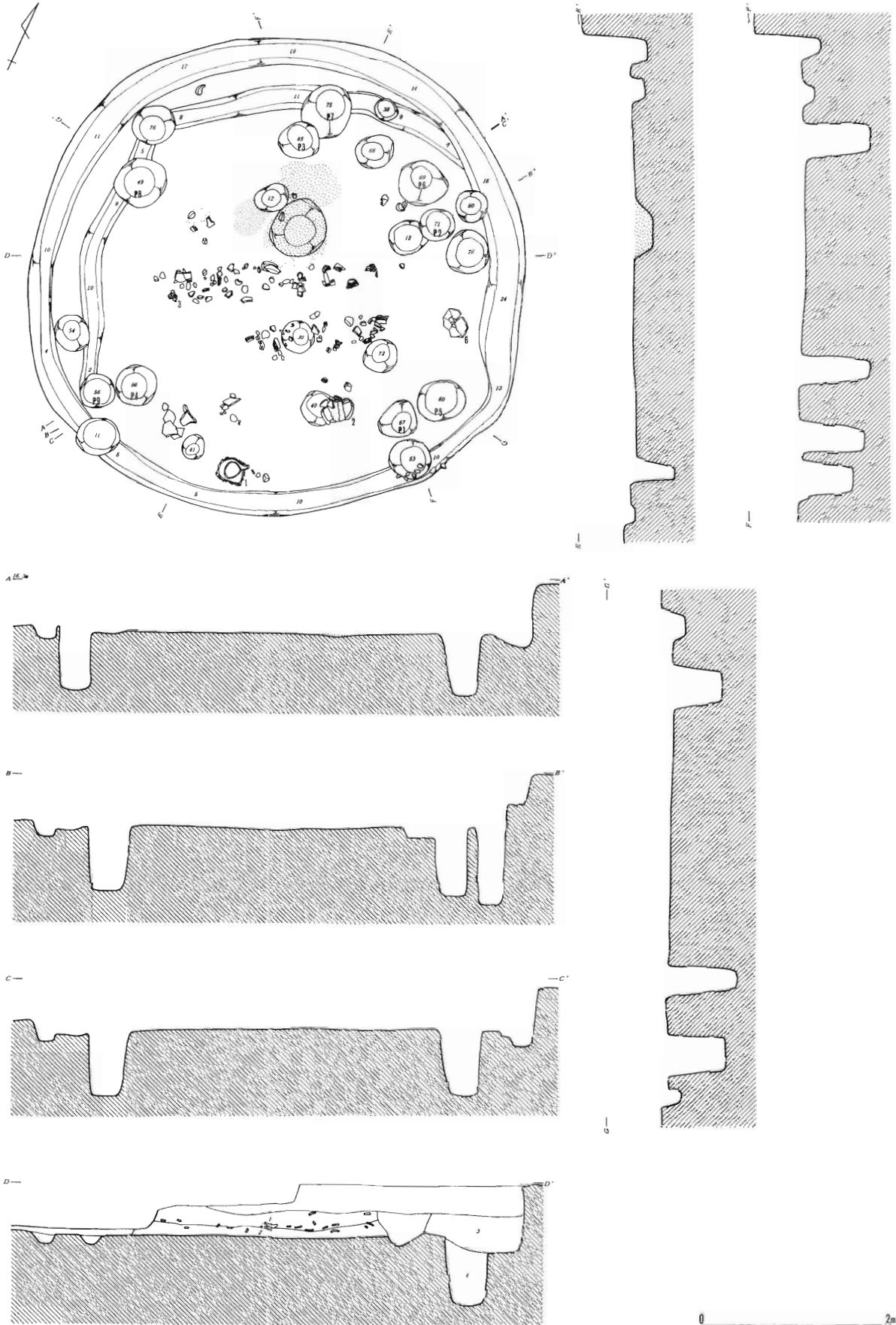
第41図4は二等辺三角形を呈する打製石鏃。脚部を欠損する。黒曜石製で重量は0.9g。5は縦長の剥片。黒曜石製で重量は3.1g。

第42図15は磨製石斧。先端を欠損する。全面がよく研磨されている。緑色凝灰岩製で重量は515g。16は分銅形の打製石斧。両端を欠く。珪岩製で重量は95g。17は撥形の打製石斧。両端を欠く。ホルンフェルス製で重量は110g。

74号住居跡(第31図)

〔位置〕C-3G。

〔住居構造〕258Yに切られる。(平面形)円形。(規模)530×520cm。(主軸方向)N-5°-W。(壁高)6~56cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)西側は二重に巡り、東側は共用したと思われる。外側は上幅20~40cm・下幅13~30cm・深さ4~20cmを測り、全周する。内側は上幅15~30cm・下幅10~15cm・深さ7~11cmを測る。(床面)全体に良く硬化している。拡張前のピット上部と壁溝上部に貼床を施している。住居北側の床面が部分的に焼けている。(炉)住居中央から北に偏って位置する地床炉。幅65×55cm・深さ20cmを測る楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴)数本が集中する部分もあるが、拡張前の支柱



第31图 74号住居跡 (1/50)

穴はP 1～P 4 の 4 本が該当すると思われる。P 5～P 9 の 5 本は拡張後の主柱穴であろう。

〔覆土〕

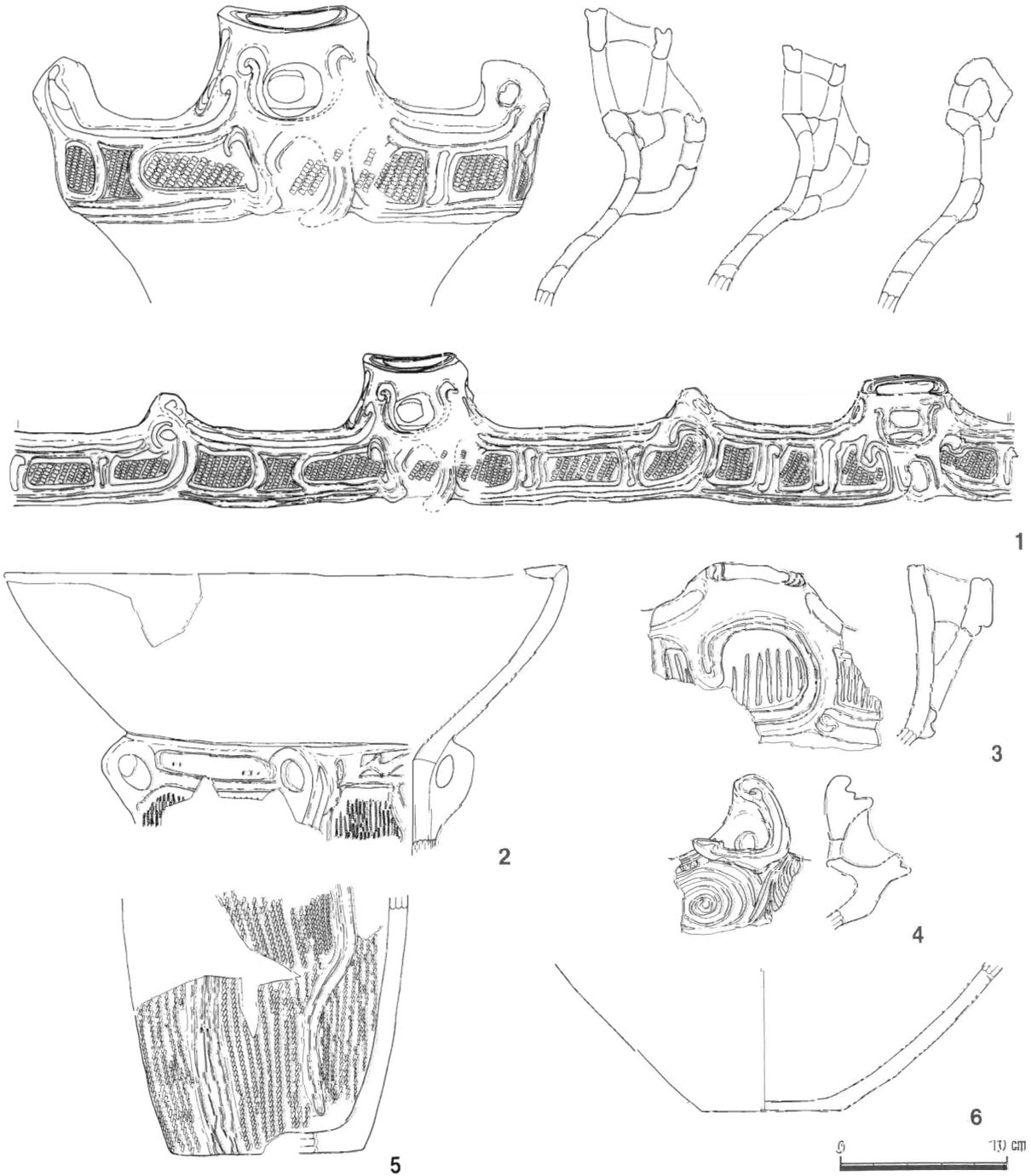
1層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含み、焼土粒子、炭化物粒子を含む。硬質。この層に遺物が多く含まれる。

2層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子、焼土粒子を多く含み、炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗赤褐色土(5YR2/2)。ローム粒子を多く含み、炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。粘性あり。

〔遺物〕 覆土中から多量に出土した。



第32図 74号住居跡出土遺物1 (1/4)

〔時期〕加曾利E I式期。

〔所見〕拡張住居の可能性が大きい。

74号住居跡出土遺物（第32・33図、第41図6、第43図1～13）

1はキャリパー形の深鉢形土器で、頸部以上が遺存する。口径23.5cmを測る。頸部は無文帯となる。口縁部はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により楕円形・長方形などの区画が8単位つくられるが、突起がつく部分では区画が広がる。区画連結部の隆帯上は、沈線による「S」字状文で加飾される。突起は4ヶ所につけられる。図正面の突起は横長の長方形のもので、上部と前後・両側面に窓があくように粘土紐をを使いつくられる。また、この突起の基部から口縁部下端にかけては、やはり粘土紐で上部と前面・両側面が窓状にあく把手がつけられる。連続する突起前面と把手上部の窓の周りには両端が渦巻状になる「U」字状の沈線が加えられる。突起上面の窓には沈線が巡らされる。突起右側面は「C」字状に窓があき沈線が巡る。左側面は縦位に2ヶ所の窓があき、それぞれが沈線によって囲まれる。把手前面と両側面の窓も沈線によって囲まれる。反対側の突起・把手は正面のものを小さくしたもので、突起左側面の窓が1ヶ所になる以外は同じ作りである。図左右の小型の突起は同じ作りで、口縁部文様の2本組隆帯の渦巻文をそのまま口縁部に盛り上げて三角形の突起とする。前後・両側面には円孔が穿たれる。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、胎土中には細礫を多く含む。南東壁際の覆度下層から逆位の状態で、住居中央に向けて傾斜をもって出土した。

2は胴部上半以上が遺存する。口径29cmを測る。胴部は円筒形を呈すると思われ、口縁部は僅かに内湾しながら大きく開き、口唇部は強く内屈し水平になる。口縁部は無文で、頸部には隆帯による長楕円形の区画を4単位設ける。1ヶ所の区画内には隆帯と波状文が充填される。各区画の連結部には眼鏡状把手がつき、そこから2本組隆帯の懸垂文が貼付される。また、懸垂文間には蛇行する隆帯が垂下する。地文はLの撚糸文である。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土中には明黄褐色粒子を含む。住居東側、覆土上層からの出土。

3は口唇部上の横長の突起に口縁部からの2本組隆帯の渦巻文が連結する。突起部は上面と両側面に窓があくが、上面の窓の周りには沈線が巡る。口縁部は縦位の集合する沈線を地文とし、2本組隆帯で区画される。色調はにぶい褐色（705YR6/3）を呈し、胎土中には細礫を多く含む。住居西側の覆土上層から出土。

4は大きく内湾する口縁部の上端から隆帯を馬蹄形状に立ち上げて、尖頭状の突起とする。隆帯上には両端が渦巻状になる沈線が施される。突起には円孔が穿たれる。口縁部の文様は沈線による渦巻文となる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土中には輝石、白色粒子を含む。炉の東側、覆土下層からの出土。

5は胴部下半1/2周程のみ遺存。径11.7cmを測る底部から僅かに内湾しながらほぼ円筒状に立ち上がる。Lの撚糸文を地文とし、2本組隆帯、蛇行隆帯が交互に垂下する。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中には細礫を含む。

6は浅鉢形土器。体部上位以上を欠損する。径8.7cmを測る底部から、僅かに内湾しながら大きく開く。色調はにぶい橙色（2.5YR6/3）を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。東壁寄りの覆土上層から出土。

7は波状口縁の土器。口縁部に沿って角押文が施される。以下、逆「U」字状の区画になろうか。地文は斜位の細沈線。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土中には輝石、白色粒子を含む。

8は隆帯を横走させ口縁部と胴部を区画する。口唇部下部と隆帯上部に2条の結節沈線文を巡らせ、



第33图 74号住居跡出土遺物 2 (1/3)

その間に結節沈線文の方向を変えて山形に施す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）で、胎土中には雲母片を多く含む。

9は波状沈線文が2条巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には雲母片を多く含む。

10は横位に連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）で、胎土中には雲母片を多く含む。

11は板状の突起で、上部は大きく広がり「T」字状になる。上端は平坦で長楕円形になる。口縁部からの刻みが加えられた隆帯がそのまま突起上端の縁辺部を巡る。平坦部には角押文が眼鏡状に施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土中には細礫、雲母片を多く含む。

12は外側竹管による押引文が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には輝石を僅かに含む。

13は角押文により器面が飾られる。角押文は一部波状に施され、また、三角形の区画内には三叉文がみられる。色調は灰黄褐色（10YR5/2）で、胎土中には雲母片を僅かに含む。

14は口縁部に無文帯をもち、以下、隆帯を貼付した後、R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には輝石を含む。

15は隆帯を巡らせ、上位には角押文、下位には連続爪形文を施す。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土中には輝石を含む。

16は隆帯の脇に連続爪形文が施され、それを波状沈線文がなぞる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

17は連続爪形文が加えられた隆帯が巡り、上位には沈線による文様、下位にはR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土中には雲母片を僅かに含む。

18は押引文が加えられた隆帯が巡り、上位には沈線による文様、下位にはR Lの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土中には輝石を僅かに含む。

19は2本組隆帯による渦巻文と沈線による重畳する長方形の区画がみられる。部分的に刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）で、胎土中には細礫、輝石を僅かに含む。

20～26はLの撚糸文を地文とし、2本組隆帯により渦巻文や区画がつくられる。20は渦巻文が器面から突出する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土中には輝石を含む。21は隆帯が突出する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には輝石を含む。22は口唇部上に山形の突起が付けられる。突起には楕円形の窓が穿たれる。口縁部の文様は渦巻文と縦長の隆帯。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土中には輝石を僅かに含む。23は口縁部の2本組隆帯が盛り上がり、そのまま口唇部上の小突起となる。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土中には暗赤色の粒子を僅かに含む。24の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には砂粒を僅かに含むが、精選されている。25は長楕円形の区画がつくられようか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。26は頸部が無文帯になる。27・28はR Lの単節斜縄文を地文とし、2本組隆帯により渦巻文や区画がつくられる。27の色調はにぶい橙色（5YR6/4）で、胎土中には細礫を僅かに含む。28の色調は暗赤灰色（2.5YR3/1）で、胎土中には砂粒を僅かに含むが精選されている。

29・30は2本組隆帯で区画がつくられる。区画内には縦位の沈線が充填される。29の色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土中には輝石を多く含む。30の色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土中には輝石を多く含む。

31～34はLの撚糸文を地文とし、31～33は蛇行する隆帯が垂下する。31の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）

で、胎土中には細礫を僅かに含む。32の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土中には輝石を僅かに含む。33の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土中には輝石を含む。34の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土中には細礫を含む。

35・36はRL、37はLRの単節斜縄文を地文とする。35は横位に3条の沈線を巡らせ、以下、直行・蛇行する懸垂文を施す。色調は黒褐色（5YR3/1）で、胎土中には細礫を含む。36は2本組の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土中には輝石を含む。37は2本組隆帯が弧を描いて貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土中には輝石を多く含む。

38・39は長軸の両端に刻みが加えられた土器片錘。38は4.5×3.5cm、重さ22.6gを測る。利用されたのは連続爪形文と波状沈線文が施された土器片で、色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土中には輝石を僅かに含む。39は6.7×6cm・重さ68.2gを測る。土器片には刻みが加えられた2本組隆帯が貼付され、沈線による渦巻文がみられる。色調は赤褐色（10YR4/3）で、胎土中には細礫、輝石を含む。

第41図6は側縁が外湾する打製石鏃。基部の挟りはやや鋭角的である。黒曜石製で重量は0.9g。

第43図1～5・7は短冊形の打製石斧。1・2のように先端部が僅かに開く撥形に近いものもある。4・5は基部を、7は先端を欠く。1はホルンフェルス製で重量は175g。2は身に反りがある。ホルンフェルス製で重量は220g。3は刃部に摩耗痕が認められる。片岩製で重量は110g。4は砂岩製で重量は165g。5は砂岩製で重量は125g。7はホルンフェルス製で重量は80g。6は図正面の右側がくびれる。安山岩製で重量は185g。8・9は撥形の打製石斧。8は基部を欠く。ホルンフェルス製で重量は95g。9は先端を欠く。細粒砂岩製で重量は45g。10・11は分銅形の打製石斧。10は砂岩製で重量は130g。11は刃部が弧状を呈する。ホルンフェルス製で重量は175g。12は石皿。図正面右上に浅い凹むがみられる。はんれい岩製。13は叩石。砂岩製で重量は340g。

4号埋壺（第34・35図）

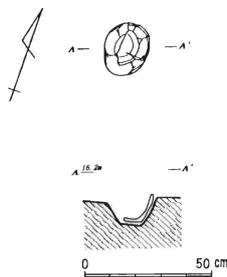
〔位置〕A-2G

〔主軸方向〕N-21°-W。

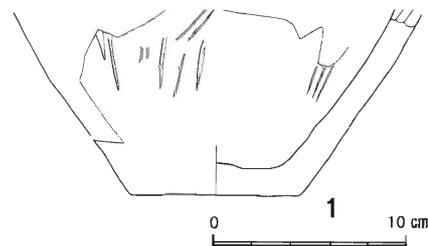
〔構造〕45×35cmの楕円形を呈する、深さ25cmの掘り込みをもち、深鉢形土器を埋設しているが、耕作による攪乱が著しく、遺存状態が悪く胴部下位のみである。

〔時期〕加曾利E式期。

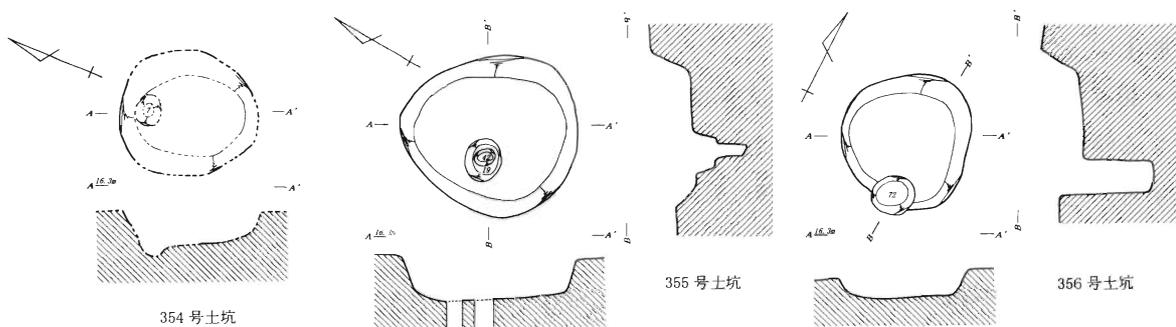
〔埋設土器〕胴部中位以下1/4周程の遺存度で、底径8.8cmを測る。低部からほぼ直線的に開く。器面が荒れて不鮮明であるが、縦位の沈線が施されるらしい。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。



第34図 4号埋壺（1/30）



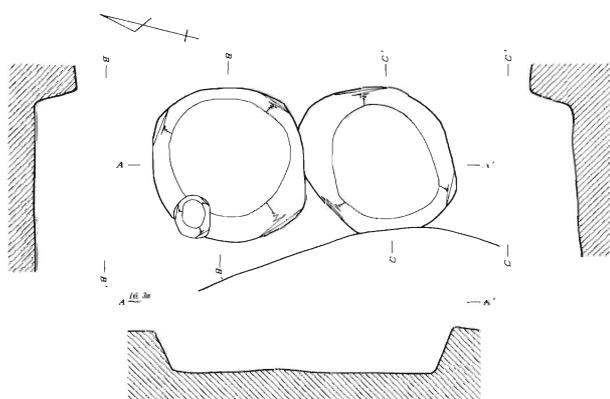
第35図 埋設土器（1/4）



354号土坑

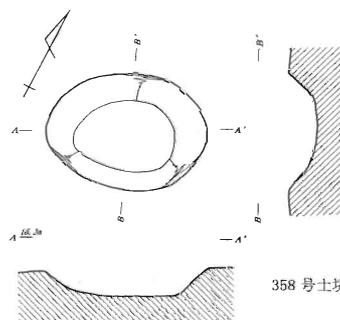
355号土坑

356号土坑

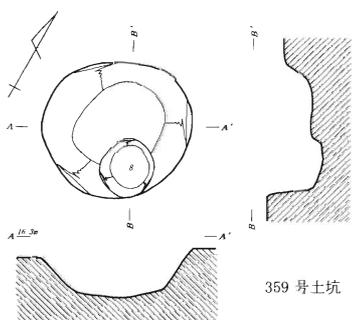


357号土坑

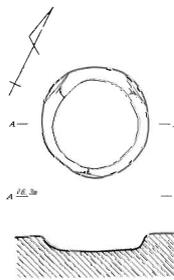
360号土坑



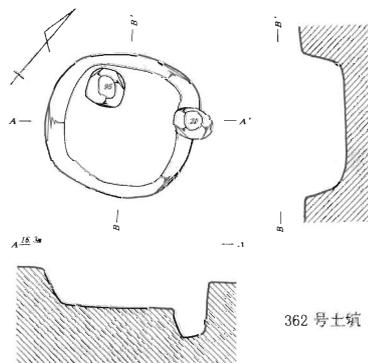
358号土坑



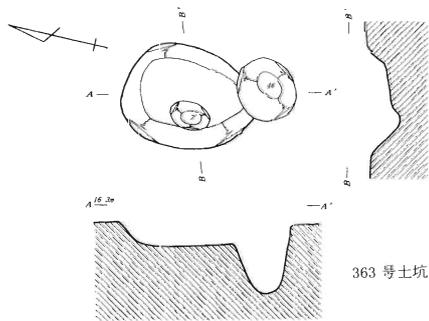
359号土坑



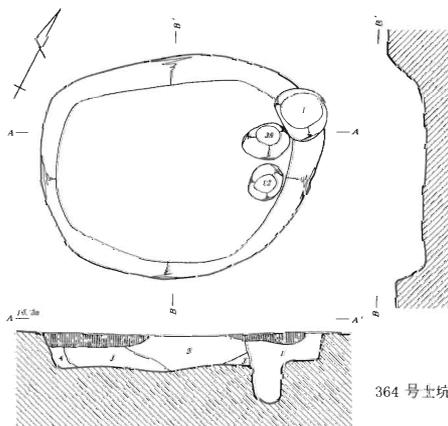
361号土坑



362号土坑



363号土坑



364号土坑



第36图 354~359·361~364号土坑 (1/60)

354号土坑（第36図）

〔位置〕 C-2 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。ピットは土坑に伴うのか確認できない。（平面形）不整円形。（規模）55×50cm・深さ10cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-23°-W。

〔覆土〕 ローム粒子を含む締まりのある黒褐色土（上層5YR2/1、下層7.5YR3/1）で、炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 土器片10点。

〔時期〕 勝坂式期。

354号土坑出土遺物（第38図1～4）

1～3は同一個体の可能性が大きい。1は口縁部破片で、半截竹管による連続爪形文が附加された隆帯で環状の突起がつけられる。口縁部の文様は半截竹管による平行沈線で楕円形の区画がつけられ、区画内には斜位の集合する沈線が充填される。2・3は肩部から底部にかけての破片。両者を統合してみると基本文様は半截竹管による逆「U」字状の縦区画で、区画内には斜位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土中には雲母片を多く含む。

4は波状口縁の土器で、口唇部が肥厚する。口縁部には隆帯が横走する。口唇肥厚部の下位、隆帯の上位に沿って角押文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には雲母片を多く含む。

355号土坑（第36図）

〔位置〕 B-2 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。西側のピットは土坑に伴うのか確認できない。（平面形）不整楕円形。（規模）140×130cm・深さ35cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-30°-W。

〔覆土〕 ローム粒子を含む締まりのある黒褐色土（上層10YR2/2、下層7.5YR2/2）である。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 土器片27点、打製石斧1点。

〔時期〕 加曾利E式期。

355号土坑出土遺物（第38図5～11、第43図14）

5は2条の隆帯が弧状に貼付される。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土中には細礫が多く含まれ、輝石も僅かにみられる。

6はRLの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。隆帯の両脇は沈線によりなぞられる。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土中には輝石、白色粒子が目立つ。

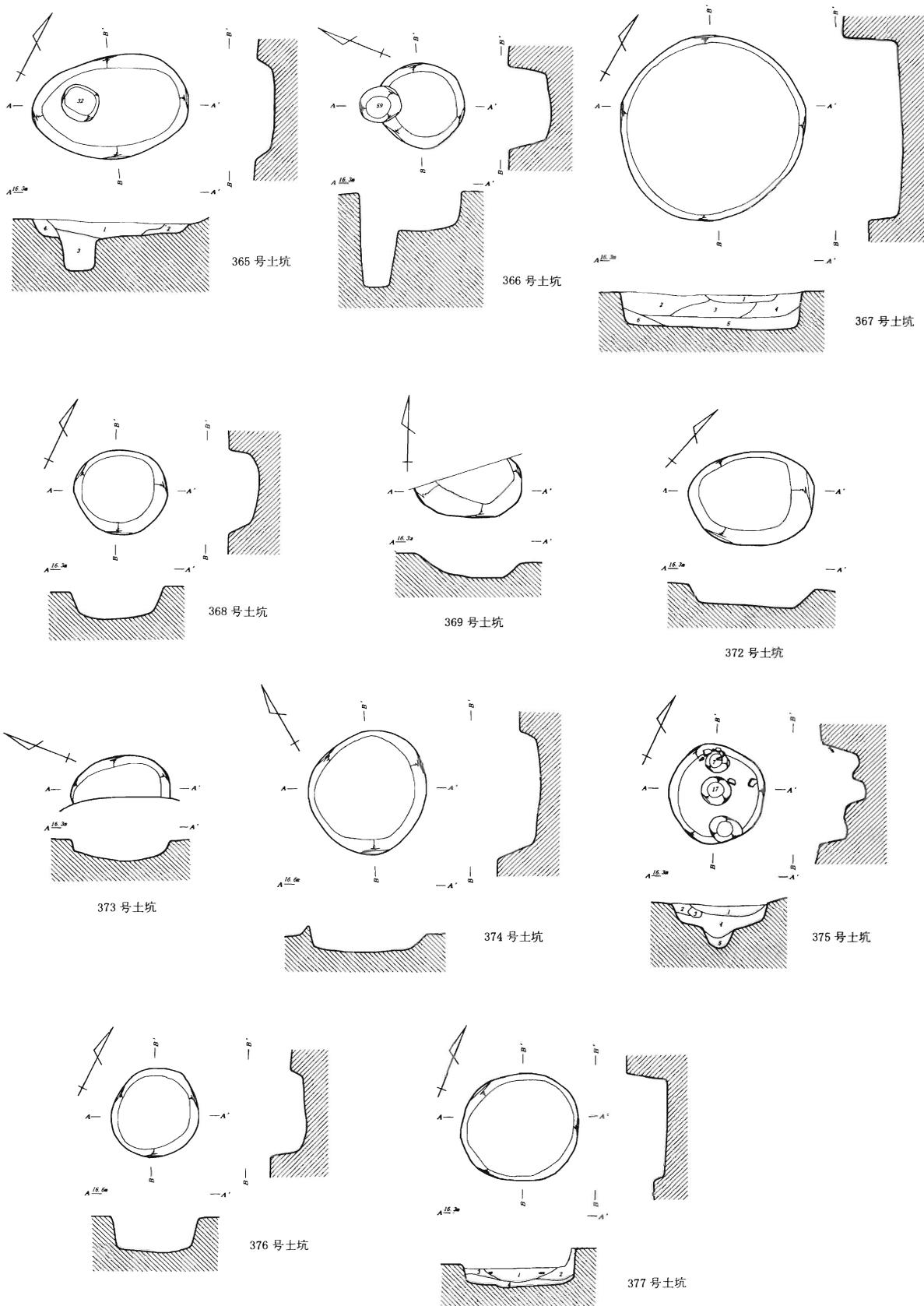
7はLRの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土中には輝石、白色粒子を含む。

8はRLの単節斜縄文を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土中には細礫、輝石、白色粒子を含む。

9はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、白色粒子を僅かに含む。

10は縦位に条線が施される。色調は赤灰色（2.5YR4/1）で、胎土は細礫を僅かに含むがきめ細かい。

11は土器片錘。4×3cm・重さ19.8gを測る。長軸の両端に刻みが加えられる。RLの単節縄文を地



第37图 365~369·372~377号土坑 (1/60)

文とし、横位の太沈線が施された土器片を利用している。色調は暗赤灰色（7.5YR3/1）で、胎土中には細礫が多く含まれる。

第43図14は短冊形の打製石斧。刃部側1/2程を欠く。ホルンフェルス製で重量は65g。

356号土坑（第36図）

〔位置〕 B-2G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。南側のピットは土坑に伴うのか確認できない。（平面形）不整楕円形。（規模）110×100cm・深さ15cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-64°-W。

〔覆土〕 ローム粒子を含む黒褐色土（上層10YR2/2、下層7.5YR2/2）で、下層には焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

〔遺物〕 土器片22点、剥片1点。

〔時期〕 加曾利E式期。

356号土坑出土遺物（第38図12～17、第41図7）

12は口縁部に3条の沈線を巡らせ、Lの撚糸文が施される。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土中には白色粒子を含む。

13は頸部破片で、沈線が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR/3）で、胎土中には細礫と輝石を含む。

14はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が2本垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には灰黄色粒子を多く含む。

15はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）で、胎土中には細礫を多く含む。

16はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR/3）で、胎土中には砂粒を多く含む。

17は条線を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（5YR6/4）で、胎土中には砂粒を多く含む。

第41図7は縦長の剥片で先端側1/2程を欠く。黒曜石製で重量は1.1g。

357号土坑（第36図）

〔位置〕 B-2G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。（平面形）不整円形。（規模）120×125cm・深さ1～30cmを測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-13°-W。

〔覆土〕 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む硬質の黒褐色土（10YR3/2）の単一土層である。

〔遺物〕 土器片21点。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

357号土坑出土遺物（第38図18～21）

18は隆帯による区画と渦巻文が施される。区画内の地文はRLの単節斜縄文。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

19は口縁部に隆帯が巡る。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土中には細礫、白色粒子を僅かに含む。

20はRLの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎

土には白色粒子を含む。

21は縦位の沈線を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には細礫を僅かに含む。

358号土坑（第36図）

〔位置〕 B-2 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。（平面形）楕円形。（規模）130×100cm・深さ20cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。坑底に焼けた痕跡がある。（長軸方向）N-62°-E。

〔覆土〕 ローム粒子・焼土粒子を多く含む硬質の黒褐色土（10YR2/3）の単一土層である。

〔遺物〕 土器片23点の出土があったが、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

359号土坑（第36図）

〔位置〕 A-2 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。南側のピットは土坑に伴うのか確認できない。（平面形）不整形。（規模）120×110cm・深さ35cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-20°-W。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む硬質の黒褐色土（10YR2/3）の単一土層である。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 土器片13点。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

359号土坑出土遺物（第38図22～24）

22はLRの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線間は磨り消される。内面には部分的に炭化物が付着する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

23はRLの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細礫、白色粒子を僅かに含む。

24はLの撚糸文が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石を多く含む。

360号土坑（第36図）

〔位置〕 B-2 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。252Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）130×115cm・深さ1～35cmを測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-13°-W。

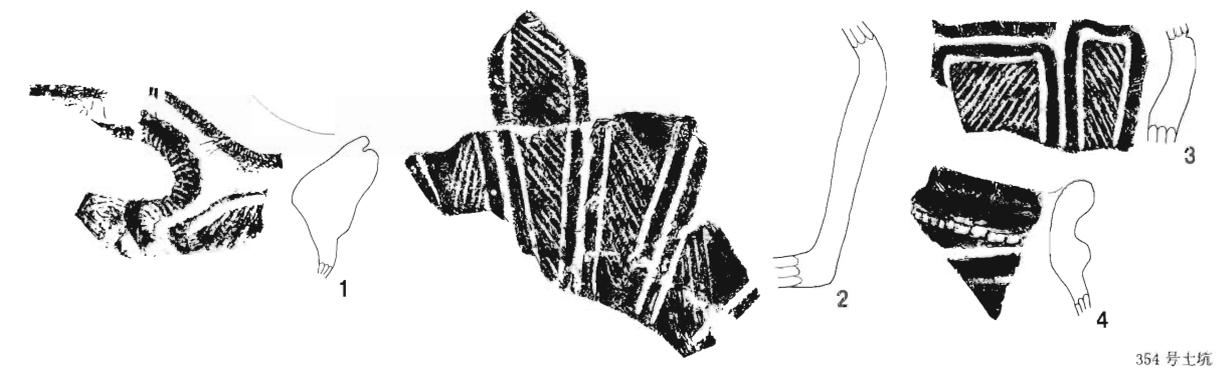
〔覆土〕 ローム粒子を多く含む硬質の黒褐色土（7.5YR2/2）の単一土層である。焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 出土しなかった。

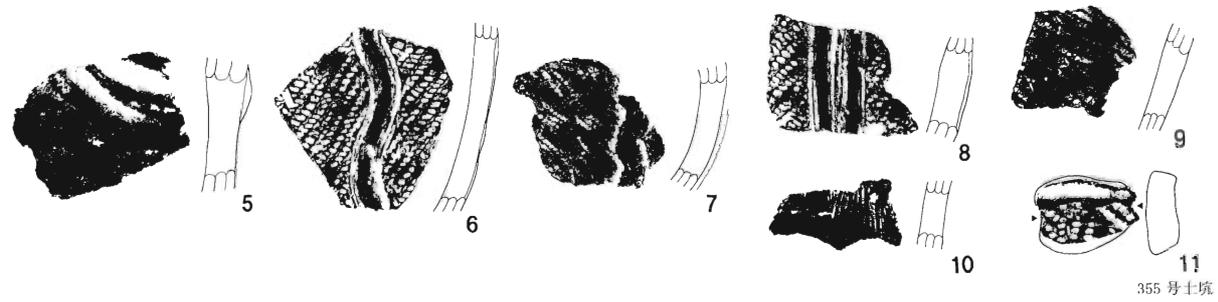
〔時期〕 不明。

361号土坑（第36図）

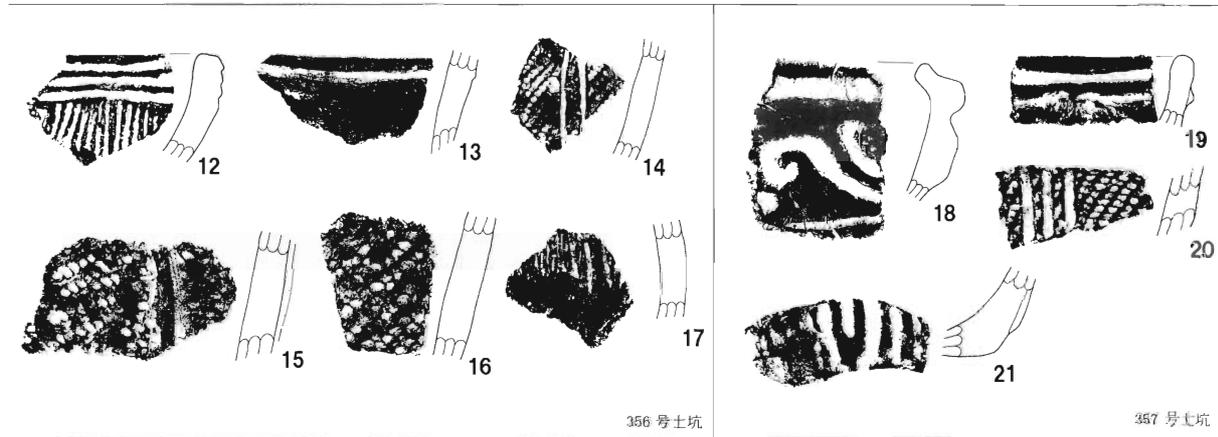
〔位置〕 B-2 G。



354 号土坑

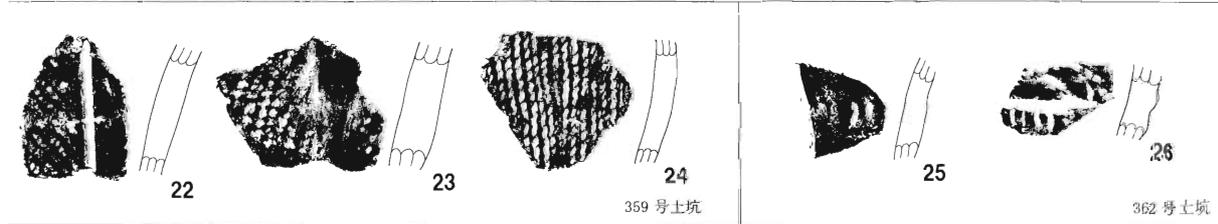


355 号土坑



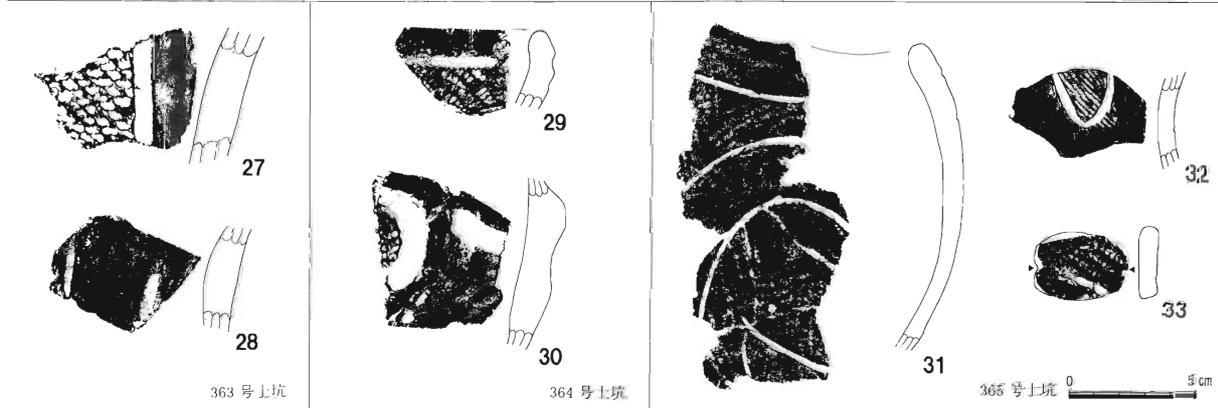
356 号土坑

357 号土坑



359 号土坑

362 号土坑



363 号土坑

364 号土坑

365 号土坑 0 5cm

第38图 土坑出土遗物 1 (1/3)

〔構造〕耕作による攪乱が著しい。(平面形)円形。(規模)90×85cm・深さ10cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。(主軸方向)N-64°-E。

〔覆土〕ローム粒子を含む硬質の黒褐色土(10YR3/2)の単一土層である。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕不明。

362号土坑(第36図)

〔位置〕B-2G。

〔構造〕254Yに切られる。壁際と坑底のピットは土坑に伴うのか確認できない。(平面形)不整形円形。(規模)120×120cm・深さ30cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。(長軸方向)N-52°-E。

〔覆土〕ローム粒子を含む硬質の黒褐色土(10YT2/2)の単一土層である。壁際はローム粒子が多い。

〔遺物〕土器片12点。

〔時期〕勝坂式期。

362号土坑出土遺物(第38図25・26)

25は幅広の連続押圧爪形文が施される。色調は暗赤灰色(10YR4/1)で、胎土には雲母片を多く含む。

26は刻みを付加した隆帯が横位に貼付される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)で、胎土には細礫と輝石を含む。

363号土坑(第36図)

〔位置〕A-2G。

〔構造〕耕作による攪乱が著しい。坑底と壁を切っているピットは土坑に伴うものか確認できない。(平面形)楕円形。(規模)90×85cm・深さ20cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。(長軸方向)N-14°-W。

〔覆土〕焼土粒子・焼土ブロックを多く含む硬質の黒褐色土(10YR2/3)の単一土層である。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕土器片4点

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

363号土坑出土遺物(第38図27・28)

27はLRLの複節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)で、胎土には細礫がめだつ。

28は縦位に沈線が施される。色調は(2.5YR4/1)で、胎土には輝石を多く含む。

364号土坑(第36図)

〔位置〕A-2G。

〔構造〕耕作による攪乱が著しい。壁際のピットは土坑に伴うのか確認できない。(平面形)不整形楕円形。(規模)220×180cm・深さ25cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は比較的平坦である。(長軸方向)N-63°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 土器片 8点。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

364号土坑出土遺物 (第38図29・30)

29は口縁部に沈線が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) で、胎土には輝石がめだつ。

30は隆帯で区画がつくられる。区画内はRLの単節斜縄文。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) で、胎土には軽石と思われる明黄褐色粒子を僅かに含む。

365号土坑 (第37図)

〔位置〕 A-2G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。ピットは土坑に伴うのか確認できなかった。(平面形) 楕円形。(規模) 160×110cm・深さ10cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。(長軸方向) N-62°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 土器片 9点。

〔時期〕 加曾利EⅣ式期。

365号土坑出土遺物 (第38図31~33)

31は内湾しながら立ち上がる波状口縁の土器。口縁部には沈線が巡り、以下、幾何学的な磨消縄文となる。地文はLRの単節縄文。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) で、胎土には浅黄色粒子がめだつ。

32は磨消縄文が施される。地文はLRの単節斜縄文。色調は灰黄褐色 (10YR5/2) で、胎土は灰黄色粒子を僅かに含み緻密である。

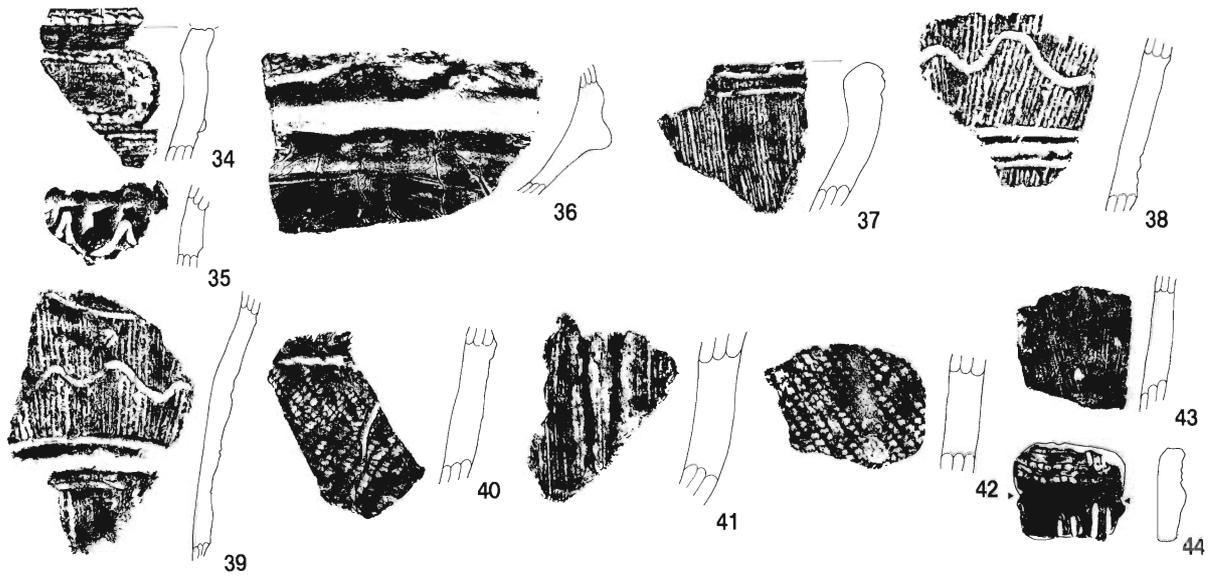
33は土器片錘。3.5×2.7cm・重さ10.8gを測る。長軸の両端に刻みが加えられる。RLの単節縄文が施された土器片を利用している。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) で、胎土には細礫を含む。

366号土坑 (第37図)

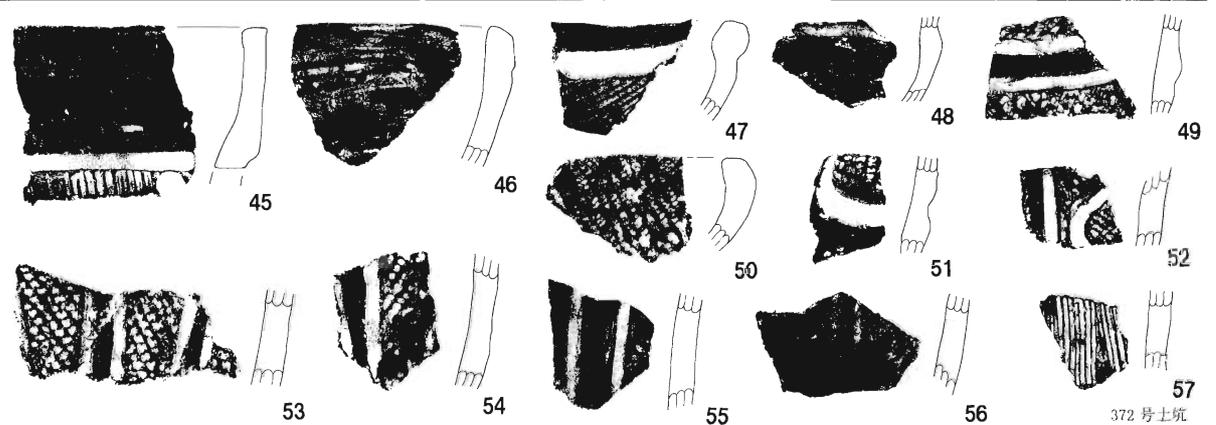
〔位置〕 B-2G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。ピットは土坑に伴うのか確認ができなかった。(平面形) 不整形。(規模) 85×85cm・深さ40cm前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。

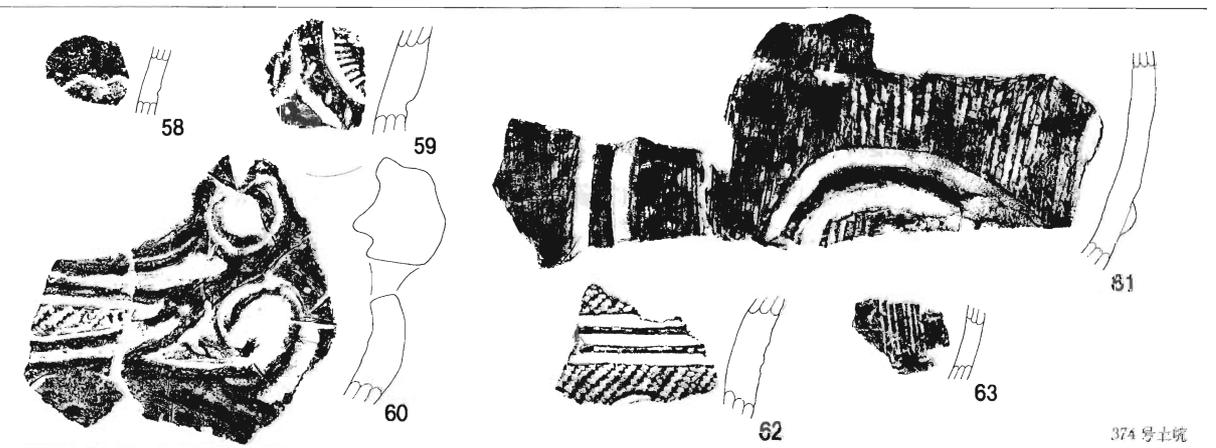
〔覆土〕 ローム粒子を含む硬質の黒褐色土 (10YR2/2) の単一土層である。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。



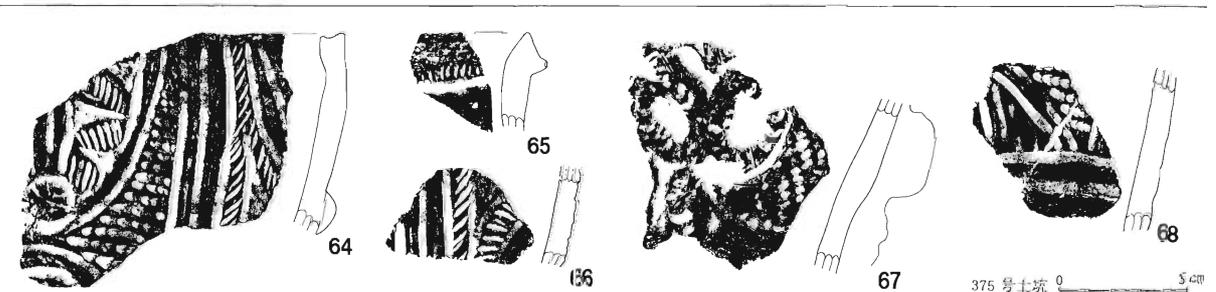
367 号土坑



372 号土坑



374 号土坑



375 号土坑 0 5 cm

第39图 土坑出土遺物 2 (1/3)

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

367号土坑（第37図）

〔位置〕 B-2 G。

〔構造〕 254 Yに切られる。（平面形）円形。（規模）190×190 cm・深さ30 cm前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦で整った形状をなしている。（長軸方向）N-35° -W。

〔覆土〕 不整合な堆積で埋め戻された感が大きい。

1層 254 Y貼付。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。

3層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。

4層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。

6層 暗褐色土（10YR3/4）。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 土器片65点、打製石斧2点。

〔時期〕 加曾利E II式期。

367号土坑出土遺物（第39図34~44、第43図15・16）

34は口縁部に隆帯による楕円区画がつくられ、区画内は隆帯に沿って角押文が巡る。区画下位の隆帯下にも角押文が施される。また、口唇端部にも角押文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母片を多く含む。

35はヒダ状の指頭圧痕を残し、角押文により波状文をつくる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には雲母片を多く含む。

36は浅鉢形土器か。上部に隆帯の貼付がみられる。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には細礫を僅かに含む。

37~39は条線を地文にする。37は口縁部に2条の沈線が巡る。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。38は上位が沈線による波状文、下位は2条の沈線が巡り、沈線間には押引文が施される。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫、輝石を含む。39は沈線により弧線文・波状文・平行線文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には細礫、輝石を含む。

40はRLの単節縄文を地文にし、僅かに蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。

41は沈線を地文にし、2本の隆帯が垂下する。色調は赤灰色（2.5YR4/1）で、胎土には細礫と僅かな輝石を含む。

42はLRの単節斜縄文が施される。色調は赤褐色（5YR5/4）で、胎土には白色粒子を含む。

43は条線が施される。色調は灰黄褐色（10YR6/2）で、胎土には白色粒子を含む。

44は土器片錘。4×3.7 cm、重さ24 gを測る。長軸の両端に刻みが加えられる。隆帯と結節沈線文がみられる土器片を利用。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

第43図15・16は短冊形の打製石斧。15は刃部側1/2程を欠く。砂岩製で重量は85 g。16は砂岩製で重量は135 g。

368号土坑（第37図）

〔位置〕 C-2 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。（平面形）円形。（規模）85×85cm・深さ30cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-65°-E。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む暗褐色土（7.5YR3/3）の単一土層である。

〔遺物〕 土器片3点。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 加曾利E式期。

369号土坑（第37図）

〔位置〕 A-3 G。

〔構造〕 北側は平成8年度の調査で確認できない部分であった。（平面形）楕円形。（規模）不明。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-72°-E。

〔覆土〕 ローム粒子を含む硬質の黒褐色土（7.5YR3/1）の単一土層である。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

372号土坑（第37図）

〔位置〕 A-3 G。

〔構造〕 （平面形）楕円形。（規模）130×100cm・深さ20cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-49°-E。

〔覆土〕 ローム粒子を含む硬質の黒褐色土（7.5Y3/2）の単一土層である。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 土器片46点。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

372号土坑出土遺物（第39図45～57）

45は凹線に区画された口縁部が広い無文帯になる。凹線下は条線が施される。補修孔がみられる。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土は輝石を含むが細かい。

46は器面に擦痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石を含む。

47は波状口縁になろうか。口縁部には凹線が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫を含む。

48は凹線下にLRの単節斜縄文が施される。色調は黒褐色（5YR3/1）で、胎土には輝石、白色粒子を僅かに含む。

49はRLの単節斜縄文を地文にし、2条の沈線が横走する。沈線間は磨り消される。色調は灰赤色（2.5YR5/2）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。

50はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には細礫を僅かに含む。

51は凹線による区画がつくられようか。地文はRLの単節縄文。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には輝石を僅かに含む。

52はLRの単節斜縄文を地文にし、平行沈線・蛇行沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は

にぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には白色粒子を含む。

53～56は平行沈線を垂下する。沈線間は磨り消される。53の地文はL R Lの複節斜縄文。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。54の地文はR Lの単節斜縄文。色調はにぶい赤褐色（5YR5/1）で、胎土には輝石を僅かに含む。55はL Rの単節斜縄文を地文にする。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。56はL Rの単節斜縄文を地文にする。色調はにぶい橙色（5YR6/4）で、胎土は精選されて細かい。

57は条線が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には輝石を僅かに含む。

373号土坑（第37図）

〔位置〕 A-3 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。（平面形）不明。（規模）不明×100cm。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は僅かにくぼんでいる。（長軸方向）N-33° -W。

〔覆土〕 ローム粒子を含む硬質の黒褐色土（7.5YR3/3）の単一土層である。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

374号土坑（第37図）

〔位置〕 B-3 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。（平面形）不整円形。（規模）120×120cm・深さ20cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-61° -W。

〔覆土〕 焼土粒子・炭化物粒子を多く含む硬質の黒褐色土（7.5YR3/2）の単一土層である。

〔遺物〕 土器片16点。

〔時期〕 加曾利E I式期。

374号土坑出土遺物（第39図58～63）

58は波状沈線文が施される。色調は褐灰色（5YR5/1）で、胎土には雲母片を多く含む。

59は隆帯に沿って連続刺突文が施される。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫を含む。

60は口縁部に2本組隆帯で区画と渦巻文がつくられる。区画内はL Rの単節斜縄文。渦巻文の中心には円孔が穿たれる。口唇部上には口縁部の渦巻文から盛り上がった渦巻状の突起がつく。突起の側面にも円孔が穿たれる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には輝石が僅かに含まれる。

61は条線を地文にする。隆帯による渦巻文がつくられようか。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には雲母片を僅かに含む。

62はR Lの単節斜縄文を地文にし、横位に3条の沈線が施される。図下端にも弧線がみられる。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には白色粒子が多く含まれる。

63は条線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土は精選されて細かい。

375号土坑（第37図）

〔位置〕 B-3 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。坑底のピットは土坑に伴うのか確認できなかった。（平面形）不整

円形。(規模) 100×100cm・深さ20cm前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。(長軸方向) N-64° - E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。粘性あり。
- 2層 褐色土 (7.5YR4/3)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 明褐色土 (7.5YR5/6)。ロームブロック。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 5層 黄褐色土 (10YR5/6)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

〔遺物〕 土器片33点。

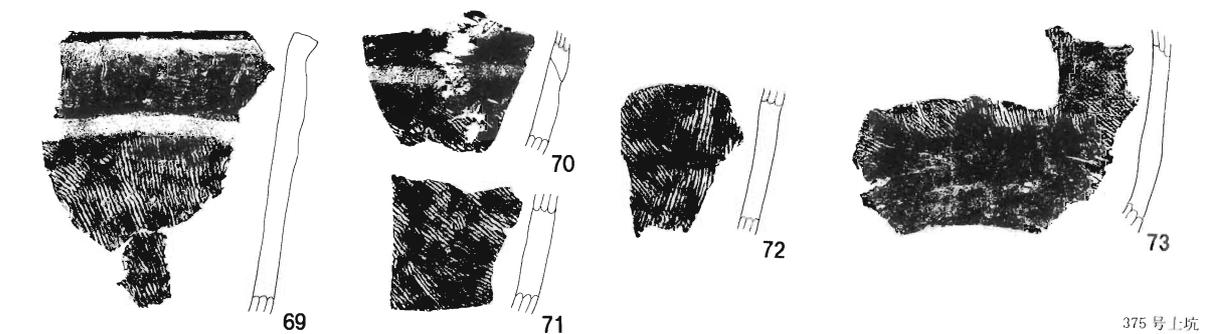
〔時期〕 勝坂式期。

375号土坑出土遺物 (第39図64~68、第40図69~73)

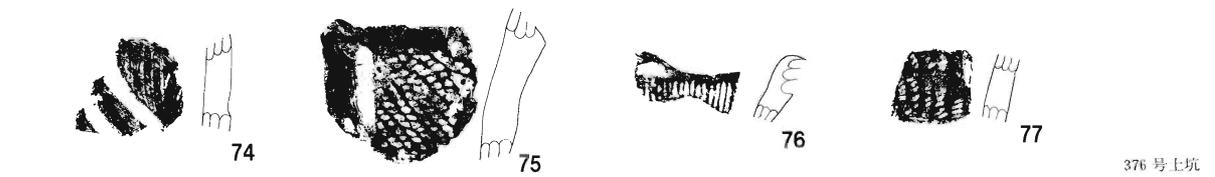
64は円筒形の土器になろうか。沈線による曲線的なモチーフが描かれ、沈線間に多段の三角押文、草鞋状・帯状に施文した連続刺突文、放射状の刻みが加えられた瘤状の貼付文が配される。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) で、胎土には細礫が僅かに含まれる。

65は口縁部に連続爪形文が付加された隆帯が横位に貼付される。色調は灰褐色 (5YR5/2) で、胎土には雲母片を多く含む。

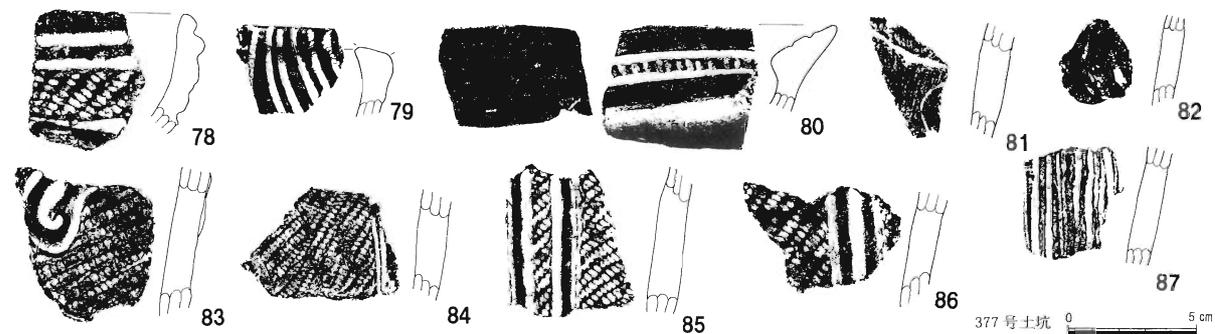
66は沈線間に連続爪形文が加えられる。外面には部分的に煤が付着する。色調は褐灰色 (7.5YR4/1)



375号土坑



376号土坑



377号土坑 0 5 cm

第40図 土坑出土遺物3 (1/3)

で、胎土には白色粒子が含まれる。

67はR Lの単節斜縄文を地文とする。刻みが加えられた隆帯が眼鏡状に貼付され、そこから同様の隆帯が垂下する。色調は赤灰色(2.5YR4/1)で、胎土には輝石を含む。

68は2条の沈線が横走する。上段には沈線と多段の三角押文が施される。下段は無文になるのか。色調は灰褐色(5YR4/2)で、胎土には細礫を含む。

69~73は同一個体で、円筒形を呈する深鉢形土器。口唇部は摘みだされたように外側にはみだす。凹線を巡らせて区画とし、口縁部は無文になる。胴部はRの細かい撚糸文を縦位・斜位・格子状に施す。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)で、胎土には細礫と僅かな雲母片を含む。

376号土坑 (第37図)

〔位置〕 B-3 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。(平面形) 円形。(規模) 90×90cm・深さ30cm前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。(長軸方向) N-62° - E。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む硬質の灰黄褐色土(10YR4/2)の単一土層である。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 土器片7点。

〔時期〕 加曾利E II式期。

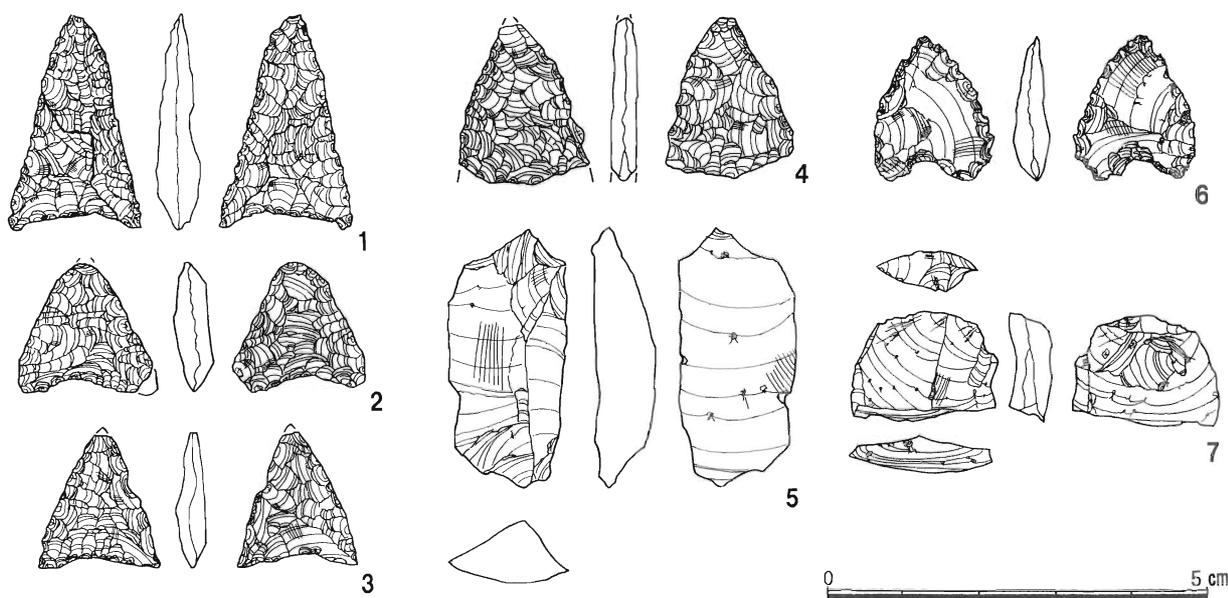
376号土坑出土遺物 (第40図74~77)

74は条線を地文とし、隆帯が貼付される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)で、胎土には雲母片を僅かに含む。

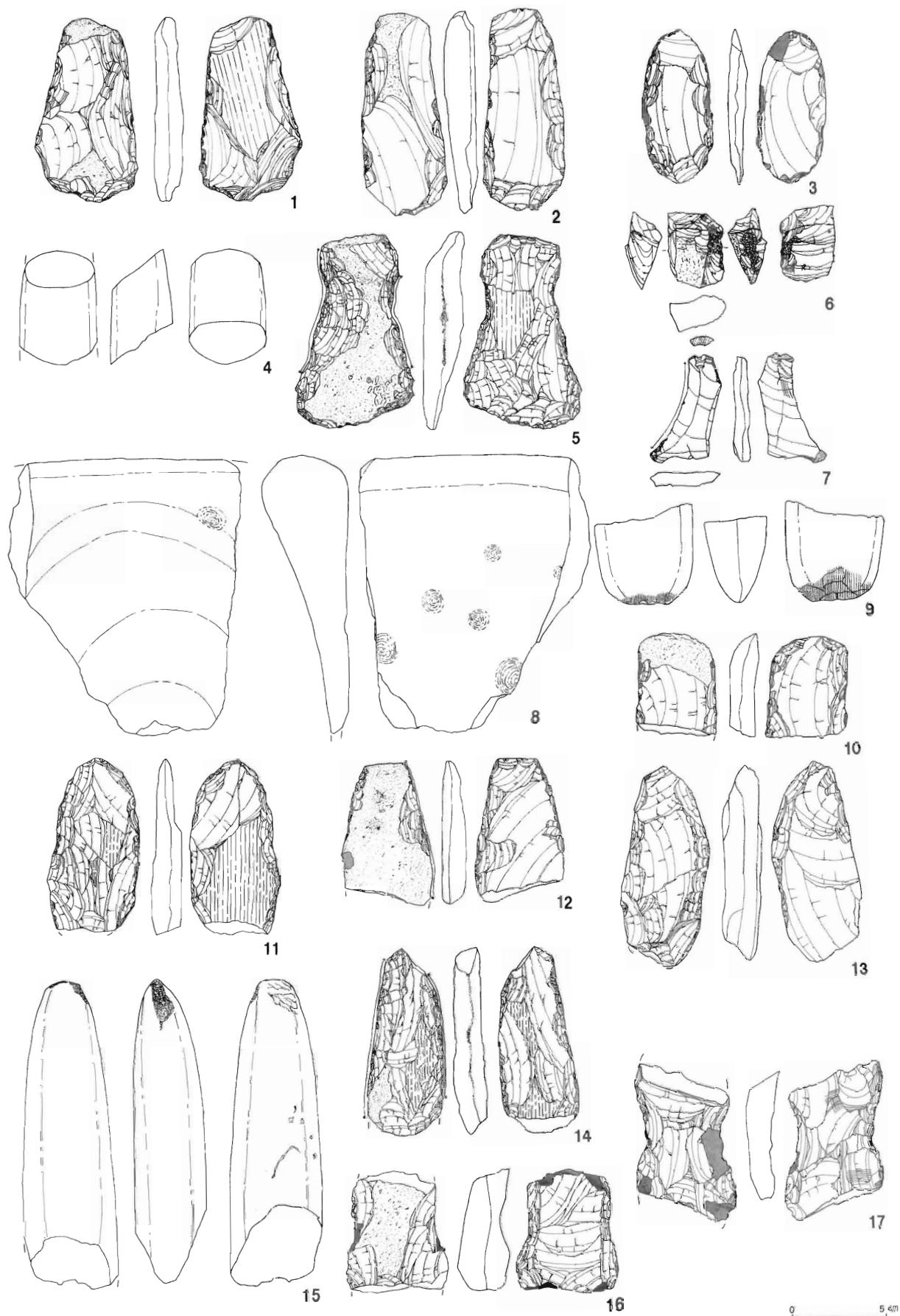
75はL Rの単節斜縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)で、胎土には輝石が僅かに含まれる。

76は横走する沈線下に条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)で、胎土には黒色粒子を含む。

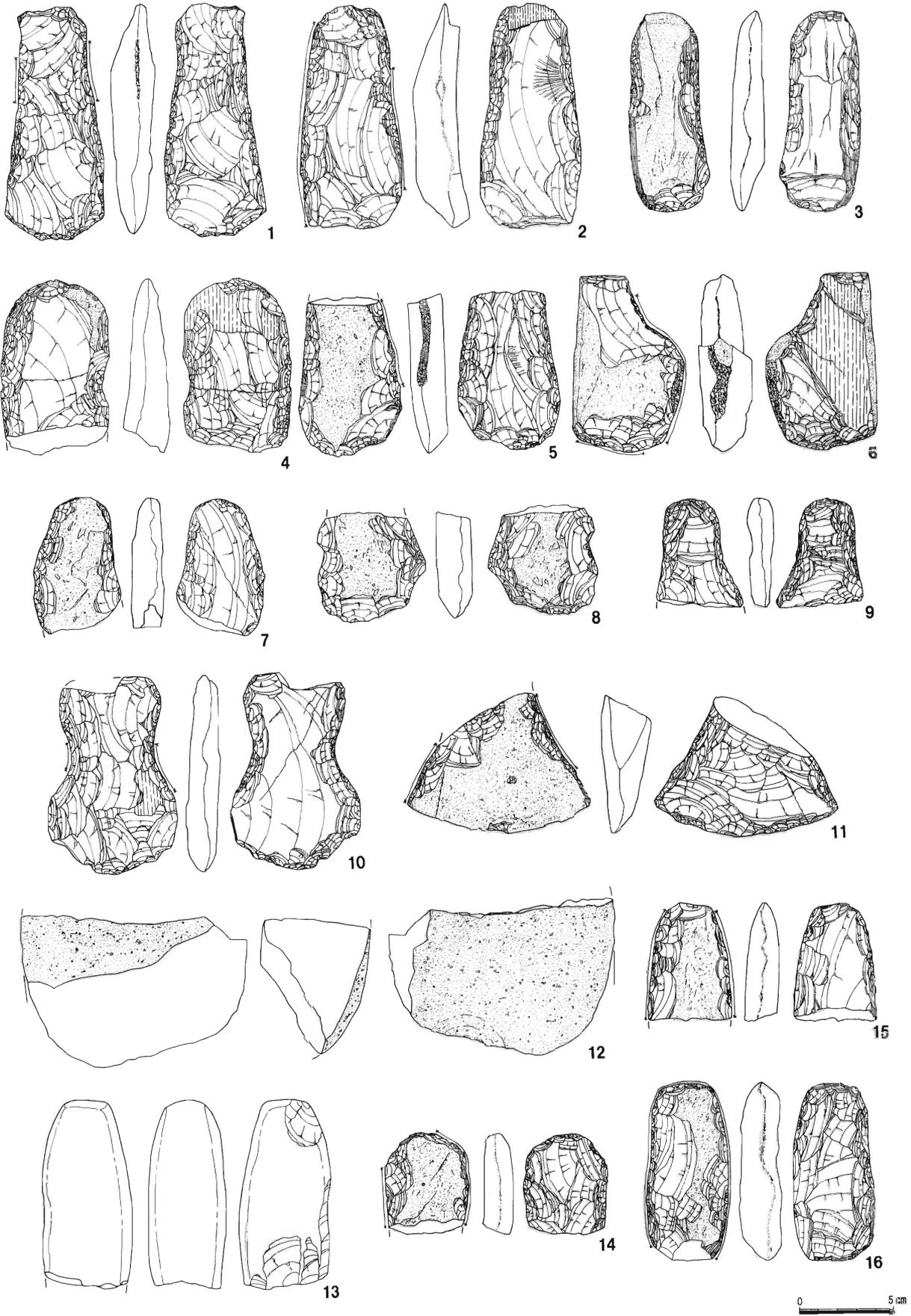
77はR Lの単節縄文が施される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)で、胎土には軽石と思われる灰黄色粒



第41図 住居跡・土坑出土遺物1 (1/1)



第42图 住居跡・土坑出土遺物2 (1/3)



第43图 住居跡・土坑出土遺物3 (1/3)

子を含む。

377号土坑（第37図）

〔位置〕 B-4 G。

〔構造〕 耕作による攪乱が著しい。72 J・255 Yを切る。（平面形）円形。（規模）120×110cm・深さ30cm前後を測る。壁は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。（長軸方向）N-70° -E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。粘性あり。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

4層 暗褐色土（7.5YR3/4）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 土器片37点。

〔時期〕 加曾利E II式期。

377号土坑出土遺物（第40図78～87）

78は隆帯による区画内にRLの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には輝石を多く含む。

79は沈線による重弧文が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には輝石が僅かに含まれる。

80は浅鉢形土器になろうか。口縁部内面には2条の沈線が巡る。沈線間には連続刺突文が加えられる。部分的に赤色顔料が付着する。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土には輝石を僅かに含む。

81は条線を地文にし、弧線が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には輝石を含む。

82はLRの単節縄文を地文にし、沈線により文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。

83はLRの単節斜縄文を地文にする。貼付された2本組隆帯は渦巻文の端部であろうか。色調は褐灰色（5YR5/1）で、胎土には輝石を含む。

84～86はRLの単節斜縄文を地文にし、2本組隆帯が垂下する。84の色調は褐灰色（7.5YR5/1）で、胎土には輝石を含む。85の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には輝石を僅かに含む。86の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石を多く含む。

87はLの撚糸文が施される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）で、胎土には輝石を僅かに含む。

（2）弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の遺構と遺物

131号住居跡（第44図）

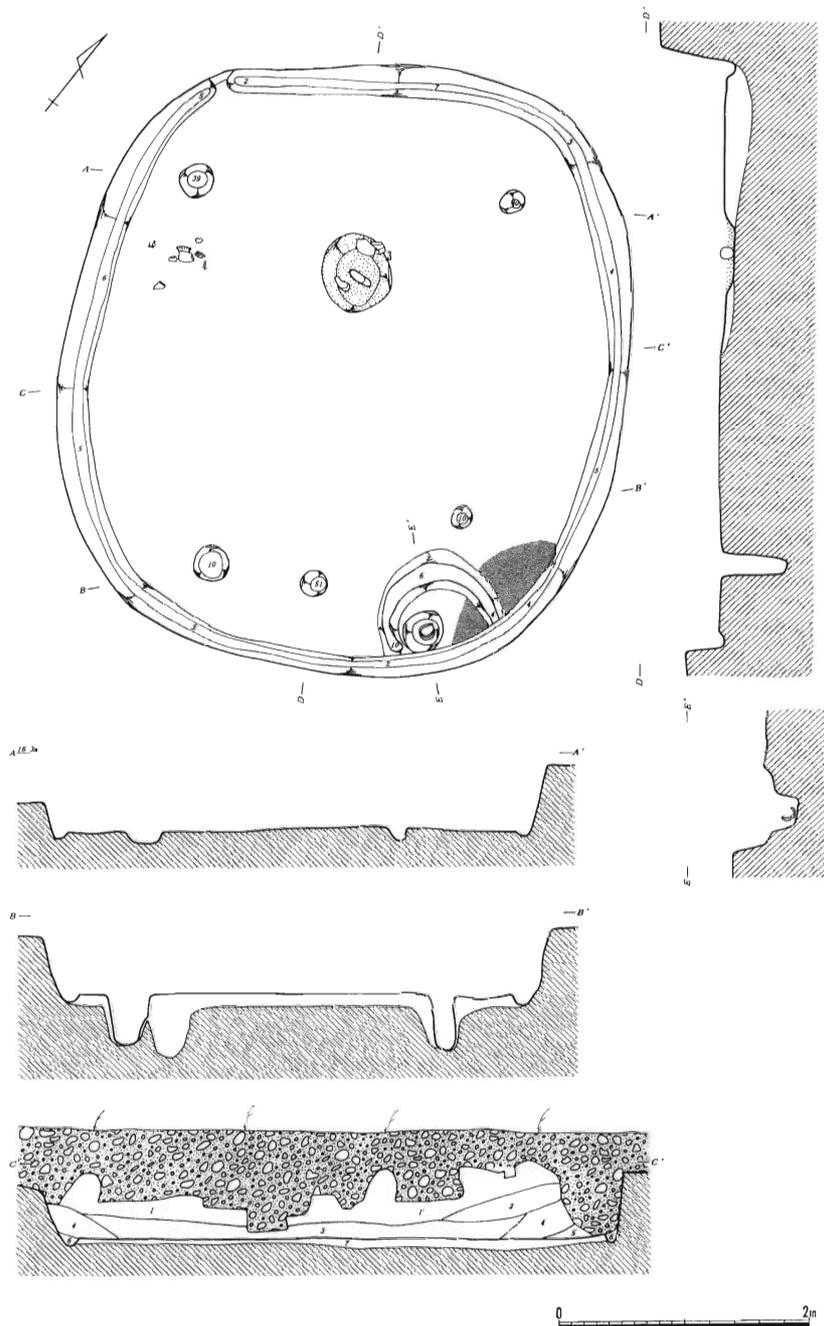
〔位置〕 A-3 G。

〔住居構造〕 平成8年度に北側調査済み。73 Jを切る。（平面形）楕円形。（規模）490×450cm。（主軸方向）N-38° -W。（壁高）26～52cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅15～30cm・下幅5～10cm・深さ2～7cmを測る。北西コーナーで途切れるがほぼ全周する。（床面）炉の周辺に貼床が施されている。全体に良く硬化している。（炉）住居中央から北に偏って位置する。65×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。（柱穴）5本検出される。主柱穴は各コーナー部の4本であろう。北側の

2本は斜めの掘り込みをもつ。南壁際の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南東コーナー壁下に位置する。40×30cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。貯蔵穴上部から小型の壺が出土した。貯蔵穴の北側には幅18~30cm・高さ1~3cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕北東コーナーに径40cm・厚さ2cm前後の赤褐色土が堆積する。

- 1層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。



第44図 131号住居跡 (1/60)

6層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

7層 黒褐色土。ロームブロックを多く含む。貼床。

〔遺物〕貯蔵穴や北西コーナー付近から出土した。

〔時期〕弥生時代後期後半。

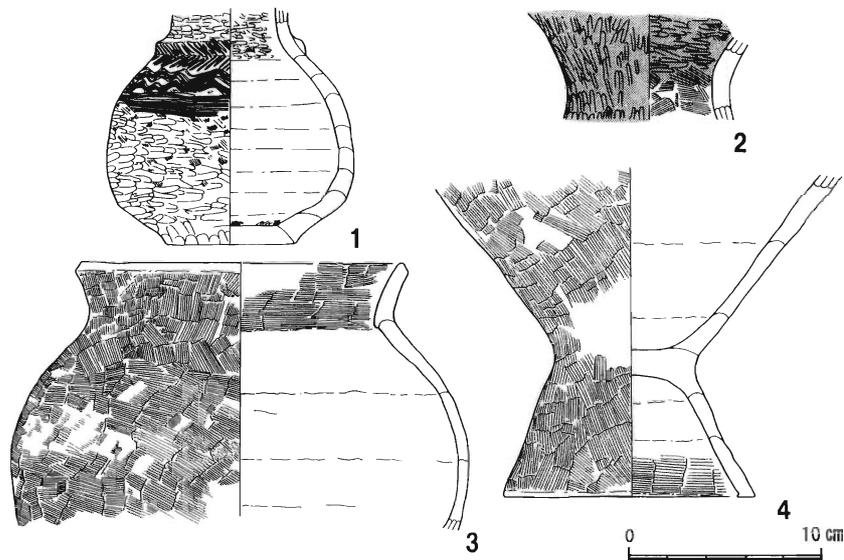
131号住居跡出土遺物（第45・46図）

壺形土器（1・2・5～11）

1は口縁部と体部1/2程度を欠損する。底径7cm、現存器高13cmと小型の土器である。頸部は直立気味に立ち上がり、頸部と体部の境目には凸帯が巡る。凸帯の上部は削り出しで、段を作りだしている。体部はイチジク形を呈する。底部は平底だが、粗く削られるため平坦ではない。外面の調整は、頸部は横位のヘラミガキにより直立部を作り出している。頸部凸帯上の下段から、先端の鋭いヘラ状の施文具により斜めに連続刺突を行い所謂有段羽状文を施す。その下には8本ないし9本の浅い櫛描波状文が施され、最下段には同じ施文具による横線文が施される。文様帯は全体に非常に稚拙である。体部は横方向にヘラミガキが施されるが、ハケメ痕が残る。内面は頸部までは横方向のヘラミガキが施され、以下ヘラナデされる。底部内面にはハケメ痕が残る。内面の調整が途中で明らかに変化しているのは口縁部から頸部までと、頸部から体部下半までと、体部下位以下の三段階に分けて、それぞれの間である程度乾燥させてから作られているからと推測される。以上のような器形、文様、整形の特徴をもつこの土器には、菊川式土器の要素が認められる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には軽石と思われる白色粒子、橙色粒子を多く含むが、細かく堅緻である。貯蔵穴からの出土である。

2は頸部1/2のみ残存する。頸部でくびれて口縁部は外反する器形と推測されるが、全体の器形は不明である。外面の調整はハケメ調整後縦方向にヘラミガキされる。内面は口縁部をハケメ調整後、ヘラナデされるが、横位のハケメ痕が残る。内外面ともに口縁部は赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土には1～10mmの小礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子を含むがきめ細かい。

5は複合口縁部破片。口縁部外面には、撚りの異なる単節縄文を用いた羽状縄文が施され、下段にはハケ状工具による刻みが施される。口唇端部にもRLの単節斜縄文がみられる。器面はヘラミガキされ



第45図 131号住居跡出土遺物1（1/4）

るが、口縁部直下に僅かなハケメ痕を残す。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、縄文帯以外は赤彩が施される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子、黒チャートを含む。外面には黒斑が残る。

6は複合口縁部破片。口縁部外面にはR Lの単節縄文が羽状に施され、棒状浮文が付加される。口唇端部にもR Lの単節縄文が施され、僅かに赤彩痕がみられる。器面はヘラミガキされる。頸部内面には円形の赤彩痕がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土は細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含むがきめ細かく精製される。

7は鉢形土器の可能性もある口頸部破片。内外面ともにヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子・赤褐色粒子を含む。

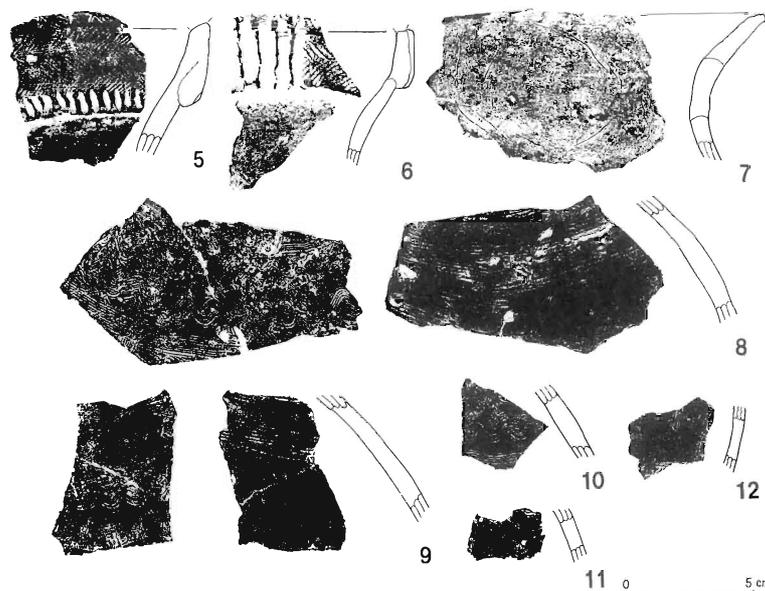
8～11は同一個体で、いずれも肩部破片である。櫛描きによる波状文と横線文が施されている。8・9は、10本櫛歯による横線文1段と、波状文が2段、下段には横線文が1段施されている。10は、2段の波状文と下段に1段の横線文が確認される。11は、半円文であろうか。外面はハケメ調整後ヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。内面はヘラナデされるが、僅かにハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、外面には赤彩が施される。胎土には細礫、砂粒、赤褐色粒子、軽石と思われる白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。

2・5～11はいずれも覆土中からの出土である。

甕形土器（3・4・12）

3は口縁部と甕部上半1/3程度が遺存する。推定口径17cmを測る。球状を呈すると推測される体部から頸部でくびれて、口縁部は僅かに外反する器形である。口唇部はヨコナデされる。外面はヘラナデされるが、口頸部縦位、体部斜位のハケメ痕が残る。内面はヘラナデされるが、口縁部に横位のハケメ痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には砂粒、小礫、白色粒子、赤褐色粒子を含む。炉上から出土した。

4は甕部下半以下が遺存する。裾径12～13cmを測る。脚台部は裾部にかけて直線的に開く器形である。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、脚部内面には横位のハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。住居跡北西コーナー付近床面上から



第46図 131号住居跡出土遺物2（1/3）

の出土である。

12は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色(10YR4/1)を呈し、外面には煤が付着する。胎土には細礫、砂粒を含む。覆土中より出土。

132号住居跡 (第47図)

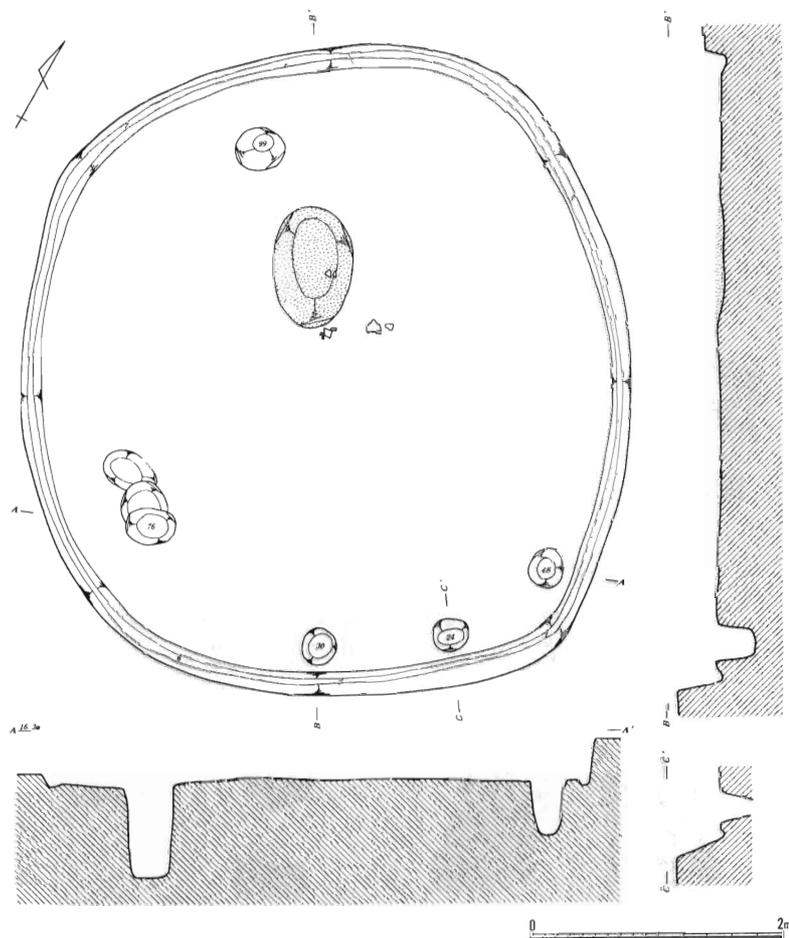
〔位置〕 A-2 G。

〔住居構造〕 北側の半分は平成8年度に調査済み。28 Jを切る。(平面形) 楕円形。(規模) 520×435cm。(主軸方向) N-38° -W。(壁高) 29~36cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 上幅13~20cm・下幅5~10cm・深さ2~8cmを測り、全周する。(床面) 南側の一部と炉の周辺が良く硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。100×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmを測る。(柱穴) 南側コーナーに2本検出する。中央南壁下に位置する小ピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東コーナー壁下に位置する。径25cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。

〔覆土〕 上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土、下層はローム粒子・小ブロックを多く含む暗褐色土であるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕 南東コーナーの床面上に土器小破片が分布。覆土中から土器片が多く出土した。

〔時期〕 弥生時代後期後半



第47図 132号住居跡 (1/60)

132号住居跡出土遺物（第48図）

壺形土器（1・3・8）

1は複合口縁を有する壺形土器の口頸部破片。内外面ともにヘラミガキされるが、複合口縁部外面は横方向、体部外面は縦方向のハケメ痕を残す。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子、輝石を含むがきめ細かく堅緻である。

3は口頸部破片。口唇部ヨコナデ。内外面ともにヘラミガキされるが、外面縦位、内面横位のハケメ痕が消しきれずに残っているのが観察される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫、砂粒を含むがきめ細かく堅緻である。

8は底部破片。外面底部はヘラナデされる。外面体部はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラミガキを施す。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。外面底部には黒斑がみられる。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土である。

甕形土器（2・4～7）

2は口頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部にはやや左方向から刺突された刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるが、体部外面に僅かにハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫、砂粒を含むが、精製されきめ細かく堅緻である。

4～6は同一個体か。いずれも外面はヘラナデされるが、粗いハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫、砂粒、赤褐色粒子、白色粒子を含む。

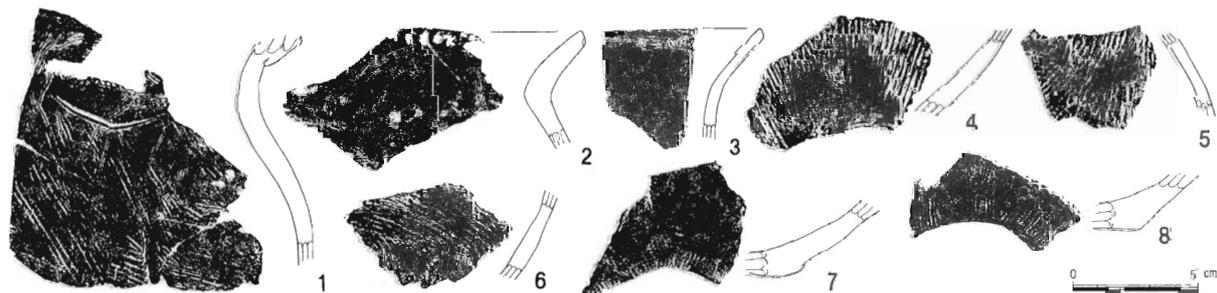
7は底部破片。外面底部はヘラナデされる。外面体部はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は粗くヘラミガキが施される。色調は暗赤灰色（10YR4/1）を呈し、外面には煤が付着する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土である。

252号住居跡（第49図）

〔位置〕 B-3 G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。73 Jを切る。（平面形）不整形。〔規模〕 440×460 cm。（主軸方向） N-68° - E。（壁高） 4～27 cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）なし。（床面）貯蔵穴と入口の間、炉の東側が部分的に硬化している。（炉）住居中央から東に偏って位置する。不明×60 cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4 cmを測る。炉の西側に土器片と礫を検出する。（柱穴）5本検出された。支柱穴は各コーナー部の4本で西壁際の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下に位置する。50×40 cmの楕円形を呈し、深さ27 cmを測る。貯蔵穴の東側に幅20 cm前後・高さ1～3 cmの凸堤が構築さ



第48図 132号住居跡出土遺物（1/3）

れている。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。締まりあり。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。炭化物材片を部分的に含む。締まりあり。

〔遺物〕 床面上と炉の周辺に多く出土した。

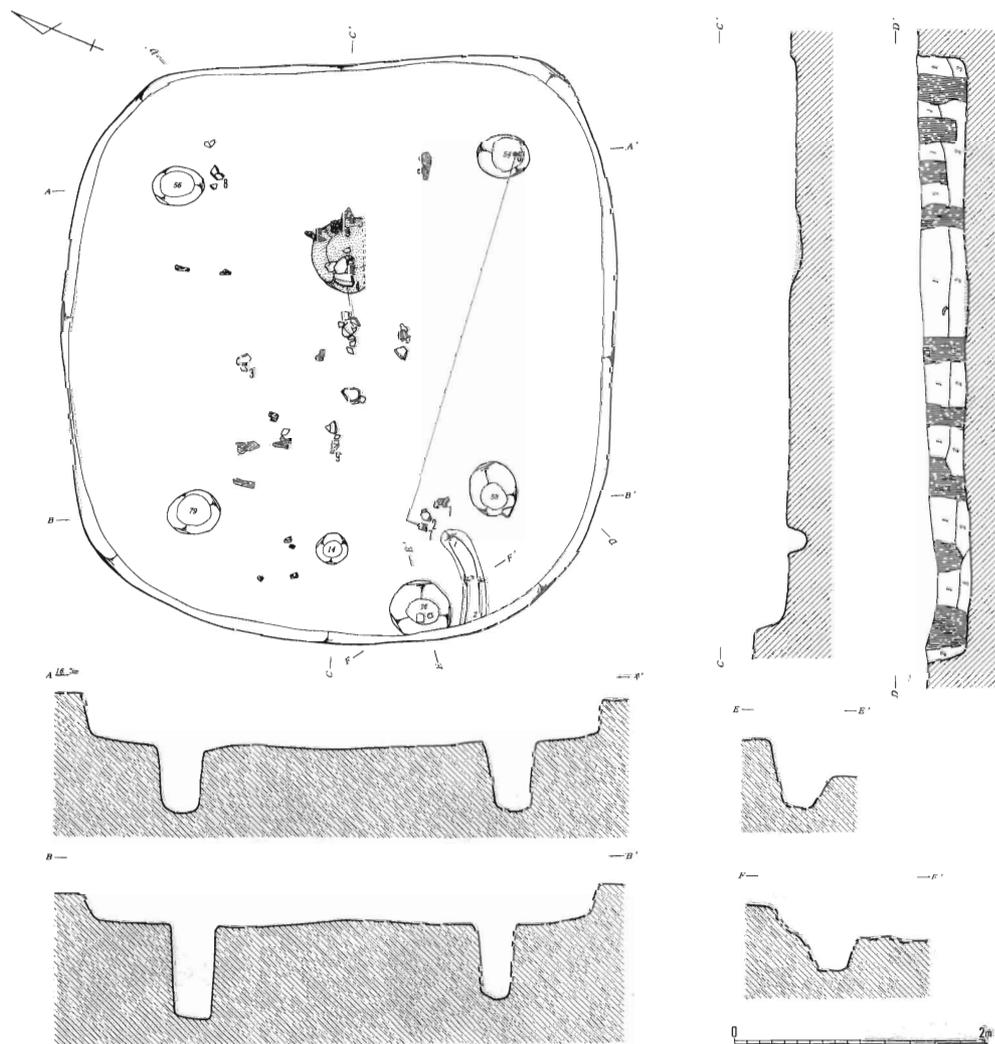
〔時期〕 弥生時代後期後半。

〔所見〕 床面上に炭化材があり、焼失住居の可能性が大きい。

252号住居跡出土遺物 (第50・51図)

壺形土器 (1・3・6・7・9)

1は複合口縁をもつ。推定口径9cm、底径5.5cm、器高10.7cmを測る小型の土器である。全体の1/3程度遺存する。体部下半に最大径をもち、玉葱状を呈する。頸部でくびれて、複合口縁部は大きく外反する。頸部には円形浮文が2個確認できる。肩部には無節の縄文が施されるが、僅かに確認できるのみである。外面はハケメ調整後ヘラミガキされるが、複合口縁の下端に僅かにハケメ痕が残る。口唇部内外面ヨコナデ、複合口縁部外面はヘラナデされる。内面口縁部は、ハケメ調整後横方向のヘラミガキが



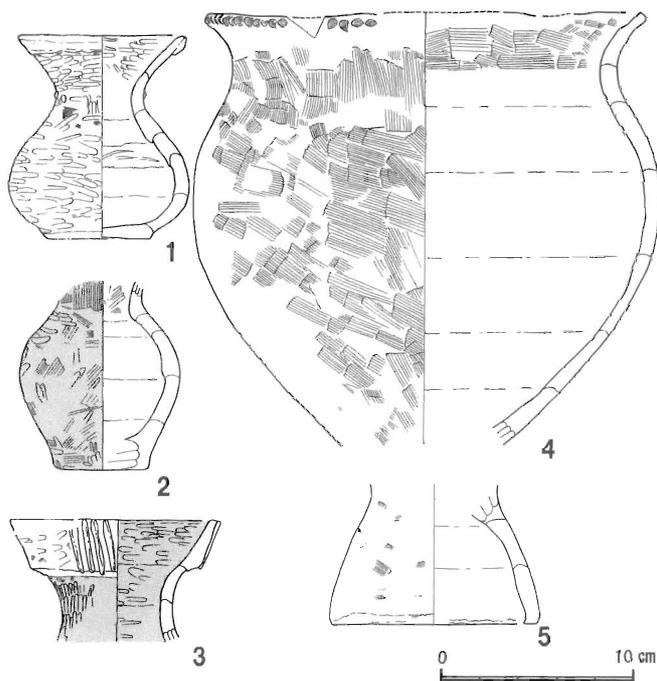
第49図 252号住居跡 (1/60)

施される。頸部以下はヘラナデされるが工具痕が残る。輪積痕も明瞭である。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、体部下半と底面には黒斑がみられる。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、黒い礫のようなものを多く含む。貯蔵穴付近、床面上からの出土である。

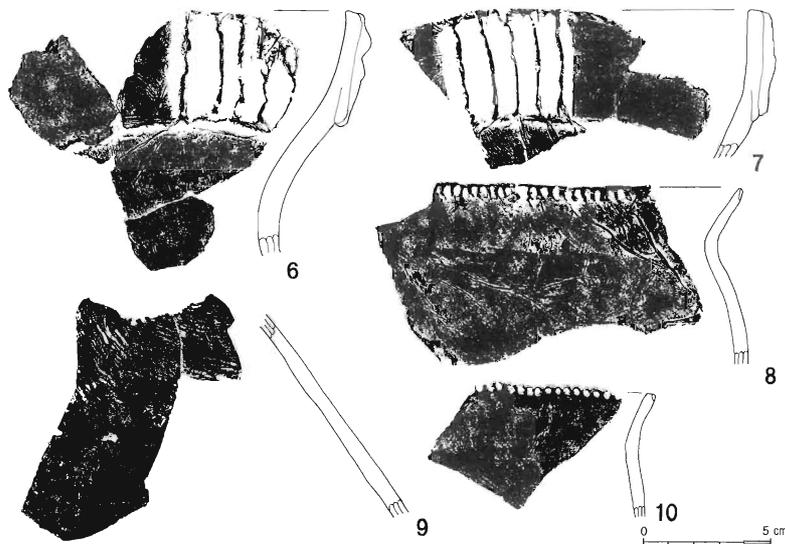
2は2/3程度遺存する。底径4.8cmと小型の土器である。口縁部は欠損するが頸部でくびれて、口縁部は外反する器形と思われる。最大径を体部中位にもち、やや長胴気味の器形である。外面はヘラミガキされるが、口縁部・体部下半にはハケメ痕が残る。口縁部内面はハケメ調整後ヘラミガキされるが、ハケメ痕が残る。体部内面は横方向にヘラナデされるが、輪積痕が明瞭に残っている。平底の底部はナデられている。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、外面は赤彩される。胎土には細礫、白色粒子、黄橙色粒子、砂粒を含むがきめ細かい。貯蔵穴付近、床面上からの出土である。

3は複合口縁をもつ。推定口径約11cmと小型で口縁部1/3程度遺存する。全体の器形は不明であるが、頸部は直立気味に立ち上がり、複合口縁部へかけてゆるやかに外反し、口縁部は僅かに内湾気味に開く器形である。口縁部外面には4本一単位とする棒状浮文が貼付される。外面の調整は、口縁部はハケメ調整後横方向に、頸部は縦方向にヘラミガキされる。内面は横方向にヘラミガキされる。口唇部はヨコナデされる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、橙色粒子を含むが細かい。住居跡中央付近、床面上からの出土である。

6・7は複合口縁部破片で同一個体か。口縁部外面には5本一単位と推測される、棒状浮文が貼付される。外面はハケメ調整後ヘラミガキされるが、消しきれないハケメ痕が残る。内面



第50図 252号住居跡出土遺物1(1/4)



第51図 252号住居跡出土遺物2(1/3)

はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。内外面ともに赤彩される。6はP4からの出土。7は貯蔵穴付近床面上からの出土である。

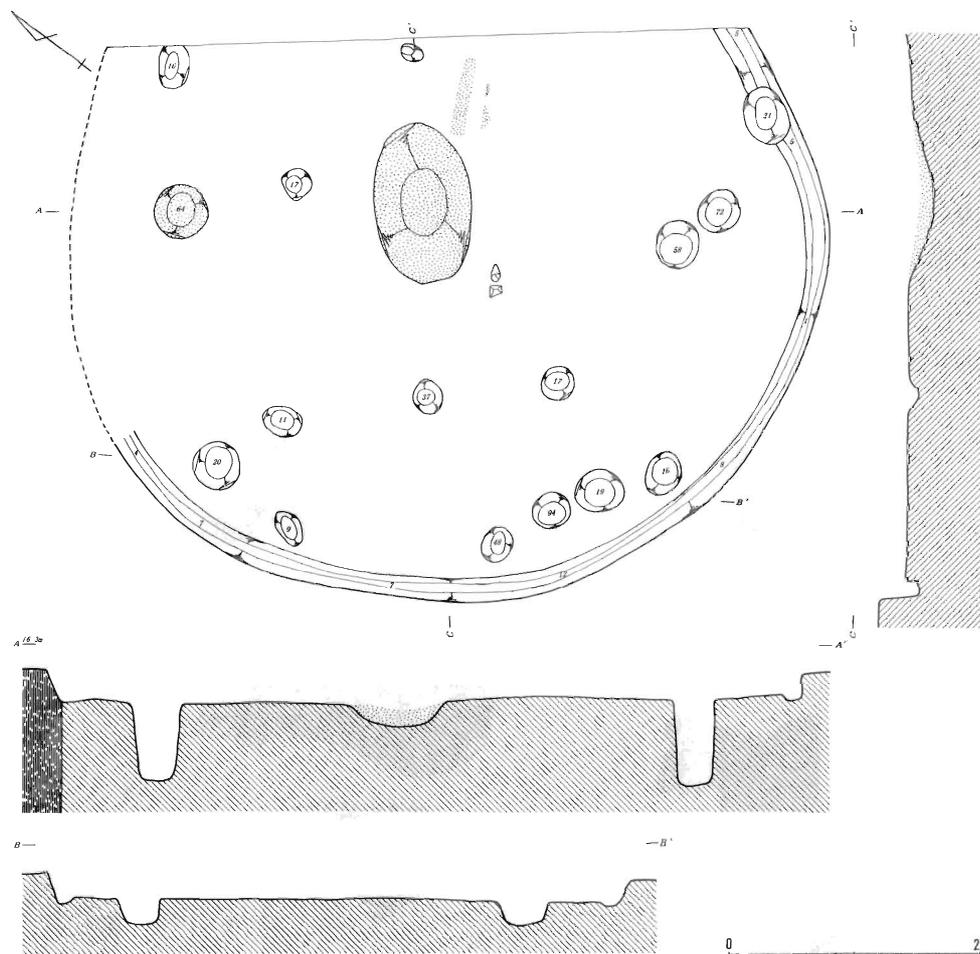
9は肩部破片。外面には反撚りRの斜縄文が施される。以下横方向にヘラミガキが施される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、外面には赤彩痕がみられる。胎土には細礫、砂粒、赤褐色粒子を含む。住居跡中央付近、床面上からの出土である。

甕形土器（4・5・8・10）

4は台付甕形土器の甕部1/3程度残存する。推定口径約23cmを測る。口唇部にはハケ状工具で刺突された刻みが巡る。最大径を体部上半にもち、脚部へとすぼまる器形である。頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。外面の調整は、頸部・体部ともにヘラナデされるが頸部縦位、体部斜位のハケメ痕が残る。内面はヘラナデされるが、口縁部に横方向のハケメ痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、外面体部中位より上には、炭化物が付着する。胎土には細礫、砂粒、橙色粒子を含む。炉の上とその周囲の床面上から出土した。

5は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾径推定約11cmを測る。脚裾部へかけて僅かに内湾しながら開く器形である。脚端部外面は面取りされるようにケズられている様子が観察できる。内外面ともにヘラナデされるが、僅かにハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫、砂粒を多く含み粗い。覆土中からの出土である。

8・10は口頸部破片。



第52図 253号住居跡（1/60）

8は口唇部にやや左方向から刺突された刻みが巡る。内外面ともにヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には、細礫、砂粒を含む。住居北寄りのピット脇から出土した。

10は口唇部に先端の丸い棒状工具で刺突された刻みが巡る。外面はヘラナデされるが体部にハケメ痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、外面には煤の付着がみられる。胎土には細礫、砂粒を含む。覆土中からの出土。

253号住居跡(第52図)

〔位置〕C-1G。

〔住居構造〕東側調査区外。耕作による破壊が著しい。(平面形)楕円形。(規模)不明×590cm。(主軸方向)N-31°-E。(壁高)21~26cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)上幅12~25cm・下幅4~10cm・深さ5~12cmを測る。攪乱により一部破壊されているが、全周すると思われる。(床面)部分的に硬化しているが全体に軟弱。(炉)住居中央から北に偏って位置する。140×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ18cmを測る。(柱穴)支柱穴を明らかにすることはできなかった。

〔覆土〕ローム粒子・焼土粒子を僅かに含むやや硬質の黒色土(7.5YR1.7/1)であるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土。

〔時期〕弥生時代後期後半~古墳時代前期前半。

253号住居跡出土遺物(第53図)

壺形土器(1・2)

1は肩部破片。Rの無節縄文の末端を結節した原体を横に回転し、さらに別のLの無節縄文を用い羽状にしている。内面はヘラナデされたと推測されるが摩耗が激しく確認が困難である。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

2は肩部破片。RLの単節縄文を3段、羽状に施している。縄文帯以外はヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈する。外面は縄文帯を除き赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含むが、精製されておりきめ細かく堅緻である。

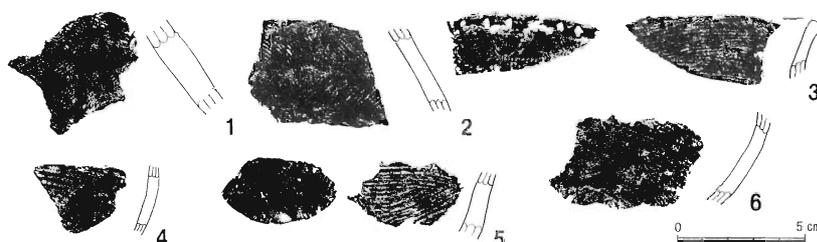
いずれも覆土中からの出土である。

甕形土器(3~6)

3は口縁部破片。口唇部には浅く刺突された刻みが巡る。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケメ痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。

4~6は体部破片。

4は外面ヘラナデされるが、ハケメ痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は赤灰色(2.5YR4/1)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。



第53図 253号住居跡出土遺物(1/3)

5は内外面ともにヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケメ痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。

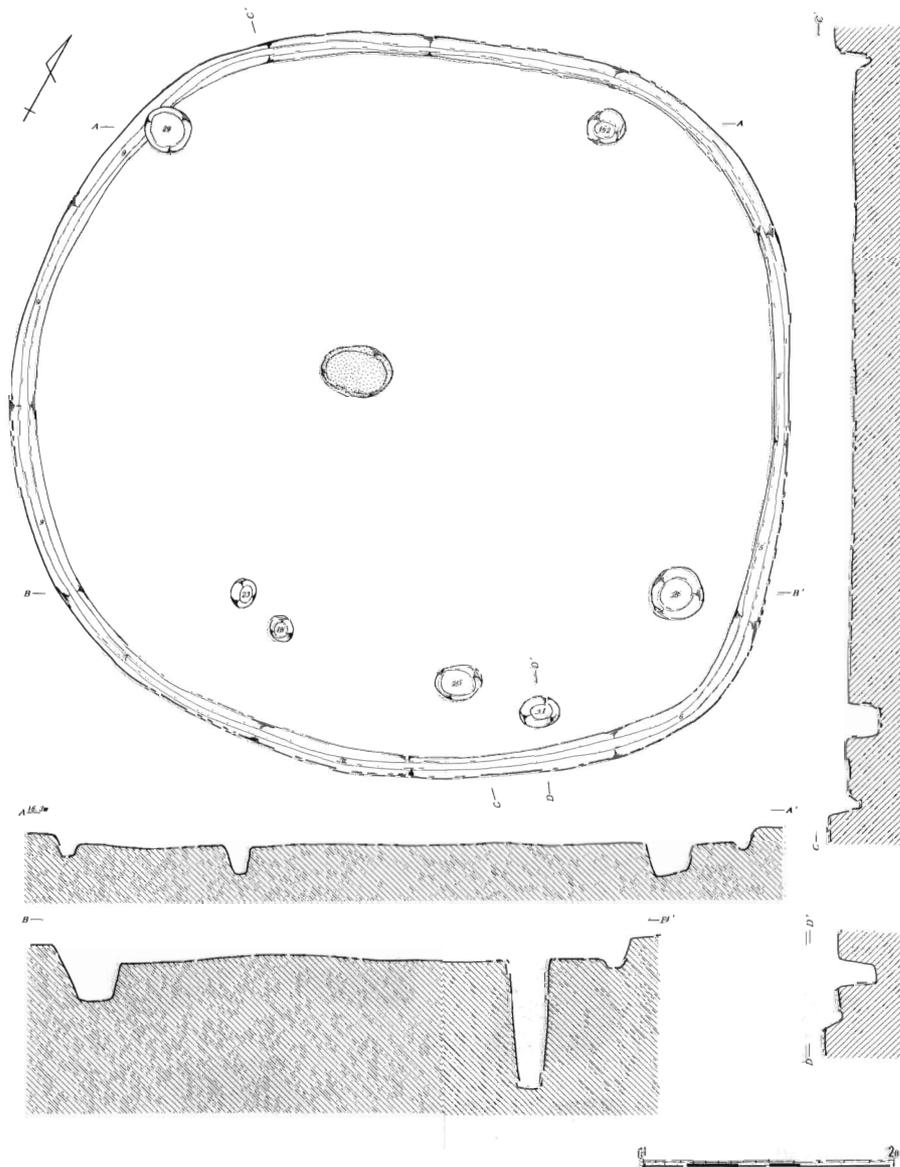
6は内外面ともにヘラナデされるが外面には横位の粗いハケメ痕が残る。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土。

254号住居跡(第54図)

〔位置〕 B-2 G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。361・367Dを切る。(平面形) 不整楕円形。(規模) 610×600cm。(主軸方向) N-25°-W。(壁高) 6~25cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(壁溝) 上幅14~24cm・下幅5~7cm・深さ2~13cmを測る。全周する。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 住居中央から西側に偏って位置する。55×40cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 北コーナーを除き3



第54図 254号住居跡(1/60)



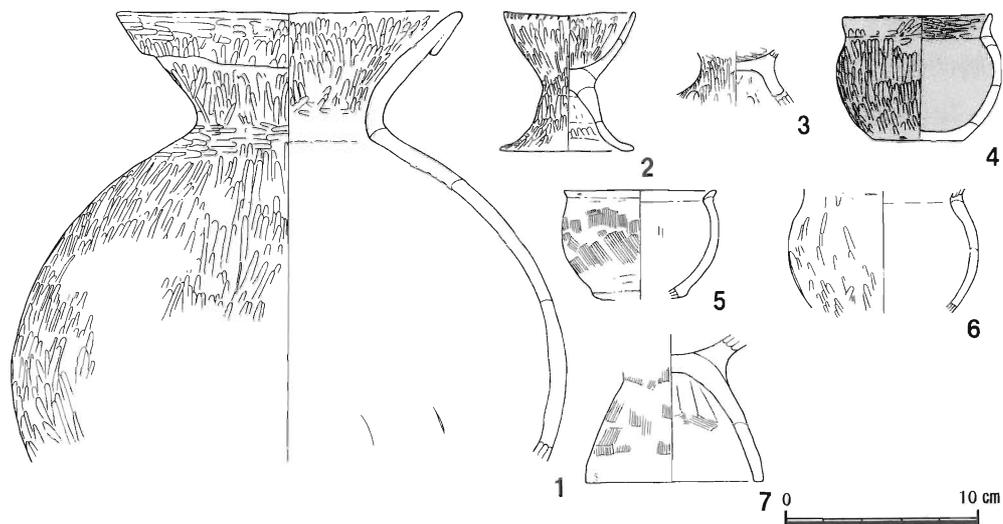
第55图 255·257号住居跡(1/60)

本検出する。中央南壁下に位置するピットは、入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南壁下、東に偏って位置する。34×25cmの楕円形を呈し、深さ31cmを測る。

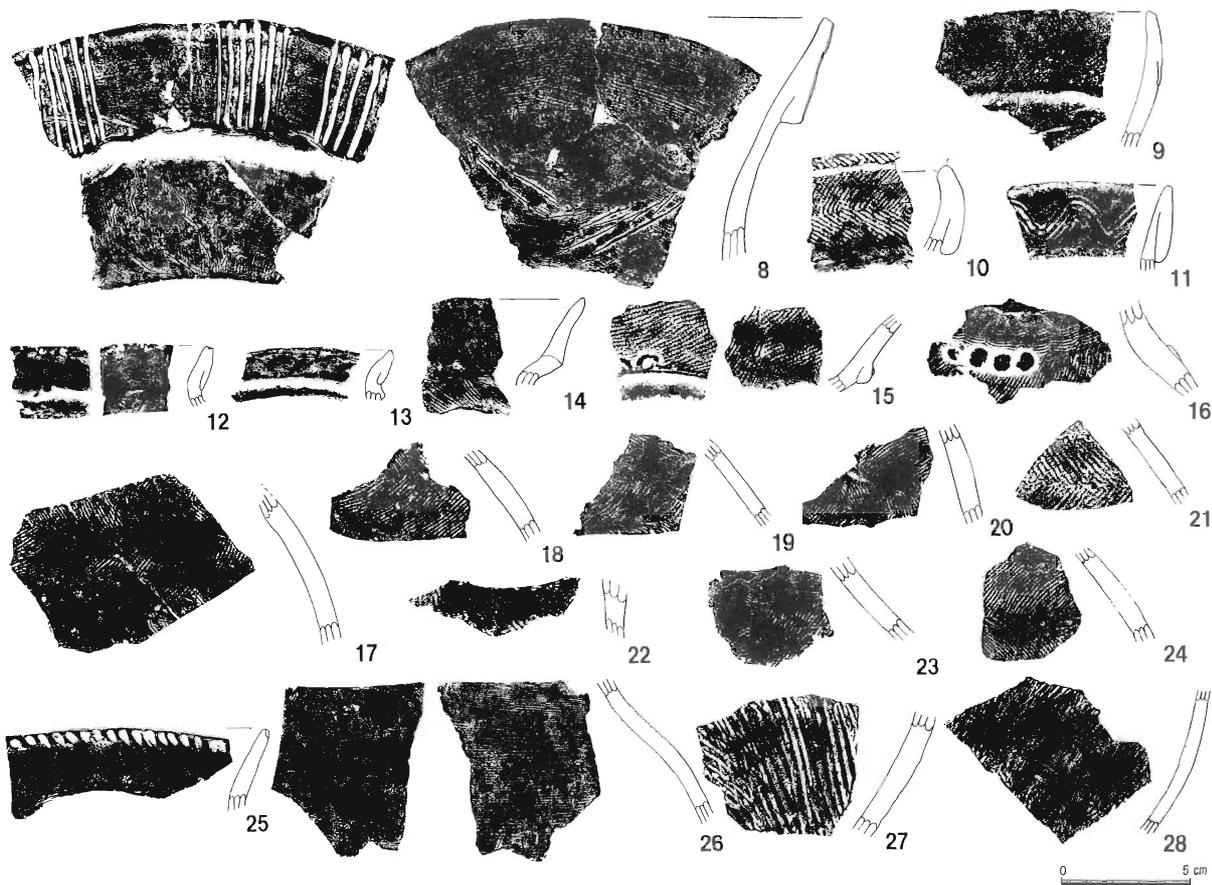
〔覆土〕ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土 (5YR2/2) であるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕覆土中から僅かに土器片が出土。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕弥生時代後期後半～古墳時代前期前半。



第56図 255号住居跡出土遺物1 (1/4)



第57図 255号住居跡出土遺物2 (1/3)

255号住居跡（第55図）

〔位置〕 B-4 G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。西側調査区外。257 Yと重複するが、新旧関係は不明。（平面形）不明。（規模）不明×840cm。（主軸方向）N-52°-W。（壁高）40~62cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）なし。（床面）全体に軟弱。（炉）住居中央から北に偏って位置する。65×50cmの楕円形を呈する地床炉で深さ20cmを測る。（柱穴）南東コーナーと北東コーナーに2本検出する。（貯蔵穴）南壁下、東に偏って位置する。120×110cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。

〔覆土〕 上層はローム粒子と焼土粒子、炭化物粒子を含むやや硬質の黒褐色土（10YR3/2）、中層はローム粒子・炭化物粒子を含み、焼土粒子を多く含む硬質の黒褐色土（2.5Y3/1）、下層はローム粒子を多く含むやや粘粒のある黒褐色土（10YR3/2）であるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕 貯蔵穴を中心に出土したが、多くはなかった。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化材片が多く、焼失住居の可能性が大きい。大型住居である。

255号住居跡出土遺物（第56・57図）

壺形土器（1・8~24）

1は複合口縁を有する土器で、1/3程度遺存する。口径18cmを測る。体部中位に最大径をもつと推定される球状の体部から、頸部で強く屈曲し、複合口縁部は大きく外反する器形である。口唇部内外面はヨコナデされる。口縁部と頸部の外面は、横方向と縦方向にヘラミガキされる。頸部内面は縦方向にヘラミガキされる。体部外面は縦方向にヘラミガキされる。内面は横方向にヘラミガキされ、その際の工具痕が僅かにみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫、砂粒、橙色粒子を含むが細かい。貯蔵穴の覆土中から出土した。

8~12は複合口縁部破片。

8は口縁部外面に6本単位の縦位の沈線が施される。口縁部内外面はヘラミガキされるが、横位のハケメ痕が残る。頸部内外面ともに縦方向に粗くヘラミガキされるが、外面縦位、内面は斜位のハケメ痕が残る。色調は赤褐色（10R4/3）を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には細礫、砂粒、軽石と推測される白色粒子、赤褐色粒子を含む。貯蔵穴の覆土中から出土した。

9は外面にRLの単節縄文を羽状に施していると推測されるが、摩耗がはげしく確認が困難である。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、内外面ともに赤彩痕が残る。胎土には細礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中から出土した。

10は口唇端部に無節Rの斜縄文を施す。口縁部外面には上段がLR単節、下段が口唇端部と同じ原体による羽状縄文が施される。施文後上端部に棒状の工具により横方向に沈線のような線がみられるが、これが意図的に行われたものかは不明である。内面は横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、縄文帯以外赤彩されるが、文様帯の内部にも赤彩痕がみられる。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中から出土した。

11は口縁部外面に5条一単位の櫛歯状工具による波状文が施される。内面は横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（5YR7/4）を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には細礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子を多量に含む。覆土中からの出土である。

12は内外面ともにヘラミガキされるが、口縁部外面斜位、頸部外面縦位、口縁部内面横位のハケメ痕

が残る。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中から出土。

13は口縁部外面に輪積痕を残し、上から軽くナデられている。内面はヘラナデされるが横位のハケメ痕が残る。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、内面には赤彩痕がみられる。胎土には細礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中から出土した。

14・15は二重口縁を有する土器の口縁部破片である。

14は内外面ヘラナデされるが外面縦位、内面横位のハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含むが精製されきめ細かい。覆土中から出土した。

15は口縁部内外面にL R単節斜縄文が施される。以下ヘラミガキされる。口縁部下端には円形竹管文で加飾された円形浮文が2個確認できる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中からの出土。

16は頸部から肩部にかけての破片。外面には櫛描波状文が施される。肩部には無節Lの斜縄文が施され、その間に円形浮文が4個確認される。内面は横方向にヘラミガキされるが摩耗が著しい。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含む。覆土中から出土した。

17～24は肩部破片。

17はL Rの単節縄文を羽状に施しているのが3段確認される。以下ヘラミガキされる。内面はヘラナデされると思われるが、摩耗が著しく確認困難である。色調は赤褐色（10R5/4）を呈し、外面の縄文帯以外は赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含む。覆土中から出土した。

18はL Rの単節縄文を羽状に施す。縄文帯以下と内面はヘラミガキされたと思われるが、摩耗が激しく確認困難である。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、外面の縄文帯以下は赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含む。覆土中からの出土である。

19は撚りの異なる単節縄文を羽状に施している。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色（7.5YR6/2）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含むが精製されておりきめ細かい。覆土中から出土した。

20は撚りの異なる単節縄文を用いた羽状縄文が施される。内面はヘラナデされたと思われるが、摩耗が激しい。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。覆土中から出土。

21はR Lの単節縄文を羽状に施し、S字状結節文を境目に施す。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫、白色粒子を含む。覆土中から出土。

22はR Lの単節縄文が羽状に施され、上端にはZ字状結節文が確認される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫、白色粒子、赤褐色粒子を含む。覆土中から出土した。

23はL Rの単節縄文を羽状に施し、上端にはS字状結節文が施される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。外面には赤彩痕がみられる。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含む。覆土中から出土した。

24はR Lの単節縄文を羽状に施す。内面はヘラナデされると思われるが、摩耗が激しく確認が困難である。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、外面は縄文帯以外赤彩されている。胎土には細礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中から出土した。

高環形土器（2・3）

2は1/2程度遺存する。口径7cm、器高7cm、推定裾径7cmと小型の土器である。坏部はやや内湾気味に開き碗状を呈し、頸部で屈曲し脚部はゆるやかに外反しながら開く。口縁部内外面はヘラナデされ、浅く刺突された刻みが巡る。坏部内外面は縦方向にヘラミガキされる。脚部外面も縦方向にヘラミガキされる。脚部内面はヘラナデされるが工具痕が残る。脚裾部内面は僅かにヘラミガキされた跡がみられる。脚端部内外面はヨコナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、白色粒子、砂粒を含むが精製されており、きめ細かく堅緻である。炉北側にある深さ1~2cmと浅く、焼土を有するピットからの出土である。

3は脚台部と坏部の接合部。裾部へかけて広がる器形と推測される。脚部には5孔が確認された。外面は縦方向にヘラミガキされる。坏部内面は横方向にヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるが、工具痕とみられるヘラ跡が残る。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含むが精製されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土である。

鉢形土器(4~6)

4は2/3程度遺存する。口径7.8cm、底径4.5cm、器高6.5cmと小型の土器である。最大径を体部上半にもち、頸部で僅かにくびれて口縁部は内湾気味に開く器形である。口唇部内外面はヨコナデ、外面はハケメ調整後、縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面口縁部は横方向にヘラミガキされる。内面頸部以下は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、内外面ともに赤彩される。体部下半には黒斑がみられる。胎土には白色粒子、細礫を含むが精製されきめ細かい。住居北側コーナー付近の覆土中からの出土である。

5は1/2程度遺存する。推定口径約8cm、底径約4.7cm、器高約5.8cmと小型の土器である。あまり張りをもたない体部から頸部は僅かに屈曲し、短い口縁部は外反する。口縁部内外面はヘラナデされる。体部外面はヘラナデされるが、ハケメ痕が残る。体部内面はヘラナデされるが工具痕が僅かに残る。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含むが細かい。覆土中からの出土である。

6は体部のみ残存する。全体の器形は不明であるが、球状を呈する体部から頸部でゆるやかにくびれて、口縁部は外反する器形と思われる。体部外面はハケメ調整後ヘラミガキされると推測されるが、摩擦が激しく確認が困難である。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含むがきめ細かい。覆土中からの出土である。

甕形土器(7・25~28)

7は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾径9.3cmを測る。甕部との接合部のくびれから、裾部へかけてやや直線的に開く器形である。脚台部外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされるが、一部ハケメ痕が残る。甕部内面はヘラナデされると推測されるが、煤の付着がみられるため、確認困難である。脚裾部内外面はヨコナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、白色粒子を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

25は口縁部破片。口唇部にはハケ状工具で左から刺突した刻みが施される。内外面はヘラナデされる。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。

26は頸部から体部にかけての破片。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケメ痕が残る。外面には煤が付着する。色調は赤灰色(2.5YR4/1)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。

27・28は体部破片で同一個体か。内外面ともにヘラナデされるが、外面に幅広で粗いハケメ痕が残る。

色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。外面には煤が付着する。
25～28は覆土中から出土した。

256号住居跡（第58図）

〔位置〕 B-3 G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。70 Jを切る。（平面形）円形？（規模）不明×490 cm。（主軸方向）N-16° -W。（壁高）2～30 cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅13～15 cm・下幅5～8 cm・深さ5～9 cmを測る。（床面）部分的に硬化しているが全体に軟弱。（炉）住居中央から西に偏って位置する。不明×65 cmの楕円形を呈する地床炉で深さ6 cmを測る。（柱穴）住居壁際に4本検出する。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む黒褐色土（10YR3/1）で部分的に焼土粒子を含む。攪乱が著しいため詳細は不明である。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

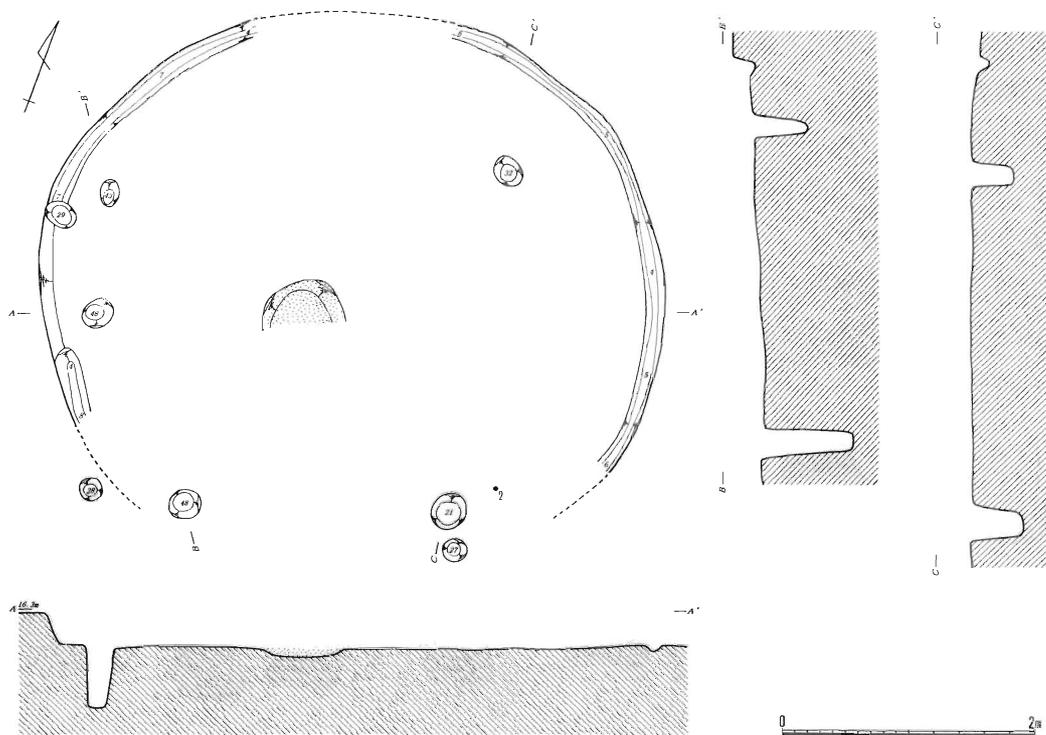
〔時期〕 弥生時代後期後半。

256号住居跡出土遺物（第59・60図）

壺形土器（1・4～9）

1は小型の壺形土器の頸部から肩部にかけての破片である。全体の器形は不明であるが頸部は屈曲し口縁部は外反する器形と推測される。肩部にはL Rの単節斜縄文が施され、縄文原体の末端処理部分が斜縄文の上端に残っているのが確認できる。頸部内外面はヘラミガキされる。肩部内面はヘラナデ。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、頸部内外面は赤彩される。胎土には細礫、砂粒を含むが精製されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土である。

4・5は複合口縁部破片。4は口縁部外面にL Rの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。口縁



第58図 256号住居跡（1/60）

部下端には刻みが施される。内面は横方向に丁寧なヘラミガキされる。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、内面は赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含むが精選されきめ細かい。5は内外面ともにヘラミガキされたと思われるが、摩耗が激しく確認困難である。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫、砂粒を含む。赤彩されている可能性がある。

6は口縁部破片。口唇端部と口縁部外面には附加条の縄文が施される。内面は横方向にヘラミガキされ、赤彩される。色調は灰黄褐色 (10YR6/2) を呈し、胎土には細礫、白色粒子が含まれる。

7は複合口縁部破片。内外面ともにハケメ調整後ヘラミガキされる。色調は暗灰色 (N3/) を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

8・9は肩部破片。8はLRの単節斜縄文が4段施される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。9は撚りの異なる単節縄文を用いた羽状縄文が施される。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/4) を呈し、胎土には細礫、砂粒を含む。

いずれも覆土中からの出土。

器台形土器 (2)

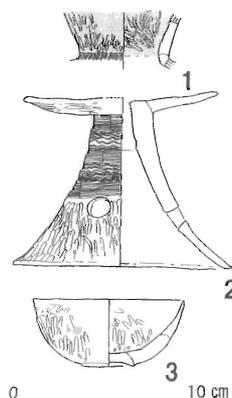
受部の一部分と脚台部のみ遺存する。推定口径約10cm、裾径11.4cm、器高9.5cmと比較的小型の土器である。受部はほぼ水平に開く。脚台部は裾部へかけて末広がりに大きく開く器形である。脚部には途中3孔が開けられる。孔は外から内へと開けられている。受部内外面は丁寧にヘラミガキされる。脚柱部外面には6条一単位の櫛歯状工具による横線文と波状文を上から順に交互に5段施文している。裾部は縦方向にヘラミガキされる。内面は丁寧にヘラナデされるが、工具痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫、砂粒、軽石と推定される浅黄橙色粒子を多く含む。住居東側覆土中からの出土。以上のような器形、文様の特徴から、山中型器台の系譜を引く土器と推測される。

碗形土器 (3)

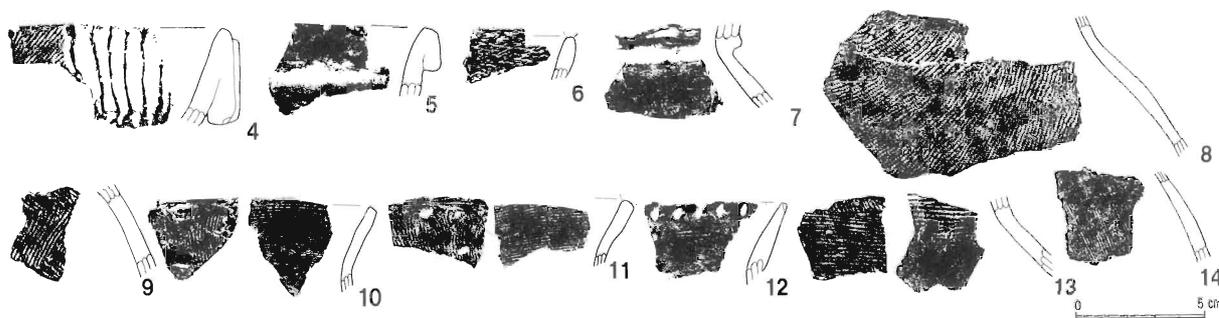
1/2程度遺存する。推定口径8cm、底径2.6cm、器高3.5cmと小型の土器である。凹んだ底部をもつ碗状の器形である。口縁部内外面はヨコナデされる。外面体部はハケメ調整後、縦方向にヘラミガキされる。内面は斜方向にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

鉢形土器 (10・11)

10・11は同一個体か。甕形土器の可能性もある口頸部破片。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケメ痕を残す。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、黑色粒子を含む。覆



第59図 256号住居跡出土遺物1 (1/4)



第60図 256号住居跡出土遺物2 (1/3)

土中から出土した。

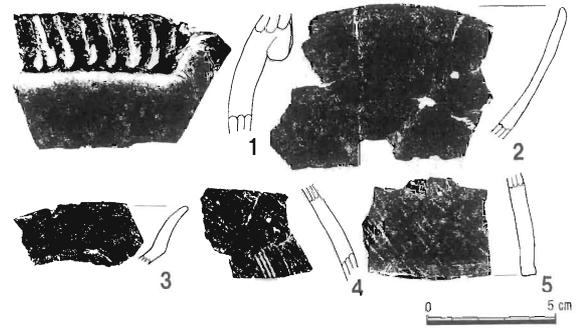
甕形土器（12～14）

12は口縁部破片。口唇部にはやや左方向から浅く刺突された刻みが巡る。内外面ともにヘラナデされる。色調は、灰褐色（5YR5/2）を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。

13は肩部破片。内外面ともヘラナデされるが、外面と内面口縁部にハケメ痕が残る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、外面には煤が付着する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

14は体部破片。内外面はヘラナデされるが、外面には縦位、斜位のハケメ痕が残る。色調はにぶい橙色（5YR1/4）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。



第61図 257号住居跡出土遺物（1/3）

257号住居跡（第55図）

〔位置〕 C-4G。

〔住居構造〕 耕作による攪乱が著しい。255Yと重複するが、新旧関係は不明。（平面形）不明。（規模）不明×340cm。（主軸方向）不明。（壁高）34～41cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。（壁溝）上幅10～20cm・下幅4～10cm・深さ3～9cmを測る。（床面）全体に良く硬化している。（炉）不明。（柱穴）検出できなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含むやや硬質な黒褐色土（2.5Y3/1）であるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期後半～古墳時代前期前半。

257号住居跡出土遺物（第61図）

壺形土器（1）

複合口縁部破片。口縁部外面には、8本の沈線が確認される。下端には刻みが施される。内外面ともにヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含む。覆土中から出土した。

高環形土器（2・3）

2は坏部破片。碗状を呈する器形と推測される。口縁部と口唇端部にはLRの単節縄文が巡る。内外面ともにヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土は細礫、砂粒を含むが、精製されきめ細かい。床面上から出土した。

3は坏部破片である。頸部に僅かに稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面ともに横ナデされる。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（4・5）

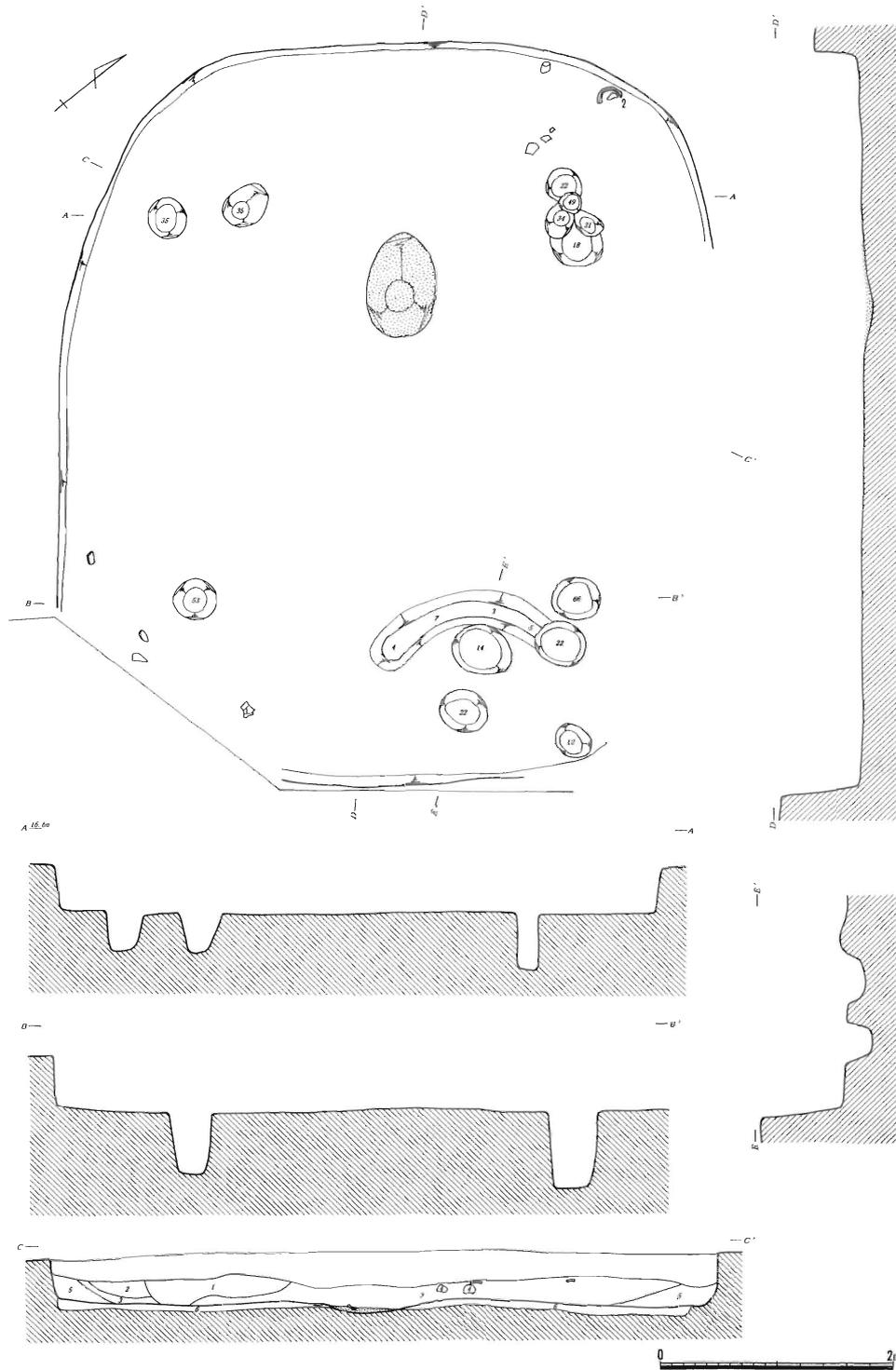
4は体部破片。内外面ともにヘラナデされるが、外面にはハケメ痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中から出土した。

5は脚台部破片。内外面ともにヘラナデされるが、外面にはハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中から出土した。

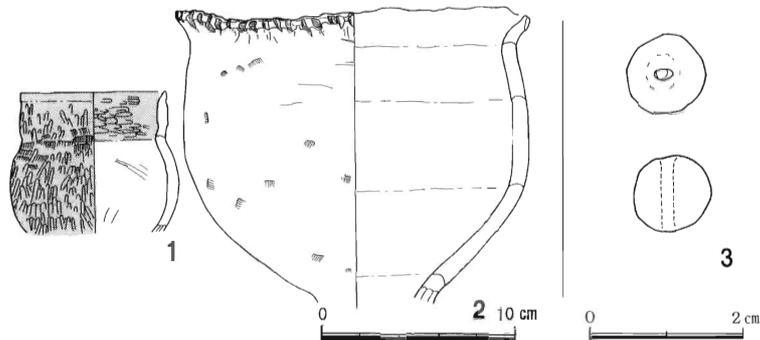
258号住居跡 (第62図)

〔位置〕 C-4 G。

〔住居構造〕 南側一部調査区外。(平面形) 楕円形。(規模) 640×580cm。(主軸方向) N-46°-W。

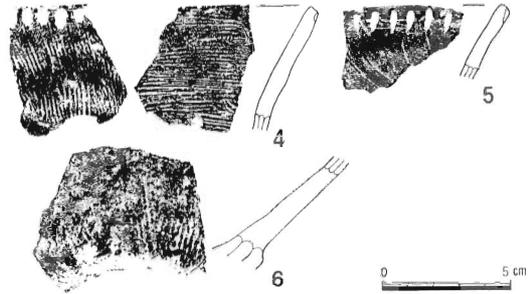


第62図 258号住居跡 (1/60)



第63図 258号住居跡出土遺物1 (1・2 = 1/4, 3 = 1/1)

(壁高) 39~69cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 貼床が施されている。壁際周辺を除き良く硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。110×105cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴) 各コーナー壁際に4本検出する。(貯蔵穴) 南東壁下に位置する。2ヶ所の可能性がある。壁際の1基は35×40cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。他の1基は40×50cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る。北側に幅30cm前後・高さ3~8cmの凸堤が構築されている。



第64図 258号住居跡出土遺物2 (1/3)

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟弱。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや軟弱。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム小ブロックを含む。
- 4層 明黄褐色土 (10YR6/6)。ロームブロック。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から土器片が多量に出土する。

〔時期〕 弥生時代後期後半。

258号住居跡出土遺物 (第63・64図)

壺形土器 (1・6)

1は体部の1/2程度が遺存する。口径7.6cmを測り、所謂瓢壺に類似した小型の土器である。口縁はほぼ直立して内湾気味に立ち上がり、口唇部は僅かに外反する。体部は球状を呈する。口唇部内外面はヨコナデ。外面は縦方向にヘラミガキされるが頸部に縦位のハケメ痕が残る。口縁部内面は横方向にヘラミガキされる。頸部以下はヘラナデされるが、工具痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、体部内面以外赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中からの出土。

6は底部破片。外面は粗くヘラミガキされるが、縦位のハケメ痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は赤灰色 (2.5YR4/1) を呈する。胎土には細礫、砂粒、軽石と思われる白色粒子と、特に赤褐色粒子が多く含まれる。覆土中から出土した。

甕形土器 (2・4・5)

2は甕部1/2程度が残存する。口径18.7cm。最大径を口縁部にもち、僅かに外反する。頸部はゆるやかにくびれて、あまり張りをもたない体部からすばまる器形である。口唇部は先端の尖った角状のハケ状工具で、やや左方向から刺突された刻みが巡る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土には1~8mmの細礫、砂粒、白色粒子を含む。住居北側の壁際、床面上からの出土である。

4・5は口縁部破片。4は先端の丸い工具により刺突された刻みが巡る。5はヘラ状の工具で刺突された刻みが施される。いずれも内外面ともにヘラナデされるが、4は外面縦位、内面横位のハケメ痕が残る。5は摩耗が激しく確認が難しいが、外面に斜位のハケメ痕が残る。4の色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、外面に煤の付着がみられる。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。覆土中から出土した。5の色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。床面上からの出土である。

土玉(3)

完形。球形を呈し、径1.1cm、重量1gを呈する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土は砂粒、白色粒子を含むがきめ細かい。覆土中から出土した。

(3) 古墳時代後期の遺構と遺物

13号住居跡(第65図)

〔位置〕C-2G。

〔住居構造〕耕作による攪乱が著しい。南東コーナー調査区外。66Jを切る。(平面形)正方形。(規模)740×740cm。(主軸方向)N-8°-E。(壁高)23~36cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)幅10~20cm・下幅5~10cm・深さ5~13cmを測る。カマド部分を除き全周すると思われる。(床面)住居南側が一部硬化している。(カマド)北壁中央に位置する。長さ130cm・幅135cmを測り、袖部・天井部は灰白色粘土で構築されるが、耕作により大部分が破壊され詳細は不明。(柱穴)東側の1本を除き、重複した形を呈した主柱穴3本を検出された。(貯蔵穴)北壁下、西に偏って位置する。上幅110×70cm・下幅90×55cmの長方形を呈し、深さ105cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を部分的に含む。軟弱。
- 2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。軟弱。
- 3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 極暗褐色土(7.5YR2/3)。ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を含む。粘性あり。

〔遺物〕土器片が僅かに出土。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕古墳時代後期。

(4) 遺構外出土の遺物

縄文時代中期中葉の土器(第66図1~14)

1~3は胎土中に雲母片を多く含む。1は連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)。2は隆帯を斜位に貼付し、両脇には波状沈線文がみられる。色調は灰赤色(2.5YR4/2)。3は隆帯が貼付され、それに沿って条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)。

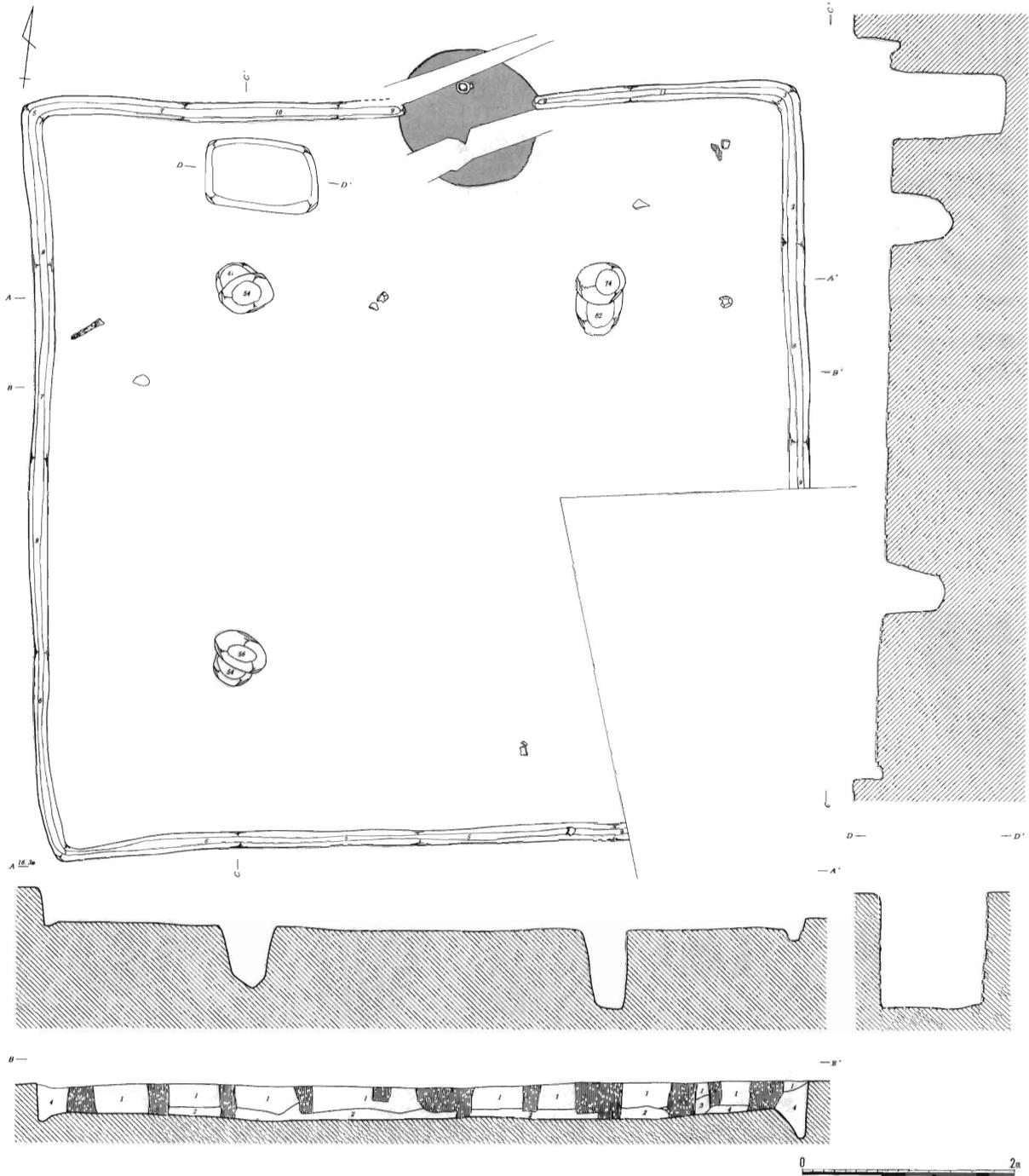
4~6は角押文で文様がつくられる。4は横位と斜位複数列に角押文が施される。色調はにぶい赤褐

色 (5YR4/3) で、胎土には細礫を僅かに含む。5は隆帯により区画がつけられると思われる。角押文は隆帯に沿って施されるほか波状文もみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) で、胎土は砂粒を僅かに含むが精選されている。6は波状沈線文が縦位に施され、三角押文が横走する。外面には部分的に赤色顔料の付着がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) で、胎土には輝石を僅かに含む。

7は幅広押引文が横位に施文される。色調は褐灰色 (7.5YR5/3) で、胎土には雲母片を多く含む。

8は縦区画の文様帯になろうか。隆帯による長方形の区画内には半截竹管による平行沈線が充填される。色調は暗赤灰色 (10YR4/1) で、胎土には細礫を僅かに含む。

9は隆帯により区画がつけられようか。縦位の集合する沈線を横位の沈線が分割する。色調はにぶい



第65図 13号住居跡 (1/60)



第66图 遺構外出土遺物 1 (1/3)

褐色（7.5YR4/3）で、胎土には輝石を含む。

10は刻みが増えられた隆帯が横走する。色調はにぶい橙色（5YR6/3）で、胎土には細礫を含む。

11は隆帯の側面に連続爪形文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土には輝石を多く含む。

12は連続爪形文、半円形刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には輝石を含む。

13は隆帯を襟状に貼付する。色調は赤灰色（2.5YR4/1）で、胎土には雲母片を含む。

14は隆帯により横位区画がつくられる。区画内には半截竹管による平行沈線を充填し、蛇行する隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には輝石を多く含む。

縄文時代中期後年の土器（第66図15～52、第67図53～91）

15～21・23～26は口頸部破片で、隆帯により区画や渦巻文がつくられる。

15の地文はLの撚糸文。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には細礫を含む。

16の頸部は無文帯になろう。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。

17～20・23～25は単節縄文を地文とする。縄文の撚りは17・20・23・25がLR、18・19・24がRLで17は部分的に羽状に施される。17の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石、雲母片を僅かに含む。18の色調は暗灰黄褐色（2.5Y5/2）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。19の色調は灰褐色（7.5YR6/2）で、胎土には細礫を僅かに含む。20の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土の粒子は細かい。23の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石、橙色粒子を含む。24の色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土の粒子は細かい。25の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土の粒子は細かい。

21は区画内が条線となる。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には輝石を僅かに含む。

22は口縁部に2条の凹線が巡り、その間に円形刺突文が増えられる。地文は単節斜縄文。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）で、胎土には細礫を含む。

26の区画内は無文になろうか。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には褐灰色の細礫を含む。

27は口縁部に2条の沈線が巡り、その間は交互刺突ぎみに処理される。地文はLの撚糸文。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には輝石を多く含む。

28・32は口縁部に3条の沈線が巡る。28の地文はLの撚糸文。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土は精選されて細かい。32の地文は条線。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土には輝石を含む。

29は条線を地文とし、口縁部に3条の沈線を巡らせ、2条目と3条目の間に刺突文列を加える。胴部の沈線は連弧文か。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

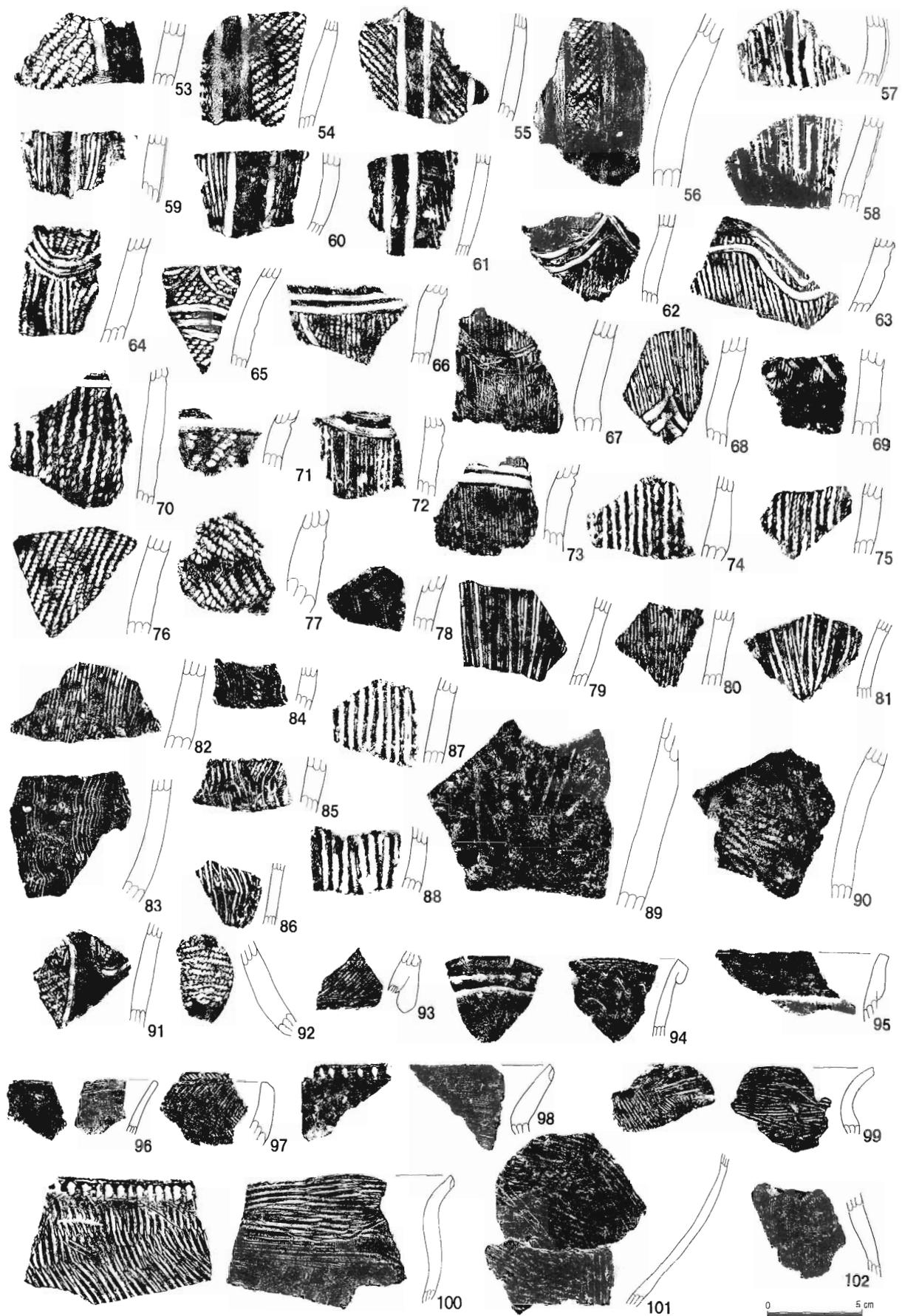
30は口縁部に円形刺突文列が施される。RLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土の砂粒は少ない。

31は先端がササラ状の施文具を用いた刺突文列が2段施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土の粒子は細かい。

33は口唇部に小刺突がつき口縁部は凹む。地文は無節の縄文になろうか。施された沈線は逆「U」字状に描かれた可能性がある。色調は赤灰色（2.5YR4/1）で、胎土には輝石を含む。

34は口縁部に無文部をもち、縄文施文部との境に僅かな稜をもつ。地文はLRの単節斜縄文で、図左下に沈線がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。

35はRLの単節縄文を羽状に施す。色調は褐灰色（10YR5/1）で、胎土の粒子は細かい。



第67图 遺構外出土遺物2 (1/3)

36は口縁部に太沈線が巡り、斜位の沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には輝石を多く含む。

37は口唇端部が凹む。口縁部には円形刺突文列が巡り、斜位に太沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土の粒子は細かい。

38は内湾する口縁部が無文となり、頸部には刺突文列が巡る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には輝石を多く含む。

39～41は口縁部下位から胴部上位にかけての破片。いずれもR Lの単節斜縄文を地文とする。39は口縁部に隆帯による渦巻文と区画がつくられ、胴部には2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石を僅かに含む。40は隆帯が巡り、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰赤色（2.5YR4/2）で、胎土には輝石を含む。41は口縁部に渦巻文、胴部には沈線の懸垂文がみられる。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

42・43は胴部上位の破片。ともにLの撚糸文を地文とする。42は横位の隆帯から2本組隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には輝石を僅かに含む。43は横位に隆帯が貼付される。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には砂粒が多く含まれる。

44～46はLの撚糸文を地文とし隆帯が貼付される。44の懸垂文は直行・蛇行する隆帯か。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。45は蛇行する懸垂文。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。46は直行する懸垂文。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には輝石を多く含む。

47はL、48はRの撚糸文を地文とし沈線が垂下する。47は沈線間が磨り消される。内面には炭化物が付着する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。48の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には明黄褐色粒子を含む。

49～51はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯が貼付される。49は蛇行隆帯が垂下する。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には白色粒子を含む。50は2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には石英を僅かに含む。51はゆるく蛇行する隆帯が垂下する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には輝石、明黄褐色粒子を含む。

52～56は単節斜縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。52の縄文はL R。色調は赤灰色（5YR5/2）で、胎土には明黄褐色粒子を含む。54の縄文はR L。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。55の縄文はL R。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には輝石を含む。56の縄文はR L。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土の粒子は細かい。

57～59は条線を地文とし、57・58は2本組。59は1本の隆帯が貼付される。57の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。58の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。59の色調はにぶい橙色（5YR6/3）で、胎土には砂粒がめだつ。

60・61は条線を地文とし、平行する沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。60の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には輝石を僅かに含む。61の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には輝石を含む。

62・63はLの撚糸文を地文とする連弧文土器。62は2本組沈線で連弧文が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。63は2本組沈線で波状文が描かれる。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土の粒子は細かい。

64～66単節縄文を地文とする連弧文土器。64の縄文はR L。文様は半截竹管で描かれ、弧線の下端から懸垂文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）で、胎土には輝石を多く含む。65の縄文はR L。連弧文と横位の平行沈線がみられる。色調は灰褐色（7.5YR6/2）で、胎土には白色粒子を僅かに含む。66の縄文はL R。横位の平行沈線下に連弧文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には輝石を多く含む。

67・68は条線を地文とし連弧文が施される。67の色調は褐灰色（10YR4/1）で、胎土には輝石を含む。68の色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

69は条線を地文とし、沈線が矢羽根状に施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

70は沈線下にLの撚糸文が施される。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には明黄褐色粒子を僅かに含む。

71は沈線下にR Lの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫、輝石を僅かに含む。

72・73は条線を地文とし、横走る沈線が施される。72の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細礫を僅かに含む。73の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）で、胎土中の砂粒の混入は少ない。

74・75はLの撚糸文が施される。74の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中の砂粒の量は多い。75の色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土中には輝石を僅かに含む。

76・77はR Lの単節斜縄文が施される。76の色調は灰黄褐色（10YR5/2）で、胎土の粒子は細かい。77の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土中には細礫を多く含む。

78はR Lの単節斜縄文と条線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土の粒子は細かい。

79～86は条線が施される。83～84の条線は蛇行する。79の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土の粒子は細かい。80の色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土は白色粒子を僅かに含むが精選されている。81の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土中には白色の砂粒を多く含む。82の色調は灰黄褐色（10YR5/2）で、胎土の粒子は細かい。83の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土中の砂粒は少ない。84の色調は褐灰色（10YR5/1）で、胎土中の砂粒は少ない。85の色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土中には白色粒子を含む。86の色調は褐灰色（10YR5/1）で、胎土の粒子は細かい。

87・88は半截竹管による集合する沈線を施す。87の色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土中には砂粒が多い。88の色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土の粒子は細かい。

89は斜位に沈線を施し、そこに縦位の沈線を加える。色調はにぶい橙色（5YR6/4）で、胎土中には輝石を多く含む。

90は微隆帯により区画がつくられる。地文はL Rの単節斜縄文。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土の粒子は細かい。

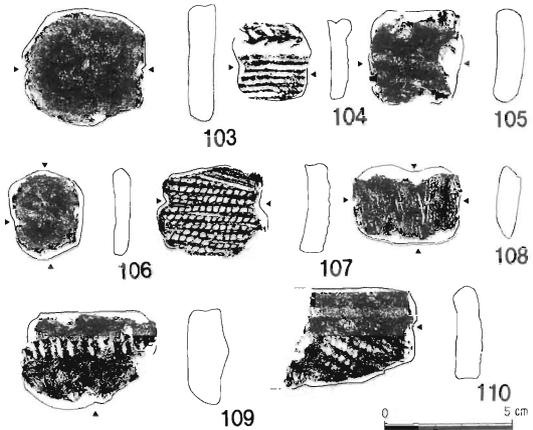
91はR Lの単節斜縄文を地文とする。沈線による区画がつくられ、区画外は磨り消される。色調は灰黄褐色（10YR5/2）で、胎土中には橙色粒子を含む。

土製品（第68図）

いずれも土器片錘である。

103は4.9×4.7cm、重さ32.3gを測る。長軸の両端に刻みがつけられる。無文の土器片を利用。色調は褐灰色（10YR5/1）で、胎土には白色粒子を含む。104は3.1×3.1cm、重さ10.6gを測る。2ヶ所に刻

みがつけられる。地文にLの撚糸文をもち、矢羽根状の刻みが加えられた隆帯が貼付された土器片を利用。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土には細礫を含む。105は3.7×3.5cm、重さ2.4gを測る。長軸の両端に刻みがつけられる。無文の土器片を利用。色調はにぶい橙色(5YR6/4)で、胎土の粒子は細かい。106は図右側が欠損か。2.8×3.5cm、重さ9.5gを測る。3ヶ所に刻みがつけられる。無文の土器片を利用。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)で、胎土には輝石を僅かに含む。107は4.4×3.6cm、重さ22.4gを測る。長軸の両端に刻みがつけられる。Rの撚糸文が施された土器片を利用。色調は赤灰色(2.5YR4/1)で、胎土



第68図 遺構出土遺物3(1/3)

には輝石を僅かに含む。108は4.2×3.2cm、重さ15.4gを測る。長・短軸に4ヶ所の刻みがつけられる。無文の土器片を利用。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土の粒子は細かい。109は5.2×3.9cm、重さ36.1gを測る。明瞭な刻みは1ヶ所のみである。刻みが加えられた隆帯が貼付された土器片を利用。色調は暗赤灰色(10YR4/1)で、胎土には雲母片を僅かに含む。110は図左側が欠損。5.3×4cm、重さ29.3gを測る。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する土器片を利用。色調は灰赤色(10YR4/2)で、胎土には輝石を含む。

弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の土器(第67図92~102)

92~97は壺形土器。92は肩部破片。LRの単節縄文が施される。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒、雲母片を含む。93~95は複合口縁部破片。93は外面にLRの単節縄文を施す。内面は丁寧にヘラミガキされる。色調は暗赤灰色(2.5YR3/1)を呈し、内面は赤彩される。外面の縄文帯の中にも僅かに赤彩痕がみられる。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。94は内外面ともにナデられているが、口唇部と口縁部外面にはハケメ痕が残る。内面には櫛描波状文が2段施される。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には細礫、砂粒、黒色粒子を含む。95は内外面ともにヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。96は小型の壺の口縁部破片。内外面ともに粗くヘラミガキされる。ハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。97は鉢形土器の可能性もある。口唇部にはRの無節斜縄文が施される。複合口縁部外面には、LRの単節縄文と口唇部と同一のRの無節斜縄文を羽状に施す。内面はヘラミガキされる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、内面は赤彩される。胎土には細礫、砂粒、白色粒子、赤褐色粒子を含む。

98~100は甕形土器の口縁部破片。98は口唇部に先端の尖った工具でやや右方向から刺突した刻みが巡る。内外面はヘラナデされるが外面斜位、内面横位のハケメ痕が残る。色調は暗赤灰色(10YR4/1)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。99の口唇部はヨコナデされる。内外面ともヘラナデされるが外面縦位、内面横位のハケメ痕が残る。色調は赤灰色(2.5YR4/1)を呈する。胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。100は口唇部にハケ状工具によりやや右方向から刺突された刻みが巡る。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦位、内面横位の幅広で粗いハケメ痕を残す。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。101は体部破片。内外面ともにヘラナデされるが、外面には粗いハケメ痕が残る。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には細礫、砂粒、赤褐色粒子を含む。102

は台付甕形土器の脚台部破片。内外面ともにヘラナデされるが外面には縦位のハケメ痕が残る。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には細礫、砂粒、白色粒子を含む。

第3節 小結

今回の調査地点は、牛蒡作りが行われていたこともあり、その深耕の影響で遺構・遺物の遺存状態は決して良好とはいえなかった。しかし、このような条件の中で縄文時代中期の住居跡10軒・土坑22基・屋外埋甕1基、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての住居跡9軒、古墳時代後期の住居跡1軒を発掘し、あまり多いとはいえないがこれに伴う遺物を検出した。

ここでは、これらについて若干のまとめを記しておく。

縄文時代中期

本遺跡では、該期の住居跡が現時点で94軒調査されている。住居跡群は内湾している台地の縁辺に沿って馬蹄形状あるいは弧状に分布しているようで、この地域の拠点集落である可能性が強まってきている。時期的には勝坂式期終末から加曽利EⅡ式期までの住居跡を中心にして、加曽利EⅢ・Ⅳ式期のものが少数みられる。継続性のある集落跡といえよう。

今回検出された住居跡の時期的内訳は、加曽利EⅠ式期3軒、加曽利EⅡ式期7軒で後者が上まわっている。これまでの調査で時期が確定できた住居跡をみると、勝坂式期と加曽利EⅠ式期のそれは集落の全面に分布しているのに対して、加曽利EⅡ式期の住居跡は集落の東側に集中する傾向がある。

土坑で時期が判明したものは、勝坂式期3基、加曽利EⅡ式期9基、加曽利EⅣ式期1基で、加曽利EⅡ式期のものが多くを占める。また、時期不明であった9基の土坑の中にも該期のものが含まれていることも考えられるので、更に増加する可能性がある。住居跡と共に集中して占地していることをうかがわせる。

弥生時代末葉から古墳時代初頭

本遺跡では、これまでの調査で量的には多いとはいえないものの、畿内・東海などの外来系（搬入品であるかどうかは別にして）の土器が出土してきた。これらの存在は、ヒトやモノあるいは技術などの交流・伝播を裏づけるものとして、また、土器自体のクロスダイティングを行う際の資料として重要視されるべきものである。

今回の調査では外来系の土器として、131号住居跡から菊川式土器の要素をもつ壺形土器が、256号住居跡からは山中型器台の系譜を引くと思われる土器が出土した。これらは全体に粗雑な作りで、胎土の状態からみても在地で製作された感が大である。

本遺跡では、現在270軒に及ぶ住居跡と20基を数える方形周溝墓が調査されている。これらの遺構とそこから出土した遺物を考えていくうえで、僅か2点の土器ではあるがこれがもつ意味は軽視できないものと考えられる。

本遺跡の調査に関しては未報告のものが多く、それをもとに記述を進めることには躊躇を覚えた。これらについては、徐々にでも報告を行っていくつもりである。

[引用・参考文献]

- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 今井 堯・坪田幹男・鍋島直久 1996「縄文時代中期集落の調査」『西ノ原遺跡一大井・苗間第一土地
区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』大井町遺跡
調査会報告第6集 第1分冊
- 今井 堯・坪田幹男・土本 医 1998「縄文時代中期前半集落の調査」『亀居遺跡一亀久保特定土地
区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』大井町遺跡調
査会報告第8集
- 尾形則敏 1990「第4章 西原大塚遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
1999「第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集
2000「第2章 西原大塚遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群10』志木市の文化財第28集
- 金子彰男 2000「埼玉県における弥生後期土器編年について」『東日本弥生時代後期の土器編年』第1
分冊 東日本埋蔵文化財研究会 福島県実行委員会
- 小出輝雄 1983『針ヶ谷遺跡群一第3地点の調査一』富士見市遺跡調査会調査報告第21集
- 佐々木保俊 1985「第1章 西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地
点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集
1985「第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
1991「第2章 西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第16集
1996「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」
志木市の文化財第24集
1997「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集
1998『西原大塚の遺跡』西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報
- 佐々木保俊・尾形則敏 1987「第2章 西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点 西原大塚
遺跡第4地点発掘調査』志木市遺跡調査会調査報告第3集
1990「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」「第5章 西原大塚遺跡第10地
点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
- 佐々木保俊・上田 寛・内野美津江・宮川幸佳 2000『西原大塚遺跡第45地点発掘調査報告書』志木市
遺跡調査会・小松フォークリフト株式会社
- 篠原和大・山下英郎 2000「静岡県における弥生後期土器編年について」『東日本弥生時代後期の土器
編年』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会 福島県実行委員会
- 鈴木敏則 1997「三河遠江からみた相模の後期弥生土器前編」西相模考古第6号
- 高橋 敦 1987『針ヶ谷遺跡群』針ヶ谷地区土地区画整理事業に伴う昭和60年・61年度の発掘調査富士
見市遺跡調査会調査報告第27集
- 並木 隆 1984「所沢市椿峰遺跡群の調査」『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集
- 早坂廣人・隈本健介 1999「勝瀬原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」『勝瀬原遺跡群』富
士見市遺跡調査会調査報告52集
- 比田井克仁 1987「伊勢湾系土器の系譜と動向一南関東地方について一」『「欠山式土器とその前後」
研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会
1997「弥生時代後期における時間軸の検討」『古代』第103号

報告書抄録

ふりがな	し き し い せき ぐん								
書名	志 木 市 遺 跡 群 11								
副書名		巻	次						
シリーズ名	志木市の文化財	巻	次	第30集					
編著者名	尾形則敏 佐々木保俊 内野美津江 宮川幸佳								
編集機関	埼玉県志木市教育委員会								
所在地	〒352-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番地1号 TEL 048(473)1111								
発行年月日	2001(平成13)年3月30日								
ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
なかのいせき 中野遺跡 (第50地点)	しきしかしわちやう 志木市柏町 1丁目1518-7	11228	002	35° 49' 48"	139° 34' 34"	19990614 ~ 19990617	87.75	個人専用住宅	
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第43地点)	しきしさいわいちやう 志木市幸町 3丁目3151-1他	11228	007	35° 49' 16"	139° 34' 00"	20000111 ~ 20000324	779.6	農地土壌改良	
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
なかのいせき 中野遺跡 (第50地点)	集落	古墳時代後期	住居跡	1軒	土器小破片				
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第43地点)	集落	縄文時代中期	住居跡 土坑	10軒 22基	勝坂、加曾利EⅠ・ Ⅱ式土器、石器				
		弥生時代後期) 古墳時代前期	住居跡	9軒	壺形土器 甕形土器		東海系土器		
		古墳時代後期	住居跡	1軒	土器小破片				

圖 版



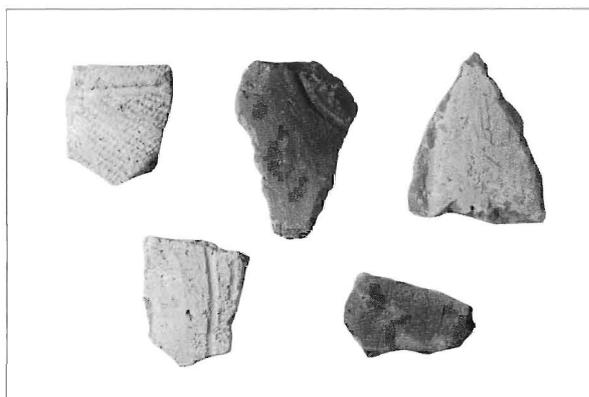
1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 7号住居跡



4. 遺構外出土遺物



5. 遺構外出土遺物



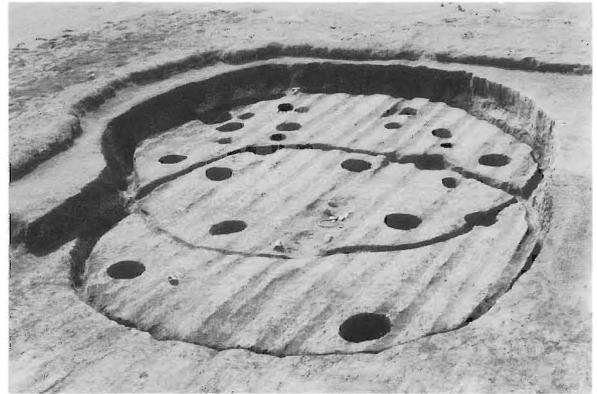
1. 28・132号住居跡



2. 65号住居跡、355・356号土坑



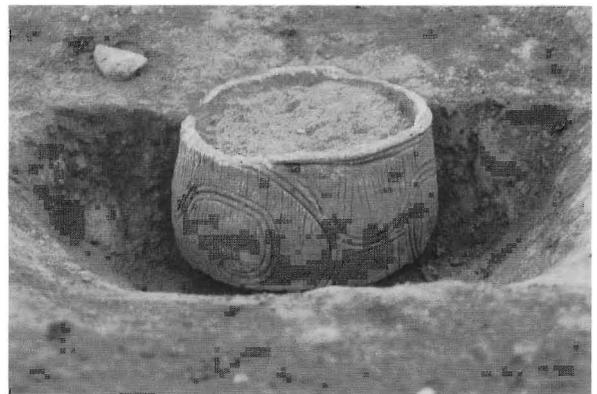
3. 66号住居跡



4. 68・70号住居跡



5. 70号住居跡炉跡



6. 70号住居跡炉跡



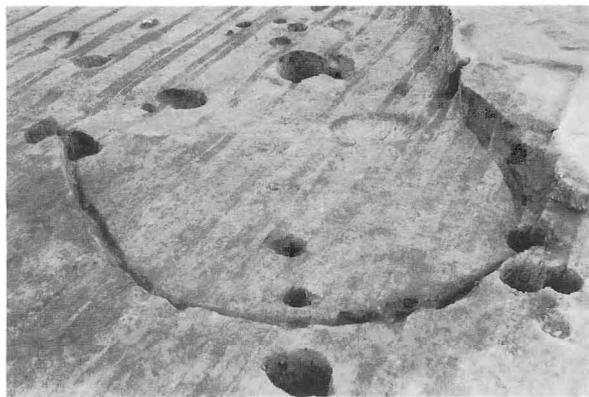
7. 69号住居跡



8. 69号住居跡炉跡



1. 71号住居跡



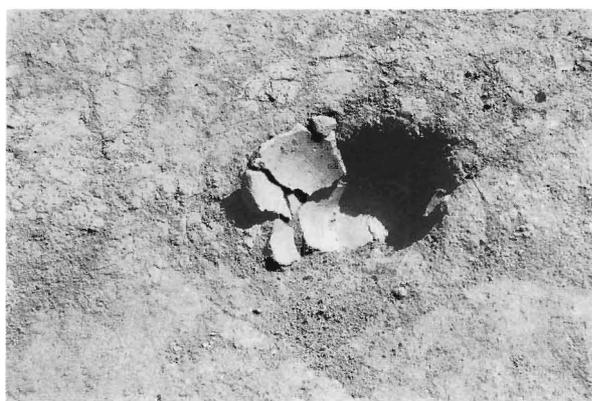
2. 72号住居跡



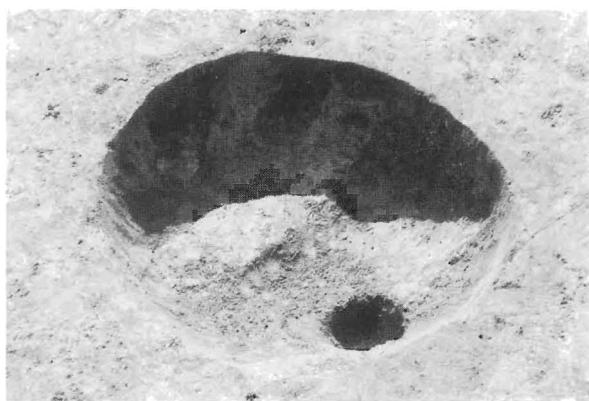
3. 74号住居跡



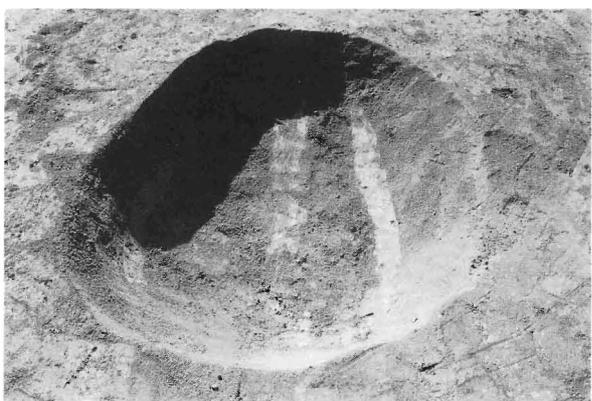
4. 74号住居跡遺物出土状態



5. 4号埋葬



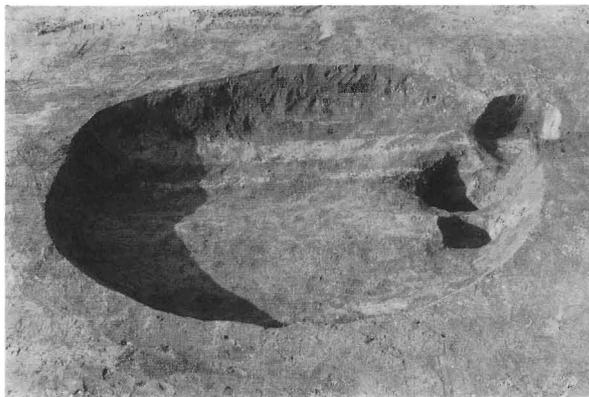
6. 354号土坑



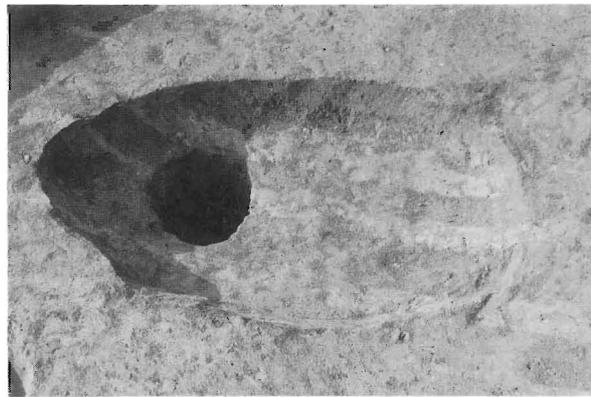
7. 358号土坑



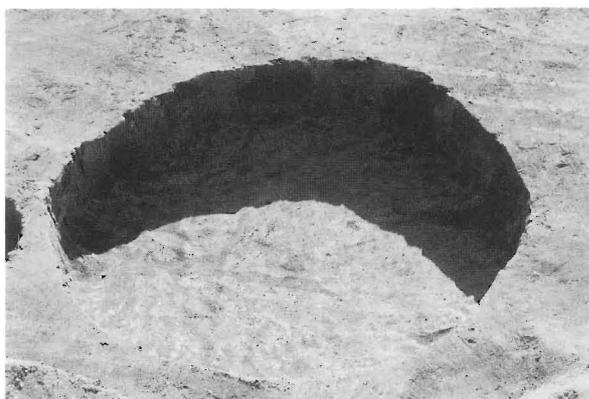
8. 359号土坑



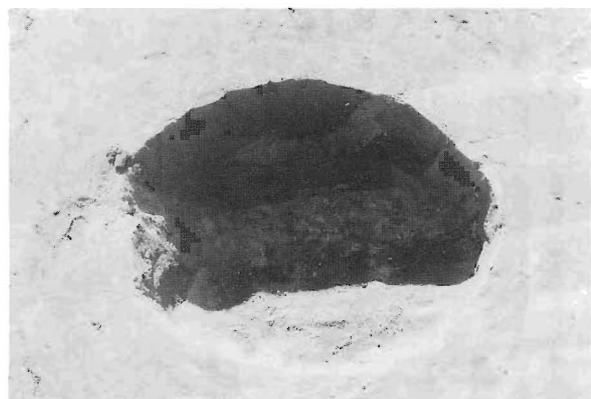
1. 364号土坑



2. 365号土坑



3. 367号土坑



4. 368号土坑



5. 372号土坑



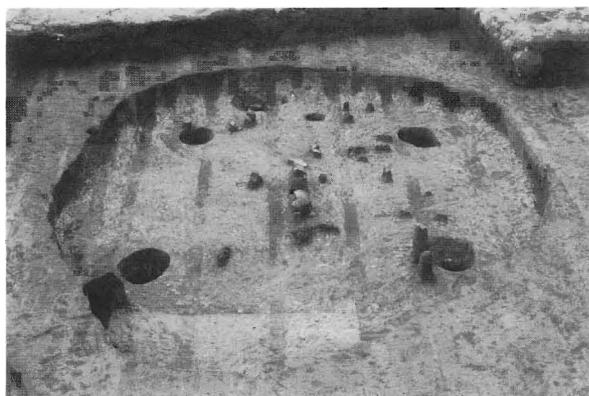
6. 375号土坑



7. 376号土坑



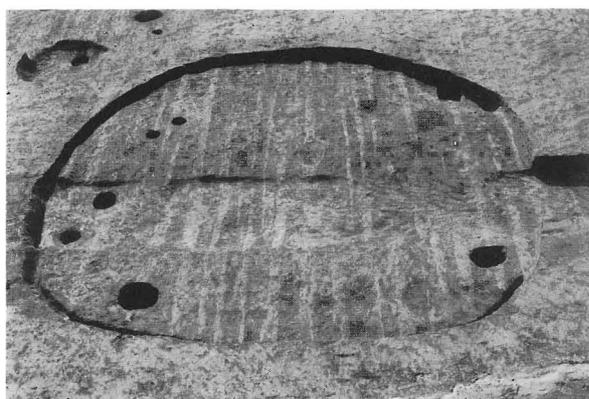
8. 131号土坑



1. 252号住居跡



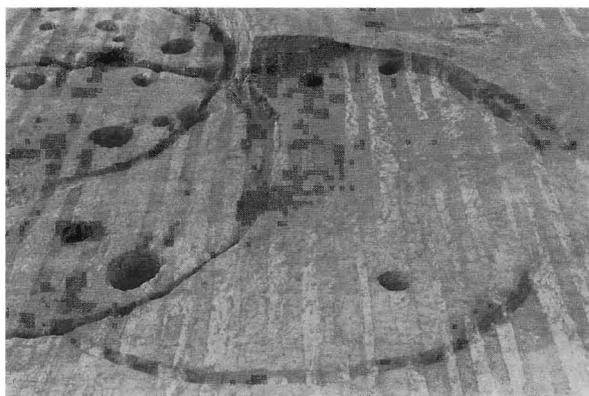
2. 253号住居跡



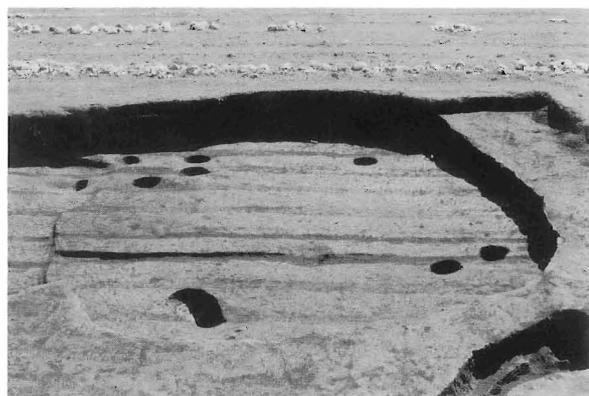
3. 254号住居跡



4. 255・257号住居跡



5. 256号住居跡



6. 258号住居跡

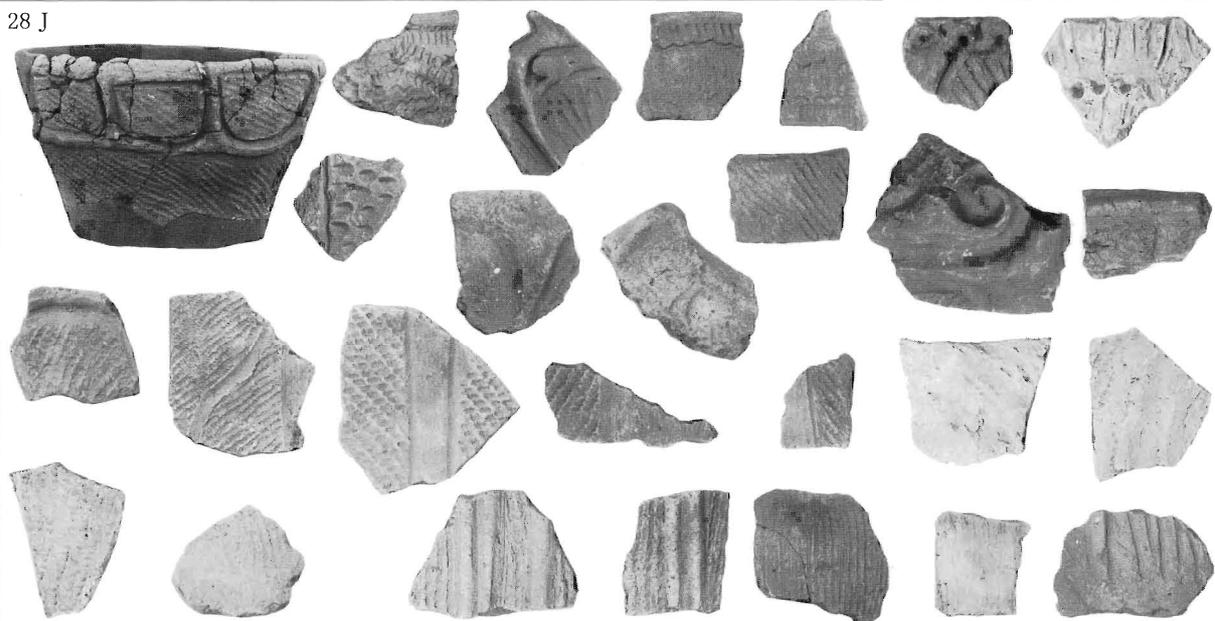


7. 13号住居跡



8. 発掘風景

28 J



65 J



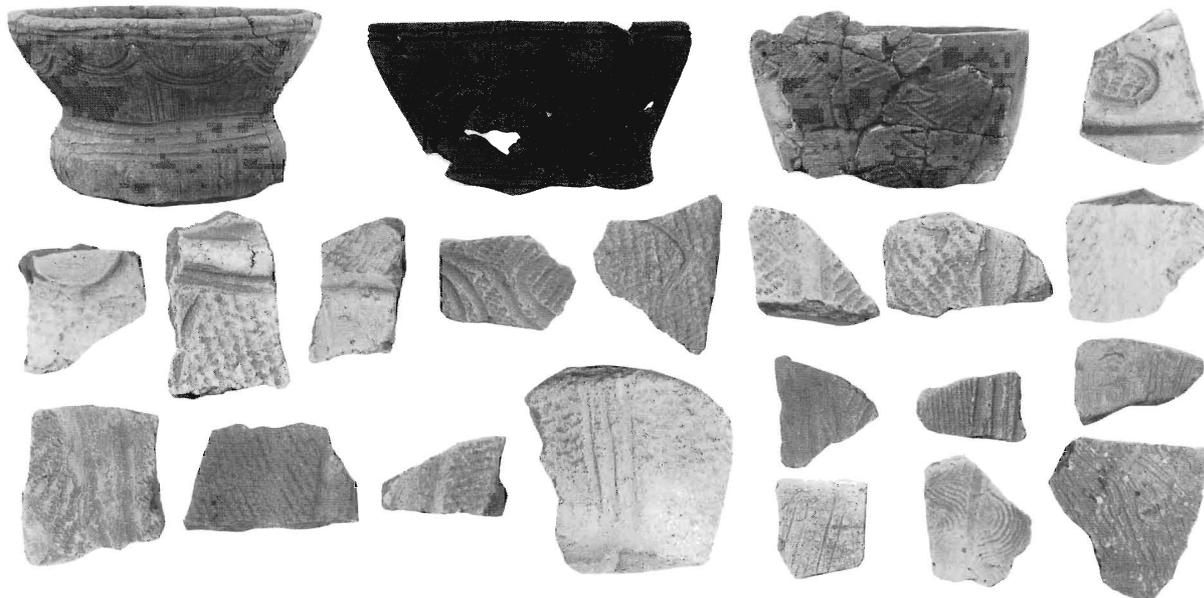
66 J



68 J



69 J



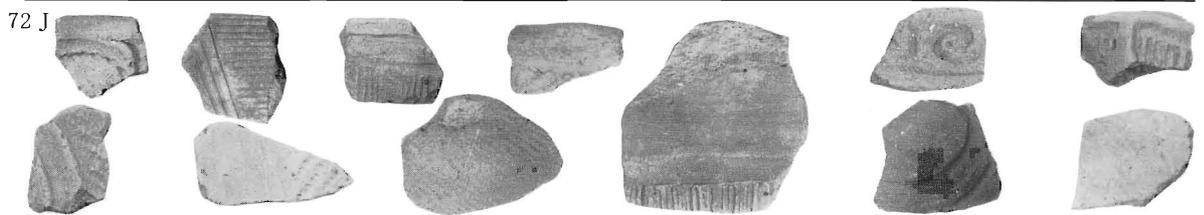
70 J



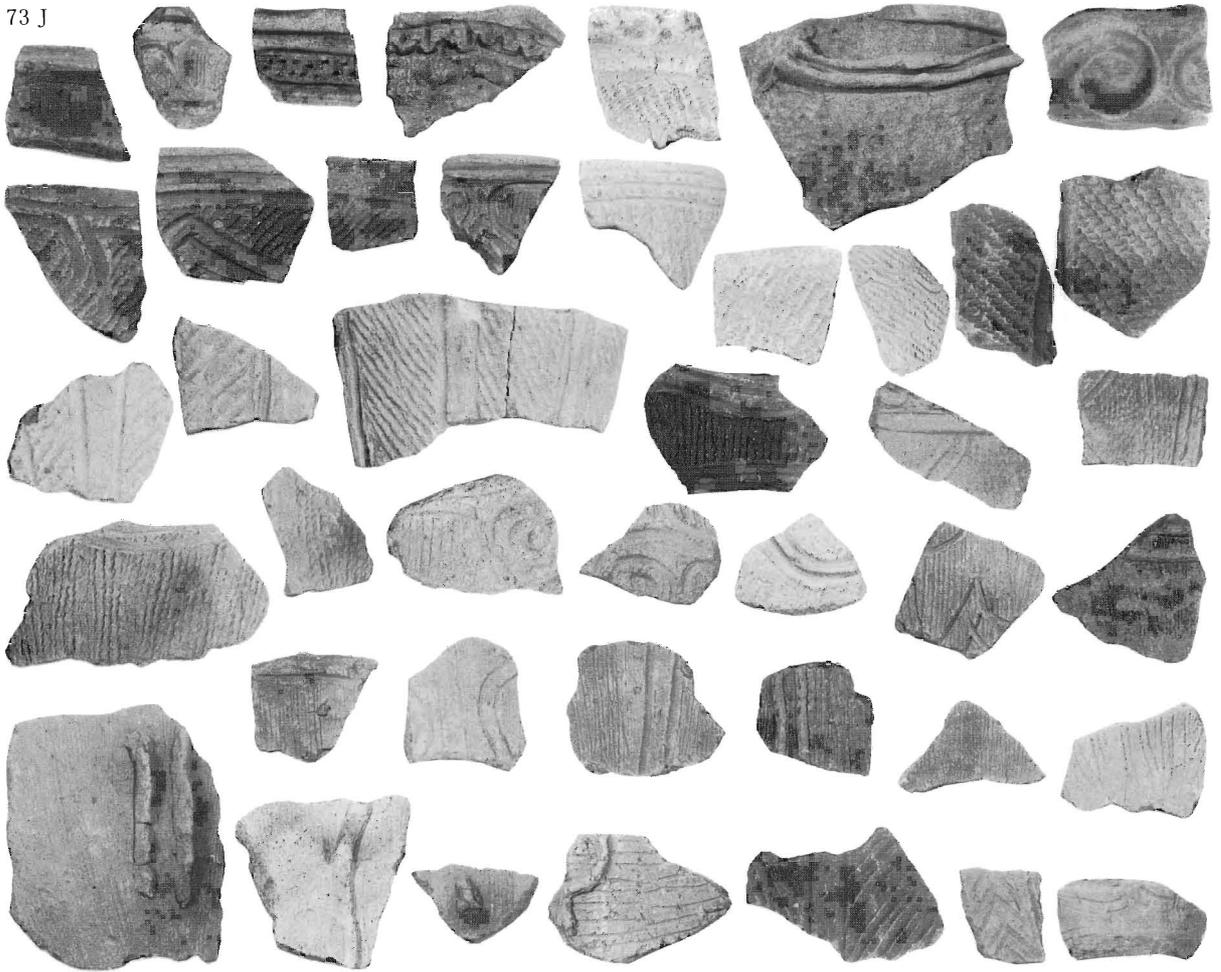
71 J



72 J



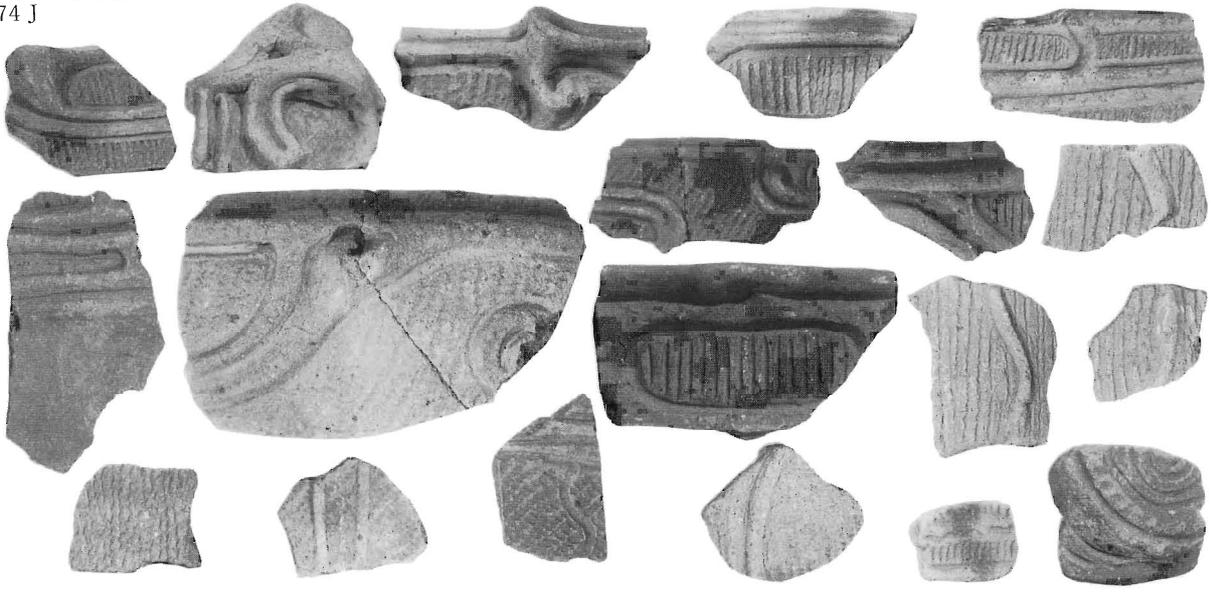
73 J



74 J



74 J



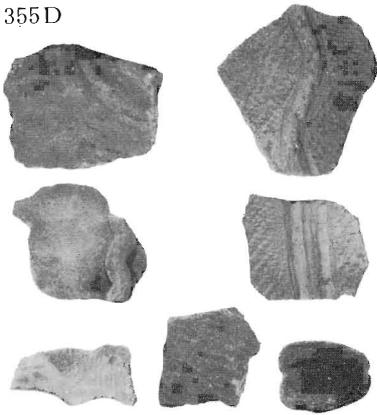
4号埋甕



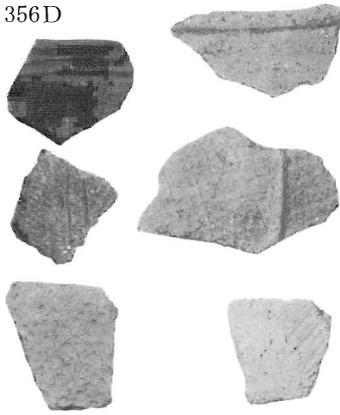
354D



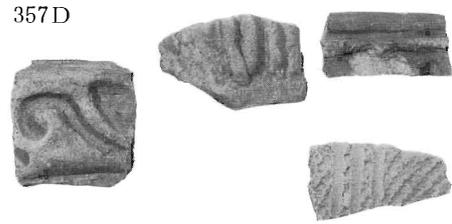
355D



356D



357D



359D



362D



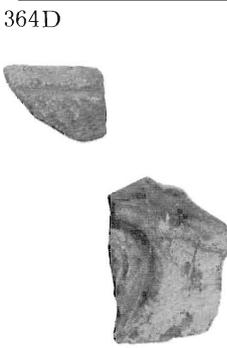
363D



367D

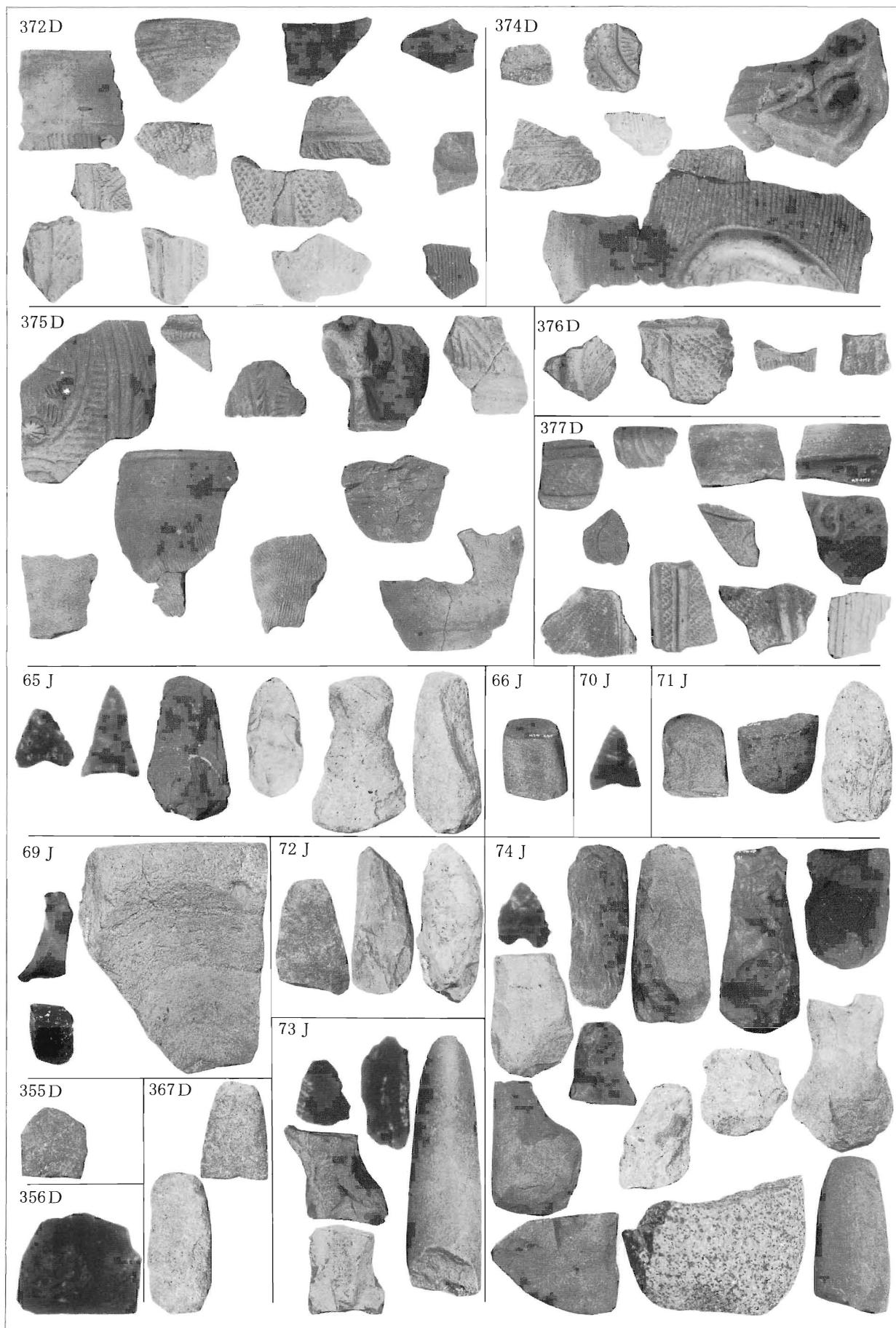


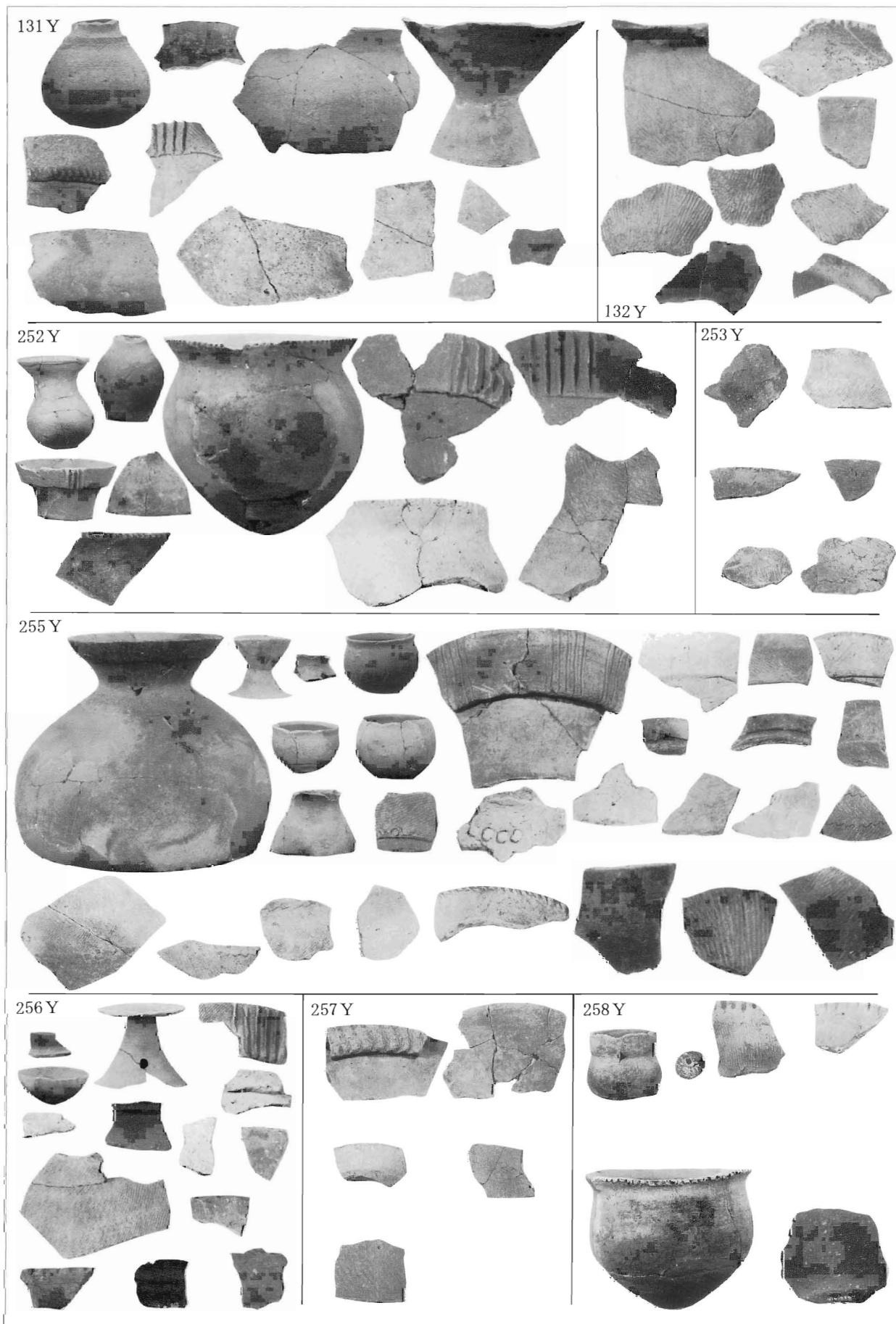
364D

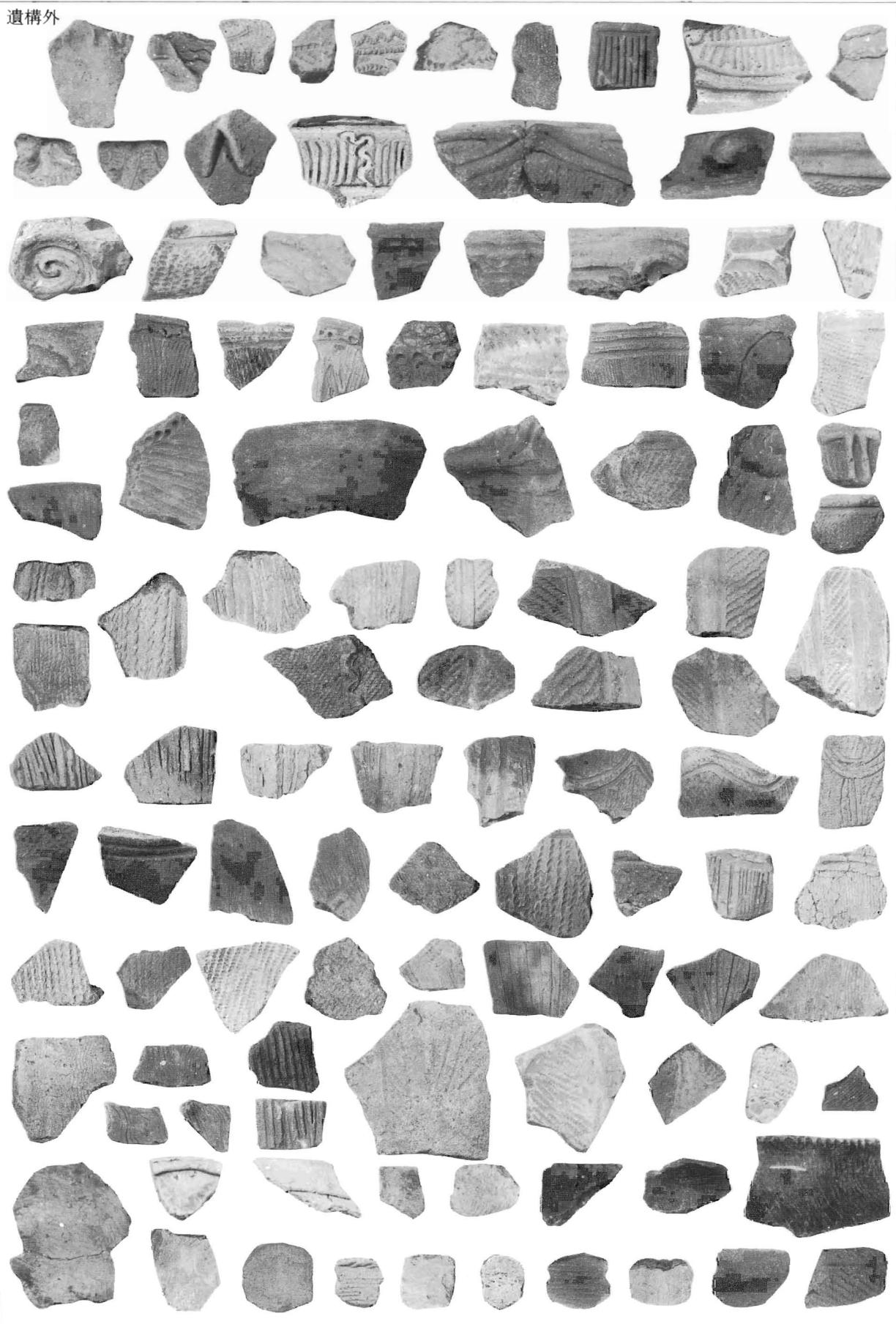


365D









志木市の文化財 第30集

志木市遺跡群 11

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 2001(平成13)年3月30日
印刷 株式会社 白峰社